

の賞すべきものあらず、九時半マルオ驛に着す、是より渡船に駕して海峡を渡る、マルモの街燈の未だ隠れざる内に、噠都コッペンハゲンの燈臺を認む、時に烟月微茫、清風船に満ち頗る幽趣あり、

やる舟路マルモのあかり消えぬ間に、コペンハゲンの燈火を見る、
烟月微茫、檣影孤、風收噠海、靜如湖、電光一射、燈臺照、暗裏分明、
認、忽、都、

此間汽船來往甚だ頻繁なり、十一時半コッペンハゲン市に着船す、税關の檢閲を終りて旅店を探るに、大抵皆空室なし、一時後漸く入宿す、

七日晴、終日市内を散歩し、王宮、市廳、寺院等を一覽し、チボリ公園に入りて小休し、ラウント高塔に登りて全市を一瞰す、而して何れに向て遠望を放つも、山影の眼に觸るゝなし、同市は人口五十一萬四千を有し、スカンデナビヤ三國中の最大都なり、毎夕チボリ公園内には、納涼及び

遊覽者群集す、其内には種々の興行もの有て、我淺草公園に似たり、午後八時伯林行の急行に投す、市外は凡て農田にして、風車の轉々として晚風に舞ふを見る、夜に入り明月清風の旅情を慰むるあり、之に加ふるに前後二回汽船にて汽車を渡す處有て、壯快極りなし、當夕所吟數首あり、

一路秋生冷客衣、風車轉々夕陽微、忽邊城外茫如海、遙見牧童引犢歸、

噠國江山送壯遊、客程夜半到津頭、汽船忽載汽車去、夢覺初知入獨州、

波の上を今宵汽車にて渡りけり、明日は船にて山に上らん、

(四十七) 獨逸内地所見

八日晴、暑氣甚し、午前七時伯林着、ブリントツアルブレヒト旅館に宿す、

終日市街及び公園を散歩し、今昔の變遷如何を觀る。地下鐵道の布設と自動器械の流行は先年未だ見ざりし所なり、スカンデナヴィヤ三國にも自動器械流行し、料理店にて食品を得るに人の手を煩さず、自動器械を用ひ、停車場にて郵便切手を賣捌くに自動器械を用ひ、昇降器にて階上へ上下するにも自動的なる等は意外に感せり、又伯林街路には自動靴を穿ちて來往するものあるも、始めて之を見る、伯林客中作一首あり

街路如碁又作又、鬱然四十萬餘家、行吟林典街頭月、看醉智阿
園裏花、

九日炎晴、正午十二時伯林發車、午後三時半ライプツヒ市に着す、友人エツシエー氏自動車にて歡迎せらる、即時に同氏の宅に至り、冷茶を喫す、獨逸にては暑中は氷水にて茶を喫すること流行するといふ、是より博物館、公園、遊覽臺、植物園等を巡覽す、

獨逸路は海より廣き大野なり、雲のはてまで山かけもみず

夜に入りて更に同氏の宅にて晚餐を了り、食後街路を緩歩す、時に明月高く懸り、清風熱を洗ひ來る、(當夕満月)茶亭に休憩すること夜半に及び、一時の急行に駕してミュンヘンに向ふ、其間エツシエー氏の周到なる注意と懇特なる款待を辱うせるは、大に深謝する所なり、

十日炎晴、午前十時ミュンヘン着、金子恭輔、井出健六、瀬木本雄諸氏の出迎あり、是より瀬木氏の案内にて、博物館、美術館、公園、宮城等を周覽し、有名なる麥酒店ホフブランハウスに至りて喫飯せり、宿所はクリストル、ホスピッツ旅館なり、當夕井出氏の寓所に於て、久振にて牛鍋の日本料理を試む、

十一日晴、前日の如く瀬木氏の案内にて遊園及び寺院等を一覽し、更に汽車にてスタールンベルヒ湖に遊ぶ、湖水の大は我函嶺湖の如し、其

風景は瑞西の模型と稱して可なり、時に詩歌各一首を浮ぶ、

明邊城外有仙關、舟過湖光巒影間、日欲斜時雲亦斷、一青影是瑞州山、

暑き日に木陰たよりて知りにけり、蟬のなかざる里もありとは、

(四十八) 瑞西の風光

十二日晴、午前十時金子と共に、瑞西に向て發車す、リンドウ驛より汽船に移り、税關の檢閲を受く、湖濶く且つ長く、我琵琶湖に似たり、ローマシオル驛より更に汽車に駕し、午後五時半ツォリヒに着す、途上は比較的平坦にして、車外只農田を見る、而して遠近に連山の起伏せるを望む、ツォリヒは目下觀光の客、四方より雲集し、旅館殆んど空室なし、晩に至り納涼の客湖畔を徘徊し、橋上の來往織るか如し、

瑞溪窮處水成灣、更駕湖舟過石關、風拂殘雲晚來霽、長空一碧

是伊山、

畫にかきしよりも妙なる景色とは、瑞西の山の姿なるらん、

八月十三日(日)晴、金子と手を分ち、單身獨行してゼネブに向ふ、途中ベルン及ローサンに暫時足を停めて遊覽す、ローサンの山水の雄大なるは、ツォリヒの比にあらず、午後六時ゼネブに着し、インターナショナル旅館に入宿す、同市は小巴里と名くべき美觀を有す、屋高く街濶く、旅館の頗る美大なるものあり、之に加ふるに湖上の風光の眞に畫を欺くが如きものあり、其湖集りて川となり、市を一貫して流る、之を接続するに幾條の橋路を以てす、夜に入れば岸頭無類の電燈は清流に映射して、一段の風致を添ふ、蓋し風光の明媚にして且つ清雅なるは瑞州中第一位にあり、野吟一首を得たり、

暮山已被紫煙埋、一碧湖光映兩崖、此景何人能守坐、復鞭疲脚
步前街、

暑氣夜に入るも猶ほ減せず、聞く所によるに瑞西にては本年位の暑氣
は、幾年にも経験せざる所なりといふ、

(四十九) 佛國里昂及び巴里行

十四日晴、正午十二時セネブ發車、佛蘭西に向ふ、瑞西と佛國とは、時間
に一時間の相違あり、國境にて税關の調査を受け、午後五時半里昂に着
す、途中車窓より一望するに農田多くは桑園なり、

走出瑞山入佛原、隴頭無處不桑園、午風漸動車窓冷、看過廬尼
河上村、

停車場前に旅宿を定め、夜に入るまで市街を散歩す、

十五日炎晴、里昂は二條の清流之を貫き、數條の橋梁之に懸り、且つ一
方の岸頭は丘山を成し、風光に富める市街なり、午前寺院、博物館等を一
覽し、午後我領事館に至り、副領事木島孝藏氏を訪はんと欲せしも、同館
閉鎖せられ、入ることを得ず、自ら察するに暑中休暇にて同氏旅行不在
ならんと思ひ、空く旅館に歸りしか、後に聞けば同氏は當日余の來るを
知り、自宅にて特に日本食を整ひ、終日待設け居られし由、同氏の宅を訪
はざりしは實に遺憾なり、

一水二條貫市流、岸頭茶店幾層樓、夜深猶聽電車走、人在萬燈
光底遊、

當夕は獨歩して江上の納涼を試む、夜景亦好し、市中を貫流せるロンドン
河は、水清く、色青く、大に風光を添ふるも、其兩岸に連繫せる船屋は皆洗
濯屋なるは、稍殺風景を感せり、

十六日晴、午前九時出發、急行にて巴里に向ふ、野外桑園多く、又葡田あり、連日の炎晴、數旬の間降雨なく、野草枯れ、塵埃漲る、午後六時着、旅館ニントゼームス、ホテルに入る、當夕は市中に遊歩を試む、

十七日晴、午前公園に遊び、歸路我大使館を尋ね、栗野大使に面會す、午後セロン河南に散策し、夜亦市街を緩歩して歸る、

巴黎城外歩林鼻、英弗塔尖^{エインズ}依舊高、自動截風來又去、車聲恰似萬松號、

青葉しける林に入れば電燈の光りも染みて綠りとぞなる、

巴里も伯林と同じく、前後三回歴遊を重ねしが、其都度多少の改變あるを見る、地下鐵道の布設と自動車^{自動車}の流行は第一に注意を引けり、自動車は各都會に流行せるも、巴里最も盛んなるを見る、又巴里は珈琲店葡萄酒の名物なりしが、近年英國風及獨國風之に入り、市街にイングリッシ

ユバーと題する酒舖あり、又ミュンヘンビールと題する酒店ありて、レストランに於てビールを傾くるもの多く、酒店に入りて酒の立呑するもの多きを見るは、英獨の感染なるべし、市中人車の雜沓せるも先年と大に異なるを覺ゆ、而してセロン河畔に古書を鬻く露店あると、エロンエル塔尖の雲を凌ぎて聳立せるとは、舊時の觀を留む、

(五十) 龍動歸行、遺跡探檢を繼續す

十八日晴、午前十時巴里を發し、急行にて龍動に向ふ、佛のジープ驛と英のニューヘブン驛との間の海峡は、汽船を以て連續す、船上にあると四時間なり、ニューヘブンにて税關の檢閲を経て更に乗車し、七時後龍動ピクトリア驛に着す、水谷大場兩氏の此に迎ふる有て、共に驛前の料理店に入りて會食し、是より自動車を雇て、スタンフォールド、ヒルなるサ

ンマース氏宅に歸寓す、同氏は避暑の爲に愛蘭及び蘇蘭地方に旅行して不在なり、那威ベルゲンより龍動に歸着する迄、二千八百五十八哩を過了せり、英國は當時大ストライキの最中にして、龍動の如き其同盟に加はりて罷工せるもの十萬人の多きに及べりといふ、之れが爲に汽車の運動を休止せる處あり、物價も其供給を缺ける爲に騰貴を來せり、各停車場内には兵隊の警備せるあり、恰も戦場に入るが如き形勢なり、然れども勞働者の暴行なきは文明的罷工と謂ふべし、

十九日炎晴、龍動も四十日間降雨なき爲に炎暑酷しく、四十年來未経験の大暑なりといふ、午後水谷氏と共に市外に至りて飛行器を一覽す、昔し人よもや夢にも見ざりけん、羽根なき人の空かけるなり、歸路雷雨に遇ふ、久旱の爲に草枯れ、木葉も枯死せんとするに際し、此膏雨あり、其喜は獨り農民のみならんや、

八月二十日(日)曜晴、水谷、大場兩氏と共に車行及び歩行して、セントジヤイル村落に至り、ミルトンコツテージを訪ふ、ミルトンは當時ロンドンの疫を避けて此に幽栖し、其間に傑作バラダイス、ロストを完成し、更にバラダイス、リゲインドを起草せりといふ、室内に遺書及び遺物を保存す、

詩賢避疫臥孤村、一夢結成千萬言、追慕遺風尋古屋、老婆爲我

說民敦、

此日往復五十二哩なり、歸路雷雨に遇ふ、生稻亭にて日本料理を會食して歸る、料理中に更科蕎麥を出せるは意外なりき、

二十一日晴、二回の雷雨の爲に氣候俄に秋冷を帶ぶ、郵船會社を訪て根岸支店長に面會ず、

二十二日晴、龍動北部ハイゲート墓地に至り、哲學大家スベンサー翁

の墳墓に拜參す、墓石大ならず、何等の裝飾なく、自然に同翁の性格を示すものゝ如し、翁の遺言により火葬に附し、遺骨を此に埋むといふ所感の詩二首あり、

墓門一過路三旋、尋到荒墳獨悵然、落葉蕭々天欲雨、秋風聲裏

吊前賢、

一生不娶避塵緣、心血凝成五大編、埋骨倫敦城北地、餘光千載

照黃泉、

歸路牧野義雄氏を其僑居に訪ふ、氏自筆のテームス川の月夜の景を示されたるに答へて、拙作を贈る、

君在英京耕畫田、常揮妙手感神仙、廷無河上朦朧月、忽放清輝

照大千、

二十三日晴、我領事館に至り領事に面會す、文豪及び史家たるマコー

レー氏の古屋をカムブデンヒルに尋ねたるも、探り得ず、

(五十一) 南米行準備

二十四日晴、當日リバプール出航の約なるベリシフツク會社汽船オ
ルコマ號は、ストライキの爲に延期の報を得たれば、當時漫遊中の坂谷
男爵をハイドパーク、ホテルに訪ふ、時に同氏に一詩を呈す、

不是尋常風月遊、觀歐察米獻皇猷、知君智海無涯底、納盡萬邦

經國籌、

今回の英國ストライキは空前未曾有なりといふを聞き、所感を賦す

三入英京見物情、逐年貧富失衡平、文明今日多餘弊、到處集徒

雷起聲、

集徒雷起とはストライキを譯せるなり、

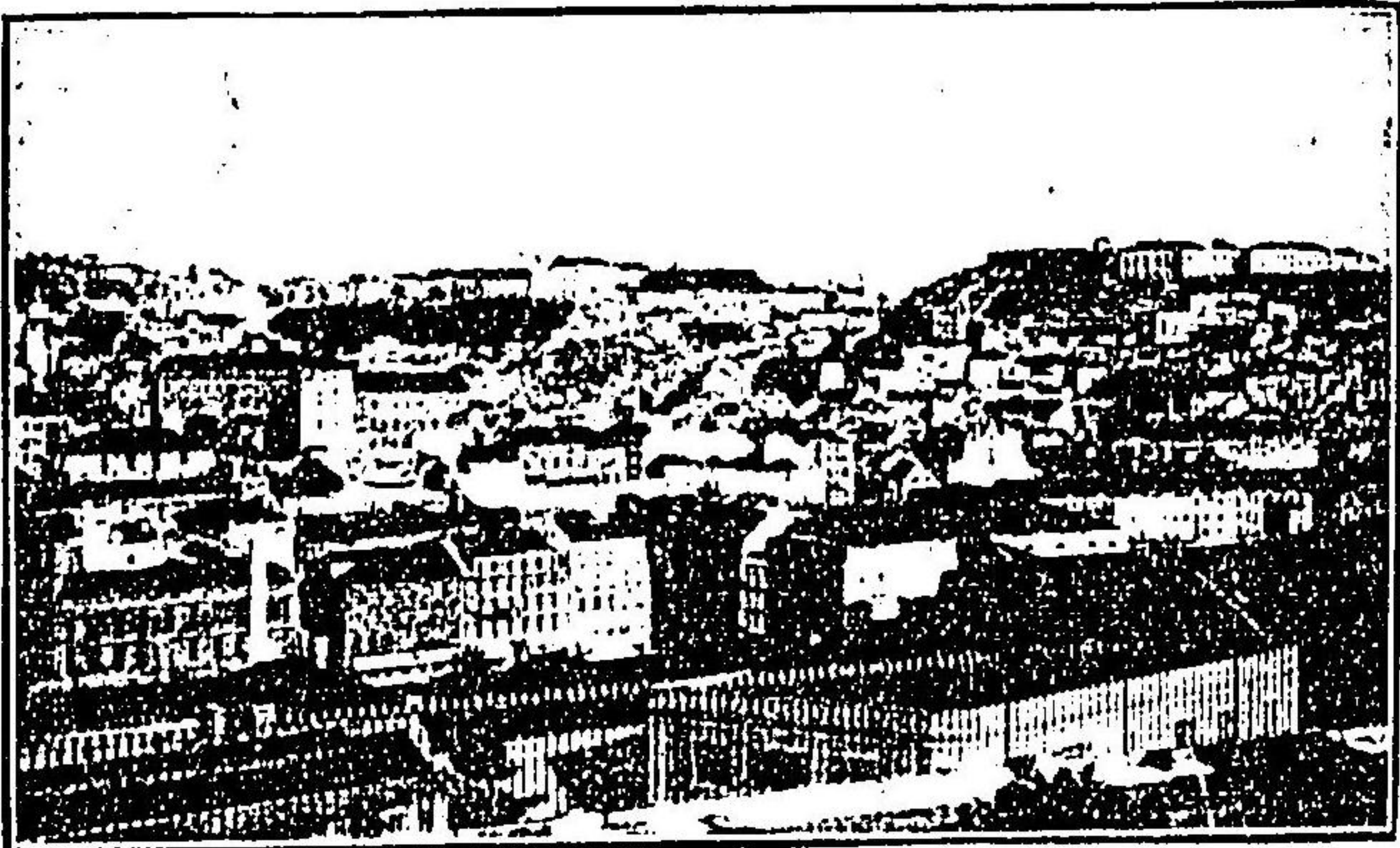
二十五日曇、汽船出帆の急電に接し、今日午後寓所を發し、ユーストン驛より六時の最大急行に投し、リバプールに向ふ、水谷、大場兩氏の送行あり、英國滞在中はサンマース氏の厚意を荷ふこと尠からず、又根岸氏の歡待を辱うす、別に臨み同氏に一作を賦呈す、

三遊龍動再逢君、氣煽依然欲拔雲、回想同窓皆已逝、共傾壽酒不知醜、

氏は同郷にして、其出身の學校も同一なり、其當時の同窓は大抵皆隔世の人となりたるに、海外に於て再度相會するは好縁と謂ふべし、當夕九時半リバプールに着し、レールウエーホテルに宿す、龍動より此に至るまで二百一哩の間、途中一回も停車せず、三時間半にて着驛せるは、其速力の大なるを知るべし、車窓所見二首あり、

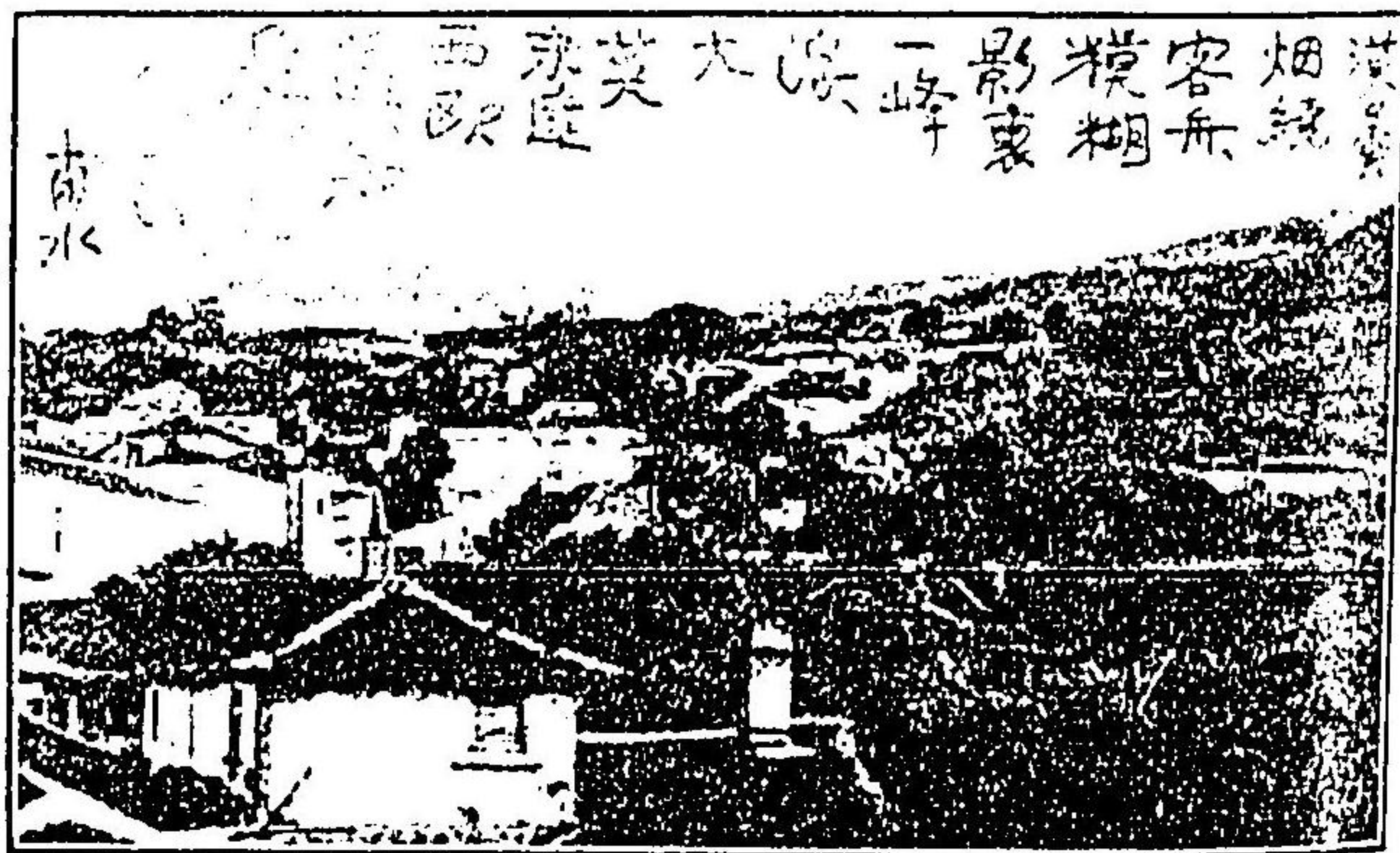
車外牛羊步夕陽、烟籠野草兩蒼々、英西風月何邊好、不在江山

(七十二)



市ンボスリ牙葡

(八十二)



島ーリナカ

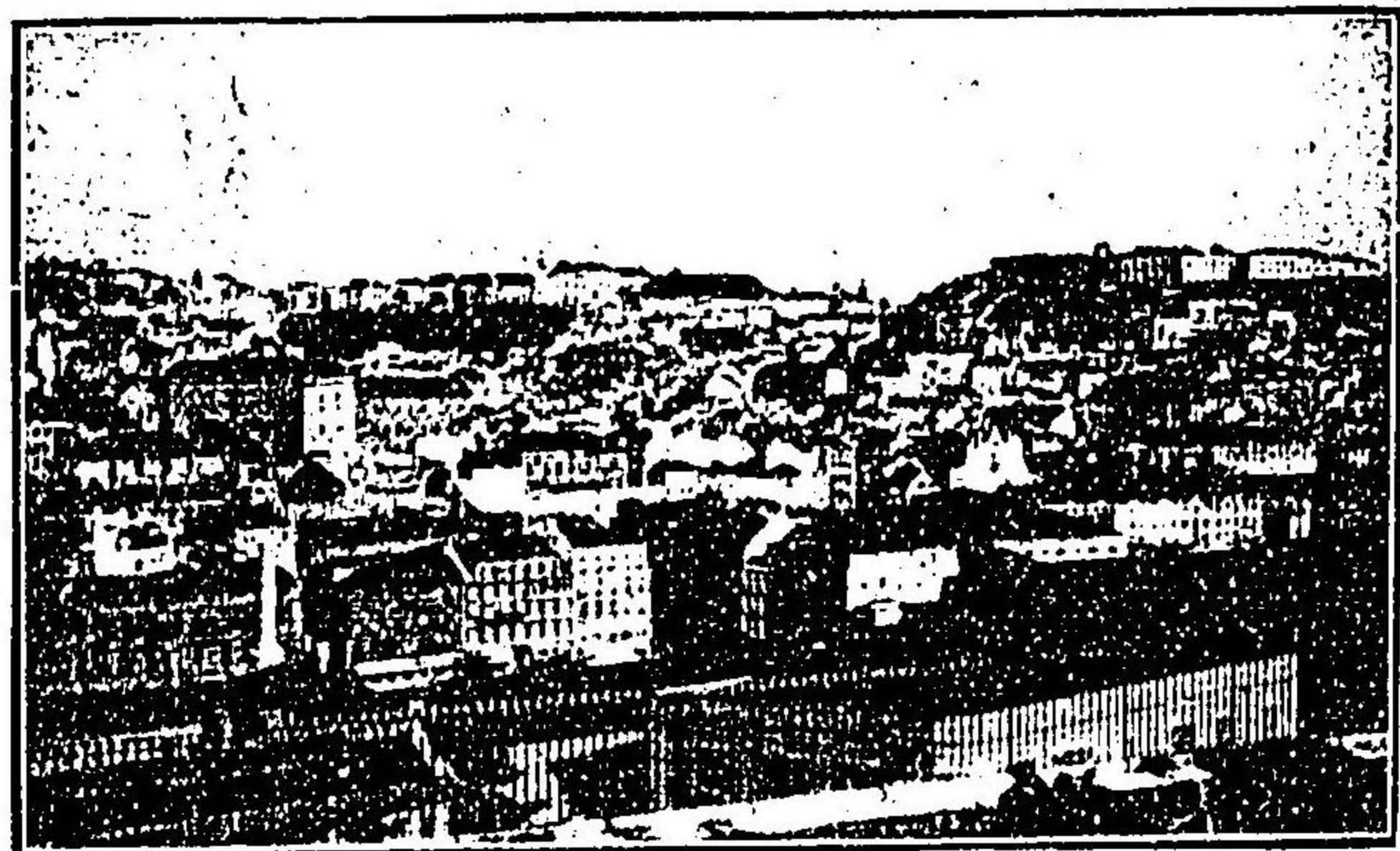
二十五日曇汽船出帆の急電に接し、今日午後寓所を發し、ユーストン驛より六時の最大急行に投し、リバプールに向ふ。水谷、大場兩氏の送行あり。英國滞在中はサンマリス氏の厚意を荷ふこと尠からず、又根岸氏の歡待を辱うす、別に臨み同氏に一作を賦呈す。

三遊龍動再逢君、氣焰依然欲拔雲、回想同窓皆已逝、共傾壽酒不知醒。

氏は同郷にして、其出身の學校も同一なり、其當時の同窓は大抵皆隔世の人となりたるに、海外に於て再度相會するは好縁と謂ふべし。當夕九時半リバプールに着し、レールウエーホテルに宿す。龍動より此に至るまで二百一哩の間、途中一回も停車せず、三時間半にて着驛せるは、其速力の大なるを知るべし。車窓所見二首あり。

車外牛羊步夕陽、烟籠野草兩蒼々、英西風月何邊好、不在江山

(七十二)



市ンボスリ牙葡葡

(八十二)



島ーリナカ

在牧場

英吉利は山川よりも青草の、牧の姿ぞいとまさりける、

二十六日曇晴時々少雨來る、終日市街を通覽す、秋冷客衣に逼る、

八月二十七日(日)曜雨、午前寺院を參觀し、午後オルコマ號に乗込む、以

下は南米行途上日記に譲る、歐洲大陸旅行中の五絶は左に蒐録す、

八月遊歐北、那山雪幾堆、溪頭移步去、樹下凍風來、(那威行路
所見)

歐洲欲盡邊、夜半日猶懸、握索攀山角、舉頭望極天、(極北夜半
望日)

船聲入樓穩、橋影映波明、巴里風光好、不如斯德城、(瑞典首府
即事)

噠郊連獨野、坦々望無涯、萬頃田園屋、如觀一局棋、(噠國郊行)

獨北路漫々、農田隨處寬、又知工業盛、烟柱聳林端、(獨逸野望)
 瑞州風月好、曉望最清新、山色明欺畫、湖光濃醉人、(瑞湖曉望)
 客裏尋巴里、會遊夢未除、世陰河畔路、依舊鬢陳書、(巴里偶成)
 勃婆街步、衣濕覺汗生、何藥能除暑、葡萄酒一傾、(同上)
 歐洲を一巡し、今日の盛況を見て賦したる一律あり、

文運駸々振古稀、百工萬學究精微、波頭無軌車能走、雲上有船
 人自飛、開拓鬼神幽裏道、發明造化秘中機、喜吾跋涉歐洲野、
 滿手拾新知識歸、

第七、南米行太平洋橫斷日記

(五十二) 佛國寄港

明治四十四年八月廿七日、午後五時オルコマ號に駕して、南米行の長途に就く、同號は一萬一千五百四十六噸の巨船なり、船内に昇降機ありて、人をして階段によらざるも、上下し得る設備あり、上等船客百四五十名、中等下等を合すれば約千名を算す、時に暮雨蕭々として至る、

阜頭風冷覺秋生、暮雨蕭々送我行、仰望天涯南米遠、不知何日到遼城、

遼城とはブラジル首府リオジャネロをいふ、

二十八日曇、朝氣冷かなり、午前中は英國南端デボンシャイヤ州の南岸に沿て東走す、夜に入りて佛國西岸の燈臺數光に接見す、其光力の強

きものは雷時の電光を望むが如し、時々汽船に逢遇す、

二十九日晴、氣候稍暑く、正午室内七十四度に昇る、無数の漁舟帆を掛けて走るを見る、午後五時佛港ロシエールに入る、上陸し郵便を投して歸船す、別に見るべきものなし、當夕徹夜して荷物を積み込、其多くは葡萄酒なり、是よりポルドーまで五十哩あり、

一痕新月印秋濤、浦上清風拂鬱陶、英酒獨醪吾已飽、佛南今夜醉葡萄、

三十日晴、午後三時出港、風あれとも強からず、波あれども高からず、滿船清涼、半輪の明月高く西天にかゝる、

(五十三) 西班牙及び葡萄牙寄港

三十一日晴、暑氣大に加はる、午後三時西班牙港コルナに着岸す、同國

屈指の海港なり、人口四萬餘、新舊兩市街より成る、家屋は三階四階にして、歐洲他の都會と異なることなし、只四壁赤く塗り、屋上赤瓦を用ひ、白赤相映ずる處、稍人目を引く、市外に林邱あり、草野あり、碧灣之を繞り、大に風光に富む、是よりサンチャゴ市まで二百〇九哩あり、此に有名の巨刹ありて、信者四方より雲集すといふ、コルナ港即事一首あり、

船破長風入碧灣、林邱一帶是西斑、港頭畫屋連青野、望裏紫烟圍暮山、

獨り此港のみならず、村落に至るまで白壁赤瓦を用ふ、故に左の所詠を得たり、

西州將盡處、石屋繞山根、白壁映丹瓦、看疑畫裏村、

西班牙の名物は乞食の多き一事にして、寺院の門前には群をなして、強

請する状あり、依て更に又一吟す、

西班牙山繞海、點々屋成紋、何寺塔尖聳、門前乞食群、

午後六時發錨す、清風暑を洗ひ、涼味津々たり、

船窓獨坐晚凝眸、環海青山未入秋、一榻清風吾事足、半輪月下
去西州、

九月一日朝未明、船已にビゴ^{ビゴ}港に入る、同港は猶ほ西國の管内にあり、人口僅に一萬七千なれども、要港の一とす、市街は一圓邱孤山を繞りて上下に隣比し、四層五層の石屋、或は高く或は低く、其間に交ゆるに樹木を以てし、又背面に山岳の雲を衝て屏立するありて、頗る風致に富む、
船入西陽尾後津、一圓邱畔屋成隣、回首青嶂衝雲立、滿目風光
洗客塵、

物品を販賣する小舟來りて本船を圍繞す、下等客乗船するもの百餘人

に及ぶ、皆南米に移住するものなり、午前十時出港、午後三時葡萄牙レキ
ソス灣に入津す、是れ葡州の一大都會たるオポルト^{ポルト}市、或は單にポル
ト^{ポルト}とも呼ぶに出入する港口なり、同市は人口十七萬を有し、此港を距
ること三哩あり、港口は繞らすに防波堤を以てし、背面に林野を控へ、地
形多少の高低なきにあらざるも、概して平原なり、家屋は二階又は三階
を限りとし、屋上すべて赤瓦を用ふるも、壁色は西班牙と同じからず、遠
山は雲烟に隔てられて、望中に入らず、寒暖は八十度以上なり、周圍に樹
木の鬱蒼を見るは、聊か趣を添ふ、

保都城北路、樹滿晝陰々、港上清風足、我來此洗襟、

時間なき爲にオポルト市まで往復せざりしは遺憾なりとす、下等船客
群をなして入船す、其多くはデック、パッセンジャーなり、西班牙と葡萄
牙とは言語風俗に少異あるのみならず、地勢おのづから異同あり、前者

の邱山多きに對し、後者は比較的平坦にして、野色一面に青し、左に客中所見一首を掲ぐ、

壯遊何日復歸東、九月歐南寄此躬、草野如春青一面、葡山猶未

接秋風、

午後七時發錨す、

(五十四) 葡國首府リスボンの實況

二日晴、午前七時船已にリスボン灣に入る、朝食の終るを待ちて船客一同上陸す、市街は人口三十萬餘と稱し、其區域數哩に跨る、地勢は一帯の長丘にして、前に海峽を横へ、對岸に陸地を控へ、頗る風景に富む、家屋は街路と共に高低ありて、四階五階の樓多く、壁色は或は白く、或は赤く、或は青黄、或は紋様をなし、遠見甚だ美なるが如きも、近く接見すれば決

して美ならず、室内は不潔の家多く、路上には敝衣を着たる貧民多く、龍動東部の窮民窟を見るが如し、街路は一般に狹隘にして、電鐵縱横に通じ、電車織るが如きも、其行人を傷害せざるは僥倖なり、衣食住共に不潔なるの結果、異様の臭氣を放つ、恰も支那市街に入るが如き思をなさしむ、西班牙及び葡萄牙人は髮黒く、眼亦黒色を帯び、東洋人に似たる點あり、只顔色の白さだけは異なる所なり、街上の婦人を見るに、頭に風呂布を被り、其上に物貨を戴き、前に前垂をしめて來往す、其有様も亦東洋に同じ、露店には大傘を立てかけ、其下に果物食品等を販賣するも亦東洋式なり、要するに其市街其風俗及び商店は、西洋風に印度及び支那風を混和せるものと見て可なり、物價は一般に安きも、外國人に對しては廉ならず、市外に接したる處に、樹木の繁茂せるあるも、其多くは熱帶樹にして、熱帶圏内の國に入るが如し、氣候は炎威強く、我三伏の時に異なら

ず、而して日光が敷石に反射して、殆んど行人をして眩せしめんとす。昔時にありてはリスボン市街は世界中に壯美を以て其名高かりしが、今之を見るに、歐洲首府中の最下等に落ち去る。是れリスボンが斯く退歩せるにあらずして、他の市街の大に發達せるによる。リスボン偶成七絶一首あり、

千重屋向一灣開、 狹路鎖風々不來、 九月葡京猶苦熱、 樹陰傾盡
納涼杯、

又五絶一首及び和歌一首を得たり、

九月葡京路、 秋來暑未除、 納涼何處好、 熱帶樹陰廬、
リスボンの燈臺今は暗けれど、昔しは四方の海を照らせり、

(五十五) カナリヤ群島

午後四時出港、海上は風清く涼滿ち、更に炎暑を覺えず、殊に夜に入りて明月空際に懸り、清光を送り來る處、實に物外の趣ありて人をして吟情を動かさしむ、亦思郷の念禁じ難し、

壯遊心未脱炎涼、 每逢明月憶家郷、 秋風今夜團欒坐、 必向西方
獻壽觴、

九月三日(日曜)晴、終日渺茫、四涯一物の目に觸るゝなし、夜に入りて只明月と親む、

四日雨、朝來雷鳴數回、驟雨を送り來る、午前一回汽船に逢遇す、午後二時船カナリヤ群島中の主島ラ、バルマ港に入る、本島は其形我八丈島の如く、兩側に山岳ありて、右方は小に左方は大、其中間に沙原ありて之を連接す、市街も亦左右に分れ、右方は港街、左方は本街なり、家屋は一般に低く、二階造を限りとす、此島は阿非利加の屬島なるも、西班牙の所領に

して市街は全く西班牙式なり、住民の多數は西班牙人の子孫なるべきも、混血多く、其色赤黒くして、我々日本人よりも幾分か黒く見ゆ、又純然たる黒奴も之に雜居す、物産は果物及び煙草にして小舟に載せ、本船の周圍に集る、又織物を持ち來りて甲板上に陳列し、乗客に購買を勸む、各旅店より小汽船を出して來客を迎へ、或は小舟を漕ぎ來りて上陸を勸むる等、非常の雜沓を極む、石炭積載の爲に此に停船すること夜十時に及ぶ、當地はリスボンを距ること七百哩の海上にあり、寒暖は八十五度位にして、リスボン程に暑さを感じず、歐洲人の避暑避寒に來遊する處なり、山上には樹木なく、平地には熱帶植物の道路に傍て樹立するを見るのみ、港灣は弓形をなす、所吟左の如し、

一帯沙原結兩山、人家斷續擁弓灣、
客居誰不思鄉國、介立太西
鯨浪間、

波心孤島臥、繫纜到初更、
賣果舟來去、人呼海有聲

(五十六) 太西洋心の孤島

五日晴終日蒼波の間を航進す、汽船にも會せず、海鳥をも見ず、印度洋にて毎日船を逐て來れる信天翁も、太西洋に入りて以來更に眼に觸れず、風波穩晴、暑氣漸く加はる、夜に入りて天遠く晴れ、月高く懸るも、水蒸氣空中に滿ち、春天朦朧の觀あり、深更に至り露氣天に滿つ、今夜熱帶圈内に入る、

六日快晴、天を極めて一點の雲影を見ざるも、天氣何んとなく清明ならず、風も亦濕氣を帶ぶ、夜に入り露氣多し、深更に至り明月清輝を放つ、
天涯無友與誰親、橋際徘徊月一輪、
影入波心光萬頃、終宵照殺
遠遊人、

七日雨後晴夜未だ全く明けざるに、汽笛一聲客夢を驚す、時に船已にケープベルド島、セントビンセン港に入る、其島は葡萄牙の所領にしてカナリー島を距ること八百七十哩の洋中にあり、真に絶海の孤島にして、海底電信の要驛なり、南米に往復する汽船は、此に入りて石炭を積込み、帆船は風波を避く、全島山岳より成る、山峽の海に向て開きたる處に市街あり、赤瓦白壁、西班牙式なり、其兩側に海に傍て起伏せる邱山は、草木絶無、燒後の地を見るが如く、赤土にして黒色を帯び、實に殺風景を極む、時に雨來り雲集り、遠山を望むを得ず、黒奴船外に蟻附し、乗客に向ひ、銀貨を海中に投ぜんことを乞ふ、之を投ずれば、彼忽ち水中に入り、其貨を拾ひ得て歸る、是れ彼奴の唯一の技術なり、印度コロンボ、港、亞拉比亞アデン港に於けるが如し、此地黒奴多く居住す、其港口に一大巨巖の波心に突起せるあり、我小笠原父島の港口に似たり、之を鳥巖と名く、蓋

し其形より出でたる名稱ならん、其頂に燈臺あり、同島の所詠一首を掲ぐ、

絶海孤津船作群、雨懸浦上望難分、島居却有閑中趣、朝浴潮風

夕醉雲、

午前八時出港、河豚群をなして波間に飛ぶを見る、又一隻の汽船に會す、正午室内の温度八十五度、夜に入るも減熱せず、夜半八十四度なり、然れども甲板上天には清涼の風來り、炎暑を感せず、當夕は満月なれども、微雲に妨げらる、

(五十七) 赤道を横斷す

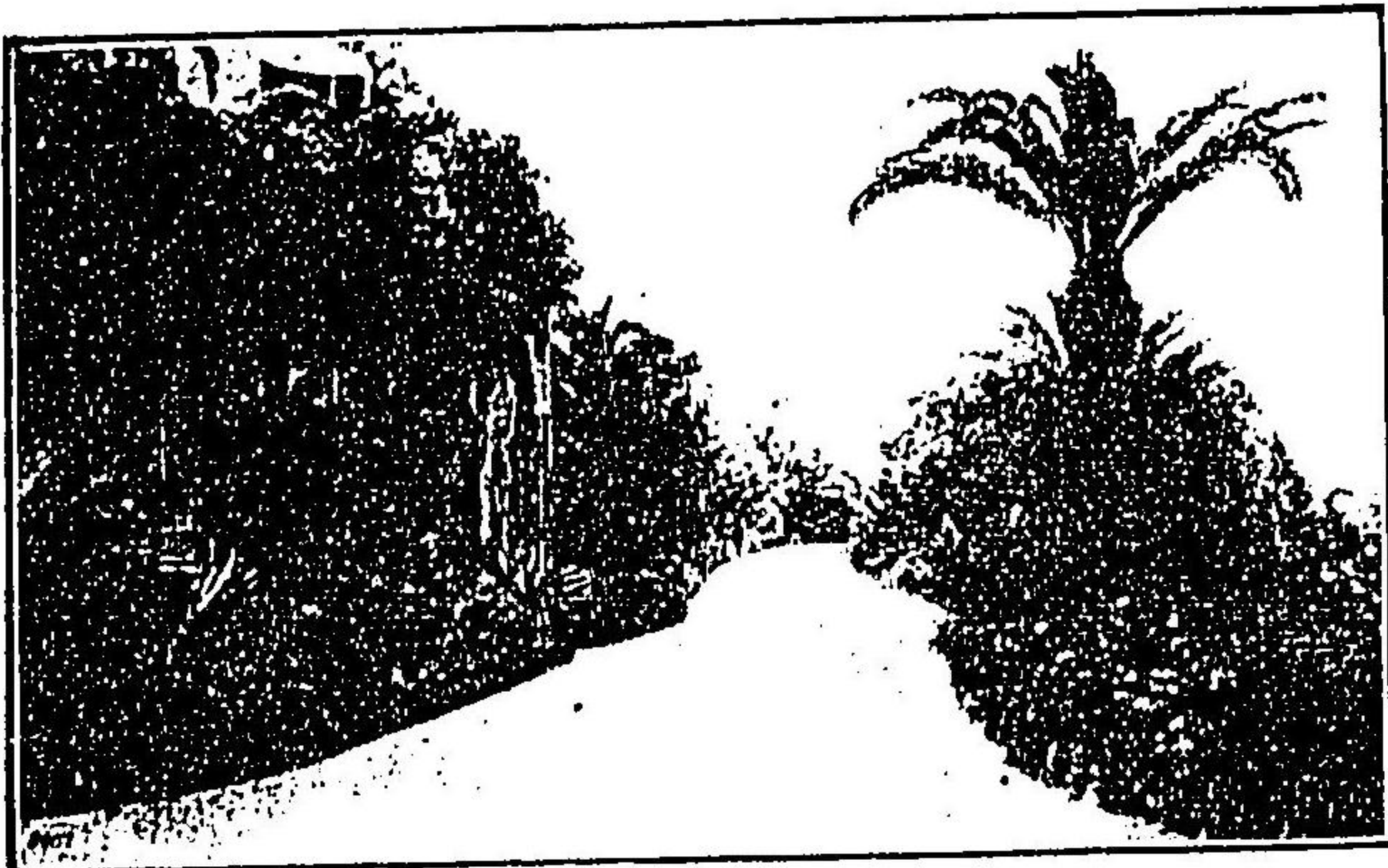
八日晴、午後驟雨ありて稍減熱す、日夜一鳥の飛ぶなく、一帆の浮ぶなく、満目只渺茫たり、赤道已に近きにあれば、晝間短く、午後六時半夜暗に

入る常夕亦浮雲月光を遮る、甲板上にて船客の舞踏會あり、
 九日晴、正午太陽正しく頭上にあり、船北緯四度半に達す、終日南風稍強きも、波高からず、滿船清涼を覺ゆ、當夕八時汽船の五六丁離れたる處を通航するに會し、船客互に呼應して過ぐ、夜半仰ぎて明月を望むに、少しく頭上よりも北天に懸るを見る、熱帯に入りて賦したる詩歌各一首あり、

大西洋上客舟輕、遙向太陽直下行、電扇送風々亦熱、氷和麥酒
 幾回傾、

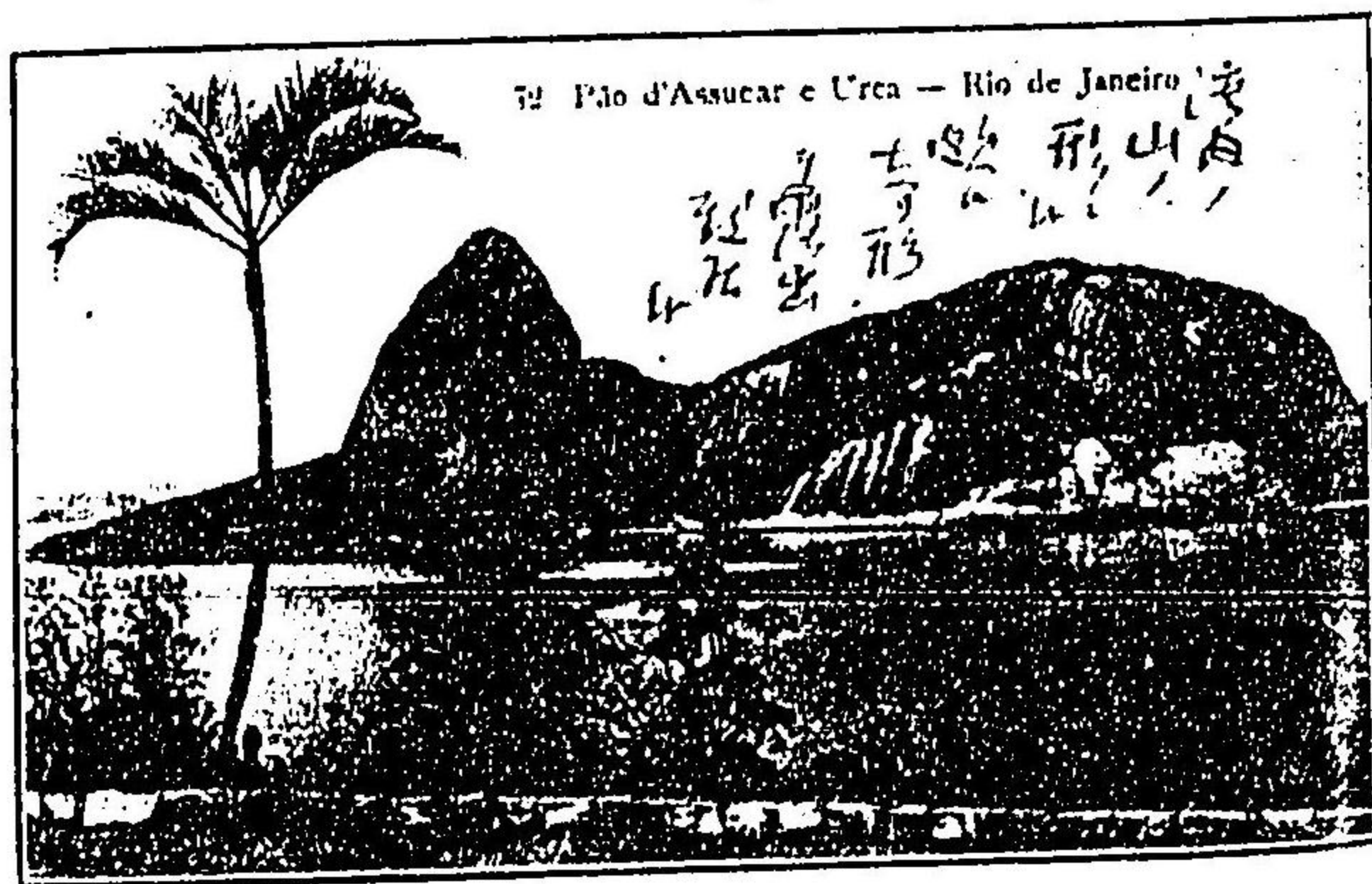
赤道の雲にほへる紅は、夕日のそむる錦なるらん、
 九月十日(日曜)晴、午前禮拜式あり、九時半赤道を横斷す、
 我身堪笑似虚舟、漂蕩任風不暫留、横斷大西洋上路、復踰赤道、
 入南球、

(九十二)



マルバラ島孤洋西太

(十三)



口港オリ府首ルジラブ米南

(九十二)



マルバラ島孤洋西太

(十三)



口港オリ府首ルジラブ米南

入る常夕亦浮雲月光を遮る甲板にて船客の舞踏會あり、
 九日晴正午太陽正しく頭上にあり船北緯四度半に達す終日南風稍
 強さも波高からず満船清涼を覺ゆ當夕八時汽船の五六丁離れたる處
 を通航するに會し船客互に呼應して過ぐ夜半仰ぎて明月を望むに少
 しく頭上よりも北天に懸るを見る熱帯に入りて賦したる詩歌各一首
 あり、

南半球五萬哩

一六〇

太西洋上客舟輕、遙向太陽直下行、電扇送風々亦熱、氷和麥酒
 幾回傾、

赤道の雲にほへる紅は夕日のそむる錦なるらん、
 九月十日日曜晴午前禮拜式あり九時半赤道を横斷す、
 我身堪笑似虚舟、漂蕩任風不暫留、横斷太西洋上路、復踏赤道
 入南球、

終日南方より涼風を送り來り、寒暖は晝夜共に八十一二度なり、赤道直下として、溫度低し、但し熱帶に入りて以來、晝間と夜中の溫度室内に於ては殆んど高低なし、

十一日晴、日月を北天に仰ぐ、風軟かに波靜かにして、氣候亦甚だ暑からず、午後遙に汽船を望む、當夕船中の無聊を慰むる爲に大合奏會あり、十二日晴、好風穩波連日の如し、昨日正午より今日正午まで一晝夜間に我船三百九十一哩を航走せり、是れ今回の航海中最長距離なり、午後他の汽船に會す、當夕は盛んなる競裝行列ありて、乗客中黒奴に化するものあり、印度人を擬するものあり、支那人を裝ふものあり、或は日本服を着し、或は獸面を被り、意匠を凝らして奇裝を競ひ、列をなして甲板を一巡し、後に投票を行ひ、最も多數の喝采を得たるものに賞品を與ふるなり、甲板上には幕を張り、旗を掛け、日本式ホウヅキ提燈數十箇を點し、

盛んなる裝飾を施せり、夜半後一時過まで賑へり、南米航の無事を祝する爲なり、當夜深更に至り、半輪の月を望むに、我日本にて望むとは其形を異にし、月球の左半面にあらずして、下半面に光を生せるを見る、(當夕は舊曆七月廿日なり)

(五十八) 南米に接近す

十三日晴、北風船を追ひ來り、暑氣凌ぎ易し、朝來鯨魚の潮を吹きて走るを見る、今回の漫遊に關し、所感を綴りたるもの數首あれば、之を左に合録す、

欲極鵬天鯤海陲、雲栖露宿送生涯、昨探濠北阿南勝、今討歐山米水奇、

堪笑世間歎白頭、吾生老後未曾休、堂々意氣誰能壓、一喝將吞

五大洲

五大洲中皆我居、終生北馬又南車、老來漸脫腐儒病、不讀死書

讀活書、

單身跋涉幾山河、九萬鵬程無恙過、知否吾家遺法在、每逢好事

念彌陀、

今回はブラジル北部ペルナンボコ及びバイヤ兩港に停船する筈なるも、英國ストライキの結果發船延期せし爲に、右兩港を經由せずして、直ちにリオジャネロへ向け急行す、ペルナンボコ港は人口十九萬人を有し、南米の最東端にあり、其市街は小舟にて來往するを得るを以て、西半球のベニスベニスの稱ありといふ、バイヤ港は人口二十萬を有し、上下兩市街に分れ、上市は丘上にありといふ、食事に多量の唐辛を用ふる處なりと聞く、

十四日晴、朝來南米の山色蒼然として船窓に映す、午後一時リオジャ
子口港に入る、偶然一作を浮ぶ、

歐洲未足洗塵襟、更向米南遙討尋、夕日浴波光起伏、潮風動夏

暑昇沈、路過赤道節俄改、客入他球感自深、繫纜遼津秋九月、

一灣春色映檣林、

リスボンより諸港を經由して此に至る、其海路四千三百二十四哩、リバ
プールより諸港經由の里程五千六百八十四哩あり、航海中西班尼及び
葡萄牙より南米に移民するもの下等船客として乗込みたるが、其不潔
言ふべからず、全く豚小屋同様の生活をなせり、葡萄牙人殊に甚し、而し
て夜に入れば樂器を弄し、其周圍に男女集りて相躍る、其歌も其躍も我
盆躍に似たり、之を見物するは亦船中の一興なり、只臭氣の襲ひ來るに
閉口せり、

四月一日横濱出港以來、九月十四日ブラジル首府リオジャ子口に着
港せるまでの里程は、海陸合計三萬三千〇六十七哩にして、其中海路汽
船二萬九千百三十四哩、陸路汽車三千九百三十三哩なり

第八、南米東部紀行

(五十九) ブラジル首府リオジャネロ

の實況

明治四十四年九月十四日、南米ブラジル國首府リオジャネロ港に入船す、同市は面積九萬哩の間に跨がり、人口八十萬を有する大都會なり、其中五分三は白人種、五分二は黒赤人種となすも、其所謂白人種中に黒奴及びインデヤン土人の血の幾分の混ぜざるもの殆んど希れなりといふ、リオ港は灣の曲折多く、群巒連峯の之を圍繞するあり、又小嶼の散在するあり、之に加ふるに草木の繁茂せると、山容の雅趣に富めるとは、世界萬國の都會中他に未だ見ざる所なり、船の此に錨を投するや、田邊治一郎氏が代理公使藤田敏郎氏の命を帯び、船中に來りて余を迎へら

る、氏と共に短艇に移りて上陸せんとするも、多數の二等船客先を争ふて船を下らんとし、非常の雜沓を極め、奈何ともすべからず、着船後三時間を経て上陸し、下宿所に入る、時に午後五時、細雨漸く至る、寒暖六十八度、我梅雨の候の如し、リオ港は天然に港灣の美を有するも、築港未だ完成せずして、巨舶を埠頭に繋ぐ能はず、船の上下必ず小舟を用ひざるを得ざるは、其缺點とす、余が宿所は市街中なるも、溪山の間において、四隣静閑、眺望絶佳、夜景殊に好し、山腹及び海岸に亂點せる電燈、玻窓に映射し來る、

十五日晴、午後田邊氏と共に山縣商店、龍動銀行に到る、夜に入り豊島昌、出口峯一郎兩氏來訪あり、深更に至り、火光の窓に映するあり、驚き見れば失火なり、後に聞くに政府印刷局全焼せりといふ、當夜寢牀にありてリオ港の實況を詩を以て、寫出す、

遼港風光稱絕佳、山爲襟帶海爲懷、一灣千山路千轉、經緯電車
縫萬街、

山海抱街多凸凹、風光如畫耐吟嘲、不唯屋壁粧紅粉、人亦白黃
銅鐵交、

電車縱橫全市街に貫通し、何れの處に至るも電車の便あらざるなし、
其設備は米國式なり、街路狭くして高低あり、家屋は葡萄牙式にて、或は
白く或る赤く、或は黄なるありて、一見對畫の如し、二階乃至四階を限り
とし、高厦大館少なし、住民に至りては、白色、黄色、銅色、鐵色、黑白混色等あ
りて、七色に分つことを得といふ、是れ又一奇觀あり、

十六日晴午前美術館を訪ふ、建築は稍壯觀を粧ふも、内容は之に伴は
ず、觀るべき名畫なし、之に隣れる圖書館は頗る壯大にして、南米第一の
評あり、其前に巍立せる劇場は美且つ大にして、リオ市第一の壯觀を有

す、寺院、學校の建築の遠く及ぶ所にあらず、此一事を以て南米の事情の
一端を觀るべし、午後植物園に遊ぶ、市中より五哩あり、園内廣さも熱帶
植物のみ、濠洲の植物園に比すれば、數等を下る、只パルム樹の兩側に並
立して、數丁の長に及ぶもの、一種の趣を添ふ、最も炎天の遊歩場に適す、

(六十) 日本公使館を訪ふ

九月十七日日曜晴雨不定、早朝寓舎を出て市中の寺院(舊教)三四ヶ寺
を訪ふ、建築は壯大ならざるも、内部の裝飾は美を盡くす、但し參拜者多
からず、聞く所によるに當地は教育を受けたる男子は寺院に近かず、但
し舊慣によりて寺院の建築修繕等には競て納金すといふ、是より汽車
に駕し、ペトロポリスに至る、海拔二千尺の高地にあり、アパート式にて山
を登る、二時間を要す、各國外交官の駐在地にして、日本公使館も此にあ

り藤田代理公使の歓迎を辱うし、日本料理を以て饗せらる、館員馬場稱徳氏、濱口光雄氏に面會し、紀念の爲に二回撮影す、滿園の春色欄干に映し來る、細雨蕭々として到り、氣候稍寒冷を帶ぶ、

彼都自作別乾坤、繞屋林叢鎖世喧、九月米南春已滿、椿紅藤紫擁衙門、

其地山に踞し溪に跨り、幽邃閑雅避暑に適し、讀書に宜し、夜に入りて田邊氏と共にリオに歸る、リオ滞在に關しても公使の配意を煩はすこと尠からず、當地目下初春の候なれども、春花已に散りぬるを見て、一首を浮ぶ、

鶯の來鳴かぬ中に花ちりて、梅の葉しげるブラジルの春、

(六十一) サンパウロ行

十八日晴午後六時豊島昌氏と共に汽車に投じ、サンパウロ市に向ふ同市は當國第二の大都會なり、其距離二百五十哩餘、夜暗くして山光水色を吟賞するを得ず、

十九日晴朝六時サンパウロに着す、人口二十八萬あり、當地第一の物産たる珈琲の集散地なり、此地方に珈琲を培養せしは今より二三十年前にして、其原種は阿非利加里ペリヤ國より輸入せりといふ、爾來俄に盛況を來し、今日の市街をなすに至れり、街路狭く家屋大ならざるも、商工すべて活氣を帶び、將來大に發展する望を有す、是よりサントス港まで二時間を要するも、珈琲運輸の爲に汽車の往復頻繁なり、最初に藤崎商店に至り、代理人有川氏に會し、電車を假りて市街を通覽し、更に青柳郁太郎、上塚周平兩氏に會し、共に午餐及び晚餐を喫す、席上所懷一首を得たり、

孤客遠遊三保羅、偶逢邦友感懷多、豈圖南米塵深處、日本店頭
談大和、

午後州政廳に至り、局長に面會し、耕地見分の紹介狀を授かる、是より移民收容場を一覽す、其設備頗る完備せり、市外及び公園をも車上より一瞥す、當市第一の壯觀はやはり劇場なり、我帝國劇場よりも壯大なるを覺ゆ、

二十日晴、サンパウロより二百二十五哩を離れて、ガタバラと名くる一村あり、我邦の移民此に住して、珈琲採收の業に従事すといふを聞き、豊島氏と同車して此に向ふ、途上草原林野のみ、往々黒奴の瓦屋土壁の中に住するを見る、

伯陽一路野連空、草海茫茫望不窮、早晚欲開天賦富、無人之境
鐵車通、

午後五時着驛、耕地支配人サルトルス氏及び副支配人平野運平氏と相會し、共に便車に駕して、來賓接待所に至り宿泊す、晝間は蠅多きも、夜間は蚊聲を聞かず、其代りにランプのある所へは群蜂來り集る、寒暖は晝間八十度、夜間七十四五度なり、

(六十二) 珈琲耕地日本移民の狀態

二十一日晴、暑氣強く八十三度以上に登る、午前平野氏の案内にて馬上に跨り、耕地珈琲園を一巡す、目下採收期にして、日本人老弱男女共に之に従事す、採收高一俵に付手間賃一ミル(我六十錢)とす、多く採收するものは一日に三俵即ち三ミル(我壹圓八十錢)を得といふ、採收地より直ちに珈琲を水に流し、水力にて製造場に輸送する装置あり、此一村落の珈琲百八十二萬八千株ありて、小作人一戸に付平均五千株を作らしむ、

其小作料一ヶ年六百五十ミル(我三百九十圓)とす、而して採收料は此外なり、故に一家族此に住すれば、一年に諸生活費を除き、三百圓を餘すと難からず、總戸數二百五十戸、人口千五百人、伊太利人過半を占め、日本人之に次ぐ、日本移民四十戸にして、百四五十人之に住す、小學校あり、舊教寺院あり、醫師診察所あり、雜貨店あり、下等のホテルあり、耕地一覽の實況を詩に賦す、

一條赤路貫青郊、馬上無風塵自包、走入果林有相識、採珈人是
我同胞、

午後支配人の案内にて、事務所、珈琲製造場、糖酒製造場、醫院を一覽し、更に日本移民の居宅を慰問す、其國籍は山口縣、高知縣、和歌山縣なり、珈琲園は丘陵の高地にありて、遠望すれば茶林の如し、近く見れば其枝葉茶に似て其よりも大なり、高さ一丈に達するものあり、而して其實は茶

よりも小なり、村名ガタバラはインデヤン語にて鹿を義とすといへるを聞き、余は之を鹿原と名く、目下春期にして、暖靄朦朧たり、夕陽は霞中に入りて深紅色を呈す、夜に入り支配人の宅を訪問して謝辭を述べ、

二十二日晴、炎熱前日に異ならず、支配人及び平野氏途中まで送行せらる、午前八時發車、處々に野火を見る、枯草を焼くもの、如し、午後六時サンパウロに着す、上塚、相川兩氏我歸行を迎へらる、停車場にて喫飯し、兩氏及び豊島氏と手を分ち、更に乗車してリオに向ふ、ガタバラ行中豊島氏が通譯の勞を取られたるを謝す、車中紅塵の入り來りて、衣服爲に色を變せんとす、地質すべて赤土にして、乾燥すれば忽ち塵埃となる、其輕きこと灰の如し、

二十三日晴、朝六時リオ都に歸着す、終日寓舎にありて休養す、

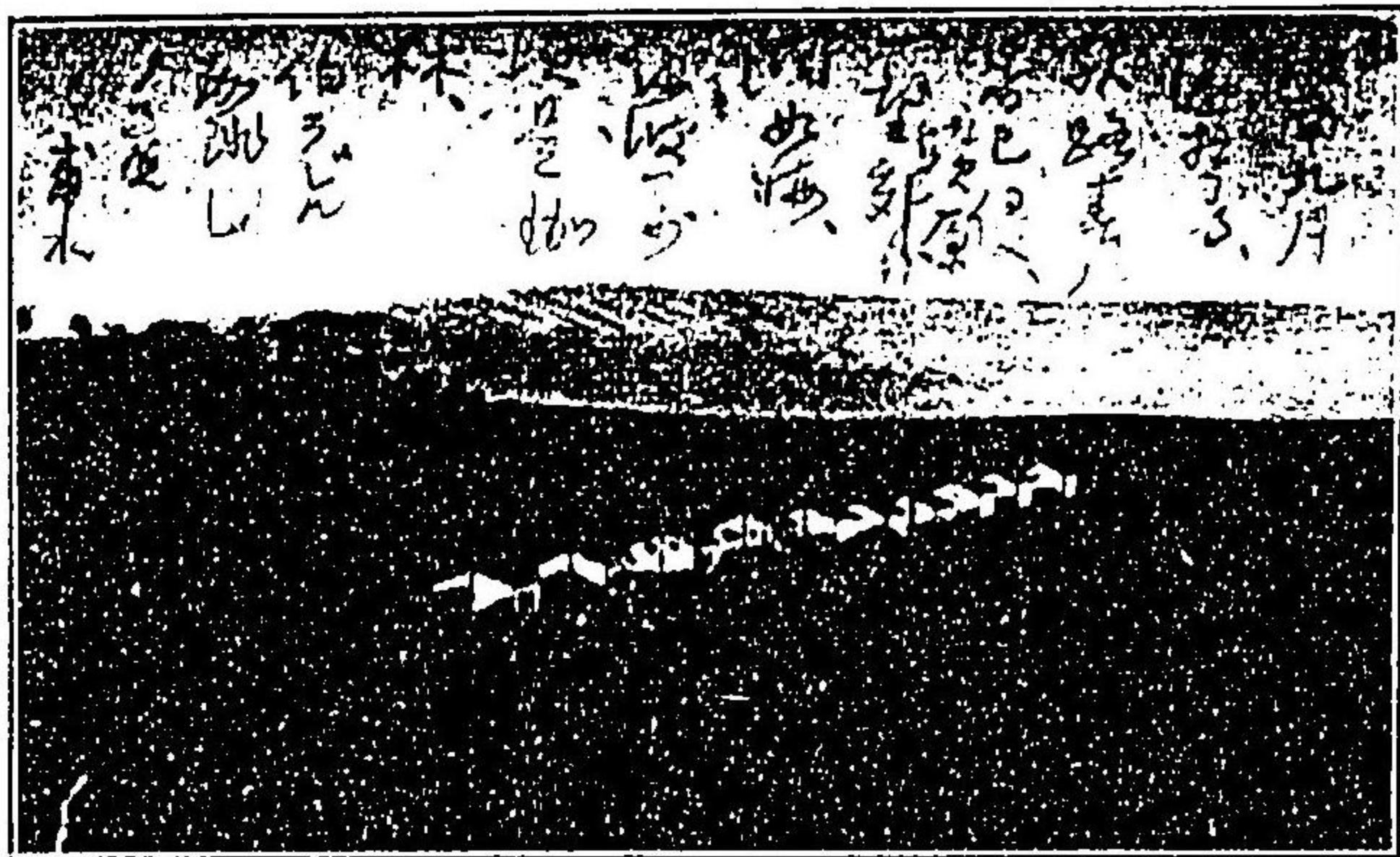
(六十三) コント教會を訪問す

九月二十四日(日曜)午前田邊氏の案内にて佛國大家コントの教會
 ポンチピストの會堂に到る、會長テセラメンデス氏の説教中なり、會堂
 は凡そ百坪ありて、數百人を收容すべきも、當日の參衆は總計五十二人、
 内女子八人のみ、是より博物館に移る、目下修繕中にて閉鎖す、館後の水
 族館を一見して歸る、其周圍は當地第一の公園にして、人工を以て風致
 を裝ひ、竹林の隧道の形をなせるあり、

二十五日雨、午前獨行して動物園に至る、里程四五哩あり、驟雨來りて
 衣爲に濕ふ、園内博さも動物の種類多からず、すべて斯る學術に關する
 ものは極めて幼稚にして、新開地の所設たるを免れず、

二十六日晴、午前田邊氏と共に當地第一の眺望臺たるコルコバド山

(一十三)



宅住民移ルジラフ

(二十三)



園集探園琲珈

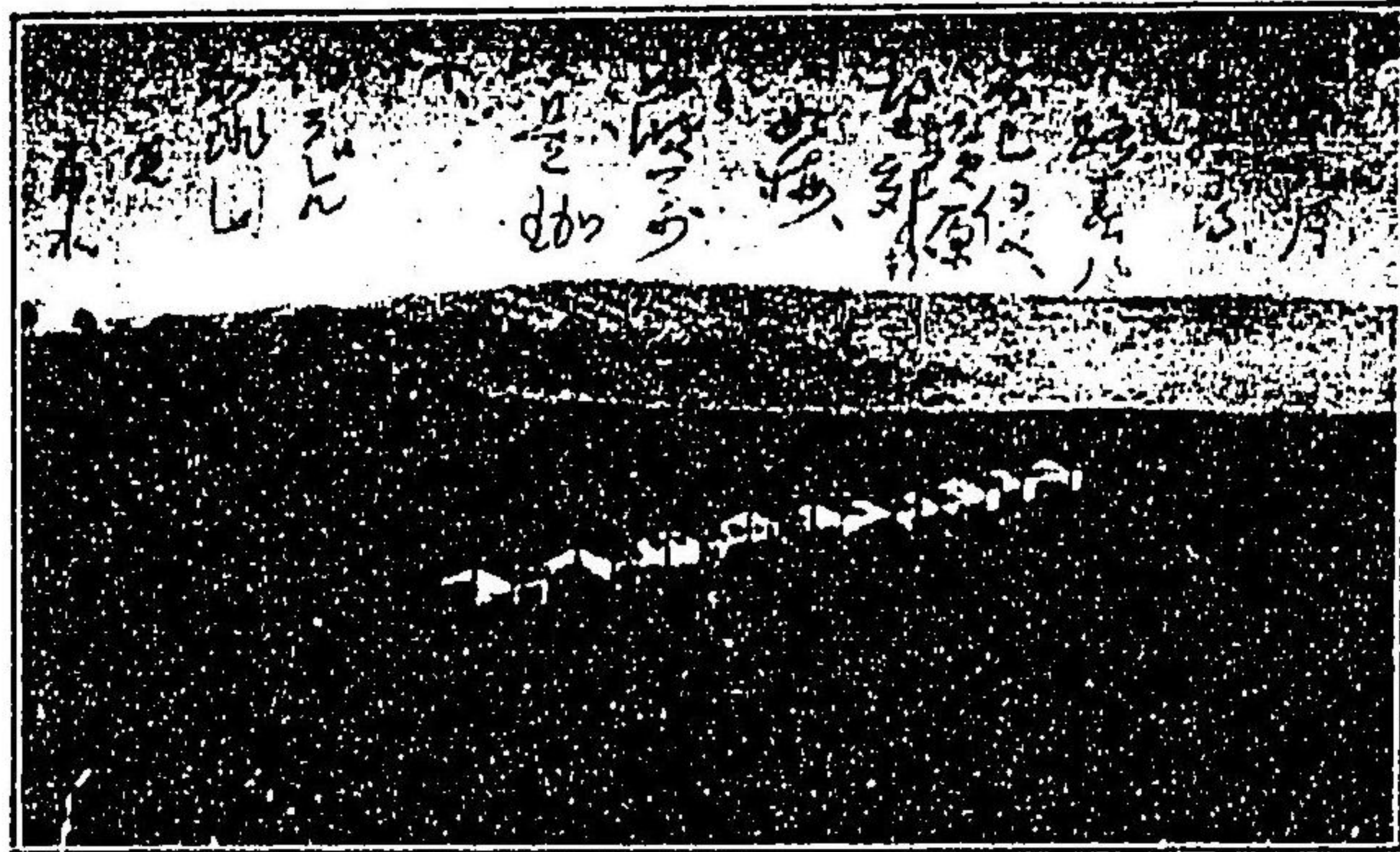
(六十三) ヨント教會を訪問す

九月二十四日(日)曜曇、午前田邊氏の案内にて佛國大家ヨントの教會
ポシチピストの會堂に到る、會長テセラメンデス氏の説教中なり、會堂
は凡そ百坪ありて、數百人を收容すべきも、當日の參衆は總計五十二人、
内女子八人のみ、是より博物館に移る、目下修繕中にて閉鎖す、館後の水
族館を一見して歸る、其周圍は當地第一の公園にして、人工を以て風致
を裝ひ、竹林の隧道の形をなせるあり、

二十五日雨午前獨行して動物園に至る、里程四五哩あり、驟雨來りて
衣爲に濕ふ、園内博さも動物の種類多からず、すべて斯る學術に關する
ものは極めて幼稚にして、新開地の所設たるを免れず、

二十六日晴、午前田邊氏と共に當地第一の眺望臺たるコルコバド山

(一十三)



宅住民移ルジラフ

(二十三)



園集採園琲珈

上に登臨す、其山容既に奇にして、帽子の形を有す、山嶺に一亭あり、登山客の休憩に備ふ、リオ津の全灣及び全街脚下に平敷す、

奇峰盡頭立、低首瞰遼都、脚下全街伏、恰如觀地圖、

一たひリオに遊ぶもの、此峰頂に登臨せざるものなしといふ、鐵路ありて此に上下するを得、午後再びポシチビズム會堂に至りて、會長に面會す、其語る所によるに、ポシチビストの主義は其本國の佛國には却て振はず、現に會堂を設けて布教する處は、英京龍動とリバプールと南米リオとの三ヶ所のみ、其中リバプールは龍動よりも盛んに、リオはリバプールよりも盛んなり、全世界のコント教會中、リオ教會が第一に位す、此教會に加はるものは成るべく肉食を廢して、菜食するを期す、飲酒は一切之を禁じ、珈琲及び茶も吞まざるをよしとす、飲用は牛乳と湯水を限る、但し強制するにあらず、戰爭を厭忌し、平和を主張す、自衛の爲に他國

と戦ふは今日の勢萬止むを得ずとするも、自國の膨脹を圖らん爲に、他の國を侵奪せんとするは、絶對的に反對なり、會員の結婚式及び葬式は此會堂に於て行ふ、結婚式は男初に女の前に跪きて誓ひ、女次に男の前に跪きて誓ふ、一たび結婚すれば、夫婦の間孰れが先に死するも再婚を許さずといふ、リオの市中に會員一百名、賛成者二百名あるのみ、其數僅少なるも、中等以上の教育ある社會なれば、比較的勢力を有し、政治上問題の起る毎に、必ず其意見を此教會に質し、之を新聞上にて公表する由、蓋し會員の少なきは其規律の嚴に過ぐる爲ならん、

(六十四) ブラジル國の視察

二十七日晴、午後一時半宿所を去りて汽船オリヤナ號に投ず、田邊氏余を送りて船中に至る、リオ滞在在中言語不通なるに拘らず、何等の不自

由を感せざりしは、全く同氏の好意に歸す、此に告別するに當り、一杯を傾けて深謝を表す、オリヤナ號は噸數八千〇八十六噸にして、船客上等四十人、中等下等七八百人あり、午後六時拔錨、灣内の夜景實に吟心を動かす、

遼灣風浪晚來恬、涼月印天形似鎌、入夜港頭却多趣、萬燈影裏

一峰尖

其一峰とは凝糖峰にして、奇巖突立の狀、恰も棒砂糖の形に類す、故に其名あり、或は云ふリオ都の山形は巨人の仰臥するの地勢を有し、凝糖峰は正しく其足端に當る、

此にブラジル首府を去るに際し、其地の實況如何を述ぶるに、國民の知識、教育の程度至て低く、文字を解せざる者七分の多きに居るといふ、甚しきに至りては數字をも解せざるものあり、言語は勿論、風俗、習慣盡

く葡萄牙に均しきも、現時の葡萄牙人よりは優等の地位にあり、隨て葡人を輕賤する風あり、物價の高きは世界第一と稱せらる、其原因は海關税の重きと勞働賃銀の高きとによる、平均の物價表を見るに、英國の三倍、日本の六倍なり、若し北部アマゾン地方に至らば、更に四倍の高價を命ず、鶏卵一箇四十錢、鶏一羽拾貳圓、牛乳一合六十錢、靴一足三十圓といふに至りては、何人も驚かざるなし、隨て收入亦多し、商店の小僧の月給凡そ三百圓なりといふ、要するにブラジルは世界中物價最高の國なり、依て左の小詩を賦す、

空糞入南伯、何處解吟袍、物價兼關稅、高於安嶽高、

當地に於て第一に他人の目を引くものは、各戸各室に日本の備前徳利に似たる色と形とを有する器物を置かざるなし、是れ飲用水を容るゝ器なり、巡査はスリコギに似たる棒を携帯す、男女共に物貨を運搬する

に頭上を用ふ、下等社會は木にて作りたる靴我邦のヤマト靴の如きもの(を)穿つ、烟草の其形其色、其臭氣の犬糞に似たるものあり、新月及び半月が月球の下邊に生じ、其形恰も鎌を倒に懸るが如し、鶏の夜十一時に鳴くも奇なり、目下春期にして椿花桃花を見ると同時に、藤花薔花を見、晝間蟬吟を聞きて夜中蟲聲を聴くも亦奇ならずや、食事に多く米を用ひ、米のスープあり、又サ、ギを食す、酒は糖酒を用ふ、菓子に我羊羹に似たるものあり、

(六十五) サントス港及びモン

ビデオ港の所見

二十八日晴、午前十時サントス灣に入る、河口を浜りて埠頭に着す、林樹鬱然たり、當港は珈琲の輸出地にして、岸上積て山をなす、

河口曲如蛇、市街連淺渚、埠頭一帶舟、皆載珈琲去、午後二時出港す、

二十九日雨終日大雨歇まず、四面雲烟に遮られて、一物を見る能はず、只海鵝の船を逐て来るを見るのみ、午前孤巖の海心に突出するを見る、晩に及んで雷鳴一回あり、南米の實況を七律を以て試吟す、

雨棹風車任去留、米南九月試春遊、
尼川橫斷三千谷、安嶽縱貫一百州、
地底猶埋天賦富、民間誰講國防籌、
茫茫沃野無人跡、到處只看青草稠、

三十日晴、風漸く寒く、溫計六十五度に下る、雲波霧海遠望する能はず、一回汽船に逢ふ、

十月一日(日曜)晴、早天より陸地を見る、八時ウルグアイ國首府モンテビデオ港に着す、直ちに小艇にて上陸し市街を通觀するに、人口二十七

萬五千と稱し、家屋は石造二階三階を限りとし、高厦大館を見ざるも、市域稍廣く、兩側に海水を擁し、中間に小公園を挟みて、頗る趣あり、寺院多きも皆舊教に屬し、日曜なれども參拜するもの少數なり、日本商店瀧波及び婦野兩店を訪ふ、寒暖は六十度前後にして、往來の人皆外套を用ふ、午後十時汽船ロンドン號に移乗して、アルゼンチン國首府ブエノスアイレス市に向ふ、灣水濁りて其色泥の如し、

(六十六) アルゼンチン首府ブエノス

アイレスの實況

二日晴、曉窓漸く明かなるとき、ブエノスアイレス市の光景に接す、

紋都灣外艇、終夜派長江、汽笛時驚夢、舞城入曉窓、

リオジャネロを遼城と譯せるに對し、ブエノスを舞城又は舞埃城と譯

せり、而して紋都はモントビデオをいふ、此兩都の間の巨灣は實にラブラタ川の河口にして、其距離一百二十哩あり、全灣の色は恰も黄河の濁流を見るが如し、上陸に先ちて大塚伸太郎氏埠頭にて迎へらる、同氏と共に止宿所に入り、且つ銀行に至る、午後日本商松蒲瀧波兩店を訪ふ、當地は桃花已に散して、李白藤紫春榮を争ふを見る、夜に入りて半輪の明月玻窓を照すあり、而して月を北天に望み、半輪を下邊に生ずるは、稍、奇異の感なき能はず、

三日晴、朝夕は尙ほ春寒未だ去らざるを覺ゆ、大塚氏の案内にて公園を一覽す、其傍らに植物園、動物園あり、公園の設計は巴里を模し、頗る廣濶なれども、園池水濁りて風致を損す、ブエノス市をリオに對照するに、山水の風景の秀靈なるは、後者の獨占する所なり、市街の繁榮、車馬の雜沓、船舶の群集するは、前者の南米第一と稱せらるゝ所なり、家屋の壯大、

人口の稠密も前者は後者を凌ぐ、其人口最近の調査によると、百二十四萬六千五百三十二人を有す、即ちアルゼンチン全國人口六百四十八萬九千〇二十三人の五分一は首府に住する割合なり、年々歐洲より移住する中、六分は伊太利人、三分は西班牙人なりといふ、ブエノス市の將來の發展は驚くべきものならん、

層樓櫛比舞埃城、 狹路電車縱又橫、 日欲晡時人集散、 肩々轂々擊塵行、

午後四時市中マヨ街の車馬織るが如く、フロリダ街の行人雲の如きは、觀客をして眩せしめんとす、

四日晴、午後美術館を一覽す、外觀美なるも、内容之に伴はず、すべて何事にも外觀を飾るは南米の民情なるものゝ如し、更に電車にて全市を一貫するに、僻隅に至れば草原の中に平家建の家屋點在するのみ、四時

後降雨あり、

(六十七) 市外の風光

五日晴、午前快晴、電車にて市の中央を縦貫せるリバダビット街を一過して市外に至る、此街路の長さ約十哩あり、之を基線として全京を東西兩域に分つ、更に村路數哩を歩して、牧場を一望して歸舍す、往復里程二十三哩なり、此日春光駘蕩の趣あり、

藉草春郊成結廬、舞埃城外弄清和、牧田千里青如海、一道晴風漲萬波、

草の海に緑りの波ぞたちにける、アルゼンチンの春の牧原、午後博物館に至るも、昨今閉鎖中なり、依て歩を歴史博物館に轉ず、南米の歴史に關するものゝみを集めたるは却て趣味あり、更に電車に駕し

て北部の市街を通覽す、

六日晴、午後汽車にて二十哩餘を隔つるチグレ町に至る、小市街なり、其途上は濁流の渺々たるラプラタ川を望み、春草の芊々たる農園牧場を見るは、大に客懷を散するに足る、ラプラタ川は西班牙語にて銀河の義なり、而して其色黄赤にして泥の如し、名實不相應といふべし、

平野青如海、長江黄似泥、舞埃城外路、望入碧空迷、

アンデスの山はいづくに隠れしか、見るものとは雲の峰のみ、地質はブラジルに異なり、赤土にあらずして白土なり、但し其質沙よりも軽く、風來れば忽ち黄塵萬丈を起すことは相同し、樹木は常葉樹多く、落葉樹少なし、我松と柳に似たるもの多し、時に柳は新緑を吐きて、春色正に酣なり、夜に入りて天氣殊に清明、一輪の明月北天に懸り、清輝客庭に滿つ、此時正しく舊八月十五夜に當り、南球の春天に三五の明月を仰

くは、生來未曾有の奇觀にして、亦一大快事なり其光景おのづから吟情をして勃然たらしむ、

秋半米南春欲殫、晚傾火酒醉凭欄、今宵三五月如鏡、人在紫藤花底看、

一夜窓前坐、知吾在異郷、春風三五月、光入李花香、

望の夜の月はありしにかはらねど、今宵は藤の花かけにみる、

春の夜に秋のものなかの月をみて、故里遠くなれるをそしる、

大空の月も汚れを厭ひてや、ラブラタ川の水にやどらぬ、

七日晴、午前十時より車行二十八哩にして、ラブラタ町に至る、途中孤村を一過するに、戸々水を汲むに風車を用ふるを見る、

孤村一路繞田家、轉々舞風汲水車、南米春光交夏色、綠楊葉底紫藤花、

此間牧場多く、草野坦々、幾千里なるを知らず、眼界一點の山影を見ざるも亦壯快なり、

路出都門更坦然、山河不礙望無邊、野連空處鏡車走、一抹流雲是汽煙、

ラブラタ町は人口六萬以上を有し、州政廳所在地にして、街區整然たり、其中央に巍立せる大廈は即ち州廳なり、町家は一階又は二階造にして、一般に低きも、建築はすべて西班牙式にして、壁色或は白く或は赤く、或は黄にして、外觀人目を引く、公園内に博物館あり、其陳列品はブエノスアイレスのものよりも整頓せりとの評あり、其中に特に欄體室を設け、千數百の欄體を陳列せるは、實に奇觀にして、他に未だ見ざる所なり、宜く之を欄體館と名くべし、是より更に乗車、リオサンチャゴ町に至る、濁流中に汽船の碇泊せるを見る、此に海軍學校あり、午後六時歸舍す、此日

行程往復を合すれば八十哩となる。當夕海軍少佐岡田雄三氏來訪せらる。

(六十八) 宗教及び教育の情況

十月八日(日)曜晴、午前寺院三四ヶ寺を訪ふ。當地第一の大寺は大教正の所住にして、外觀裝飾を缺くも、内部は壯大美麗を極む。本堂の内側長五十三間、幅二十九間にして、九千人を容るゝに足るといふ。余の此堂に入るや、正しく讀經最中にして、僧侶十七人列座して讀經す。而して參詣人僅に十五人、堂内寂寥たり。此一例に照しても、上等社會の寺院に近かざるを見るべし。他の寺院に至れば五十人百人の參拜者あり。若し下等人の居住せる方面の寺院には、毎日曜滿堂の參詣ありといふ。當國は舊教を以て國教となすにも拘らず、宗教の勢力實に微々たり。只舊慣によ

りて堂宇を維持するものゝ如し。午後植物園、動物園を一覽す。すべて此種の設備はリオジャネロよりも稍整頓し居り、植物園内の區域を世界各國に分ち居るは妙なり。歸路第一の墓地(北)を通覽す。其墳墓の壯美なるは、余の未だ曾て見ざる所なり。之に投じたる金額は蓋し幾千萬圓に上らん。夜に入りて少雨あり。

九日晴、午後第二の墓地(西)を尋ぬ。其地域頗る濶大にして、舊教墓地、新教墓地、及び異教墓地の區界を有す。又其一隅に城壁の如く煉瓦にて高く築き上げたる合葬場の設備あり。午後圖書館を一覽す。藏書七萬冊と稱す。

十日晴、午後大塚氏と共に普通教育を管理する學務局に到り局長に面會を得て、市内の學校參觀を乞ひたるに、即時に快諾せられ、視學官長に命じて案内せしめらる。先づ初に市内模範の小學校に到る。建築壯大、

設備整頓、就中生徒に對し、日々國旗の前に整列せしめ、國歌を奏して敬意を表せしむるは、愛國心を養成する新奇の考案なるを感ぜり、是より雜誌發行所に至り、最新式の印刷器械を一覽して歸舍す。

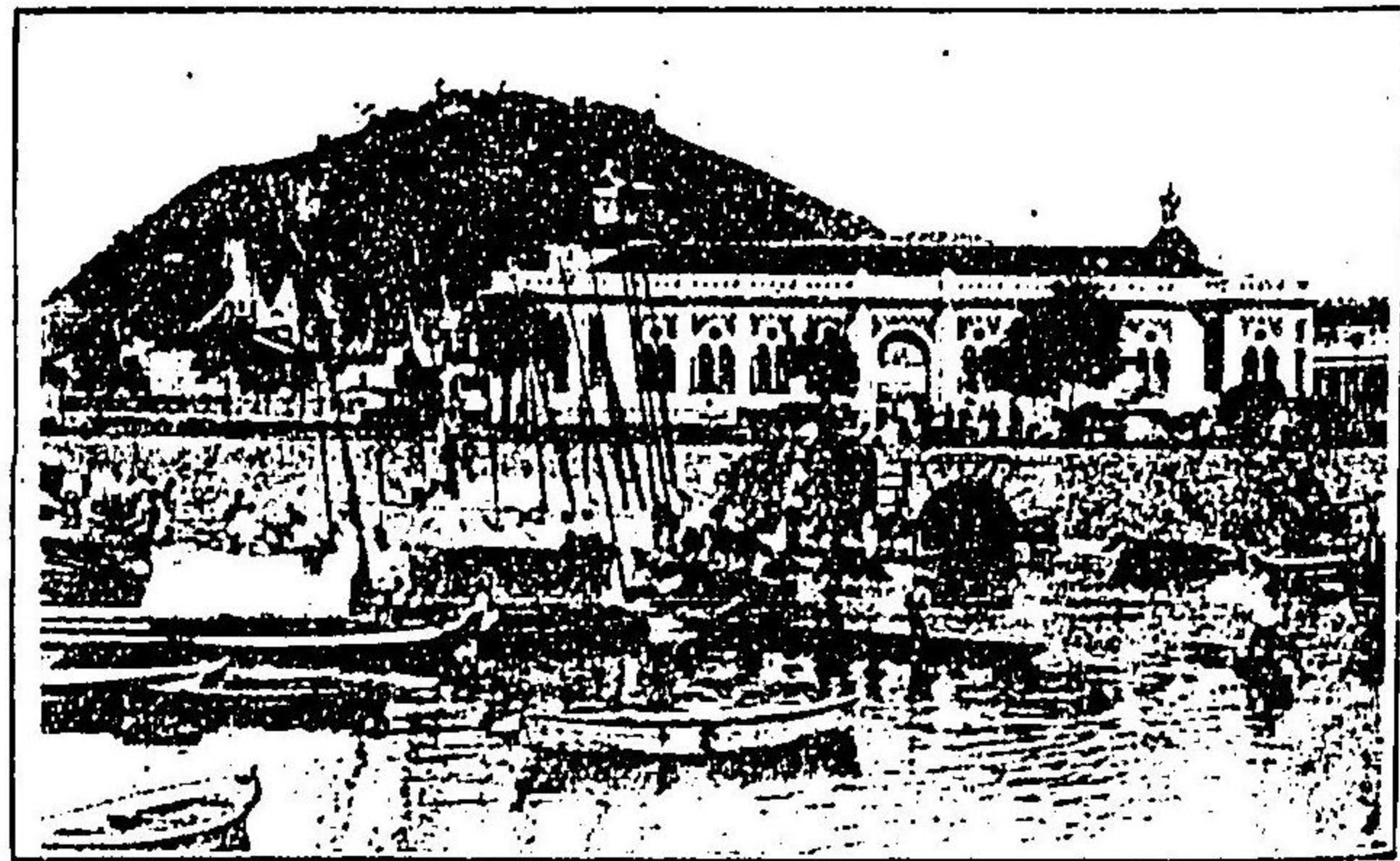
十一日快晴、午前視學官長の案内にて、師範學校に至る、校の内外共に清美なり、生徒は女子のみ、當國の小學教員は殆んど全部女子なりといふ、午後岡田氏と共に車行して、約二十哩離れたる某氏の牧畜場に至る、其設備は一大公園にして、植物園動物園を兼設せるものゝ如し、此に無数の牛羊馬を畜養する中、牛種最も多く、其肥大なること實に驚くべきものあり、馬に至りても一頭數萬圓を價するものを有す、是日や春天清朗、輕風和日、野外の風光實に客懷を散するに足る、當夕松浦氏の商店に招かれ、日本食の晚餐を具せらる。

(三十三)



場燥乾琲珈

(四十三)



港ストンサ國ルジラブ

設備整頓、就中生徒に對し、日々國旗の前に整列せしめ國歌を奏して敬意を表せしむるは、愛國心を養成する新奇の考案なるを感ぜり、是より雜誌發行所に至り、最新式の印刷器械を一覽して歸會す。

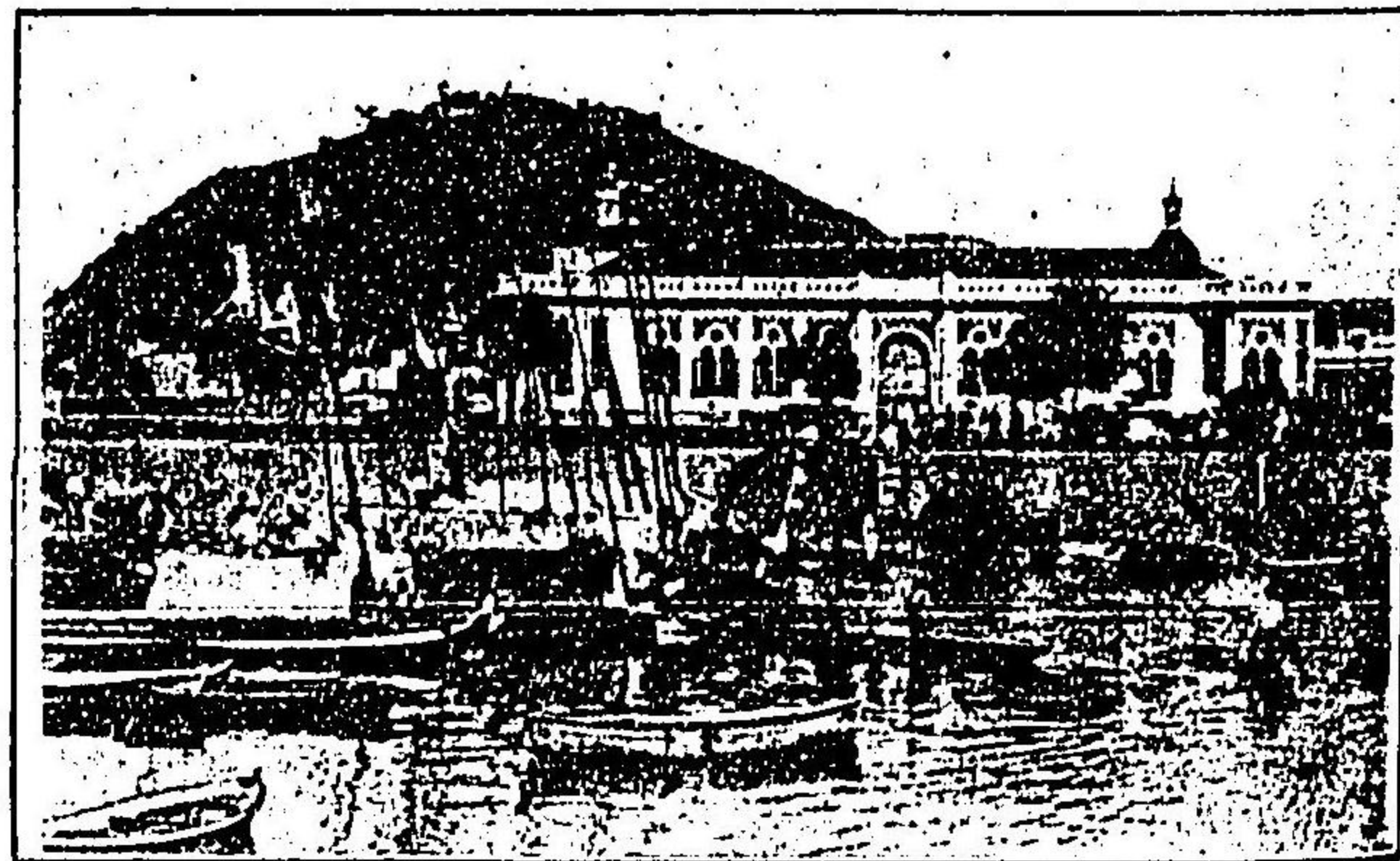
十一日快晴、午前視學官長の案内にて、師範學校に至る、校の内外共に清美なり、生徒は女子のみ、當國の小學教員は殆んど全部女子なりといふ、午後岡田氏と共に車行して、約二十哩離れたる某氏の牧畜場に至る、其設備は一大公園にして、植物園動物園を兼設せるもの、如し、此に無數の牛羊馬を畜養する中、牛種最も多く、其肥大なること實に驚くべきものあり、馬に至りても一頭數萬圓を價するものを有す、是日や春、天清朗、輕風和日、野外の風光實に客懷を散するに足る、當夕松浦氏の商店に招かれ、日本食の晚餐を具せらる。

(三十三)



珈琲乾燥場

(四十三)



ブラジル國サンクトン港

(六十九) 中學及び大學の情況

十二日快晴、午前又視學官の案内にて男子の中學校を參觀す、其校舎清美、其設備斬新、我邦の中學校の遠く及ばざる所なり、生徒は一級十五人乃至三十人を限りとし、極めて少數なり、連日諸學校參觀の際、各校に於て茶又は珈琲を供せらる、聞く所によれば、茶と珈琲は時を限らず、來客に差出す風なりといふ、何を其風の我邦に似たるや、又校内にて僕を呼ぶに手を拍つを見る、是れ亦日本風なり、當日はコロンバス米國發見の日にして、而も大統領就職の祝日なれば、小學生徒二千人列を成し、國歌を奏し、大統領の席前に敬禮して過ぐるを傍觀す、動止整然たり、當日閣龍發見の往時を回想して一詩を賦す、

希世壯圖何物遮、閣龍究盡水天涯、當年移殖文明種、今作西洲

午後文科大學に至り、教授アンプロセチ氏の案内を得て、各教室を始め、圖書室、博物館等を通覧す、其規模至て小なり、博物館内に南米より採出せる古骨遺物の観るべきものあり、又日本の佛像佛具を所藏せる一室あり、學生中に女子半數を占むるも珍らしく感せり、是れ中等教育の教員を養成する故なり、當夕同教授の私邸にて晚餐を授けらる、各室四壁皆古器物を以て滿さる、此に數日間教育會長の好意により、自動車を以て迎送せられたるを深謝せざるを得ず、

十三日晴、午前旅装を整備し、午後大本山事務所に至り、執事に面會し、堂内を參觀す、アルゼンチン國の宗教統計は舊教一千〇十九ヶ寺あり、て、信者四千人に付一ヶ寺の割合なりとす、新教は六十八ヶ寺あり、而して舊教の僧侶の數一千六百人ありといふ、其外猶太教の會堂、回教の會

所もある由、舊教にては一箇の大學を設置し居れり、當夕告別の爲に岡田、松浦、大塚三氏を料理店に招きて晚餐を共にす、大塚氏は滯在中各所の案内を兼ね、通譯の勞を取られたるは特に深謝する所なり、夜十時汽船プエナス號に投して出航す、

(七十) アルゼンチン國の批評

アルゼンチン國は獨立以來僅に百年なるも、近年牧場擴張、交通機關の普設と共に俄に國運發展し、歐米より移住するもの年々二十餘萬を算するに至り、人口逐年増殖し、現時にありては南米第一の勢力を有す、而して其中心はプエノスアイレス市なり、是れ又人口の上よりも物産の上よりも、南米首府中の第一に位す、各國の人種雜居せる實例は、當市發行の新聞週刊月刊をも含む、總計百八十九種の内、西班牙語に屬す

るもの百五十四種、伊太利語の分十四種、獨逸語八種、英語六種、其外露西亞語、瑞典語、土耳其語等なりといふを聞きて知るべし、教育は滿六歳より十四歳までの兒童をして悉く就學せしむる規定なるも、未だ厲行するに至らず、小學校の數五千二百五十校にして、在學兒童僅に四十萬八千人なりといふ、衣食住の如きは専ら巴里の風に倣ひ、外面華美を競ふも、内容之に伴はず、其嗜好する所は俗に走りて雅を缺き、理想的趣味を解せざる傾向あり、是れ新開急進の文明國としては免かれ難き勢ならん、市中の建築にして壯觀を極めたるものは、寺院よりも、學校よりも、劇場とホテルなり、又人心の熱中するものは、富圖と競馬なるを見て、其民情の一斑を知るに足る、建築、道路、衣服等に夥多の資を投するも、學校教員の俸給は一般に低廉にして、而も村落に至りては數ヶ月間も月給を支出せざる處ありと聞けり、然れども當國は南米中の他の諸國に比す

るに、最勝の地位にありて、將來の發展必す南米全陸を震動するに至らんこと決して疑ふべからず、之を既往に考ふるに、獨立以來僅に百年にして、今日の隆運を見るは既に驚くに足る、因て吟詠を試む、

建國以來僅百春、
駭々文運逐時新、
羅浮河口流沙跡、
今作黃金幾萬鈞、

ラブラタの川より流す土砂も積りて今は黃金とそなる、

當地の氣候は目下五十五六度より六十五度の間を昇降するも、冬期の寒氣強からず、多少の霜痕を見ることあるも、牧草を枯死せしむるに至らず、而して夏期も亦凌き易しといふ、

(七十一) 英領フオルクランド行

十四日晴、朝七時船モンテビデオ港に着岸す、再ひ瀧波商店を訪ひ、主

人の案内にて夏公園冬公園を一覽す、此地はブエノス市と異なりて、衣食住共に質素を守り、華奢に走らず、隨て生活費も勞働賃銀も安しといふ、日本の勞働者はブエノス市には三百人も入り込み居るといふに反し、當地には一人を見ざる程なり、午後三時に至り埠頭にて瀧波氏と相分れ、ペンソイク會社汽船オリサ號五千三百五十九噸に移り、六時拔錨して南進に就く、

斜陽影裏去紋都、汽笛聲中沒海衢、船入外洋烟漸散、一回邱上砲臺孤、

モント港の對岸に一圓邱の平坐するありて、其頂點に砲臺を設置す、當港第一の勝地とす、

十月十五日(日)曜晴、曉窓春寒料峭を覺ゆ、

船衝碧浪向南端、雲宿亞然州角巒、日左北天光不逼、春風料峭

晝猶寒、

終日雲波の外に目に觸るゝものなし、

十六日晴寒暖は五十七八度なり、滿目茫然、只海鵝の飛揚するを見るのみ、

十七日晴、晡時に至り雨來り、風起り波生し、船亦少しく搖動す、午後六時烟雨の間にフォルクランドの島影を見る、

孤舟衝雨立、冷霧鎖春洋、南米盡處暮、波間島影長、

七時スタンレー灣内に投錨す、モントビデオより此に至る海程一千〇三十哩なり、内灣は一大湖の如く、四面丘陵を以て圍繞し、灣内にありては灣口を見る能はず、時に風雨蕭々として來り、先年北海道利尻島に客居せし當時の如く、眞に絶海の孤島に來れるの感を浮ぶ、灣内には唯帆船二三艘の碇泊せるを見るのみ、

十八日晴雨不定、忽ちにして雨、忽ちにして晴る、我邦北陸道の晩秋の氣候に似たり、而して勁風終日休まず、寒暖は五十度なるも、風強き爲に戶外にては四十度位に感ずる程なり、室内にてはストーブを用ふ、午前十時小艇に移りて上陸せるに、波の艇中に、打込むと數回に及ぶ、此島は南緯五十一二度の地點にありて、世界に於ける英國所領中最南端にあるものとす、全島東西二洲より成り、其面積總計四千八百五十方哩、人口二千〇五十人なれば、一方哩に付半人に満たざる割合なり、而して牧羊の數は七十萬頭ありといふ、全島山岳なく、又樹木なく、只牧草の丘上に茂るを見るのみ、地下は多く岩石より成り、處々に石骨を露出せるを見る、高丘に至ては岩石一面に屹立し、烟を隔て、之を望むに、初雪を冠するかを疑はしむ、樹木の生育せざるは、年中強風の絶間なきによる、但し風の爲に雪積まず、野草枯れざるを以て、牧羊に適す、

船入極南斯旦灣 野無樹木陸無山 斜風凄雨春蕭颯 人住寒烟

冷霧間、

雪風十月捲春濤、寒徹衣袂烈似刀、法甸洲居何所得、一年生計在羊毛、

スタンレーの市街は海岸に傍て數町の間、人家點在するのみ、家屋は煉瓦造と木造と相半はし、いづれも低屋なり、只屋根の一樣に赤く塗りたるを特色とす、人口僅に八百人、實に寒村なり、此寒村にも似ず、博物館、圖書館を併置す、博物館内には當地にて採集せる物のみを陳列す、又英國宗のカセトラル(本山)あり、晩天漸く霽れて、夕陽影裏に牧羊の草間に遊ぶを見るも亦幽趣あり、午後七時拔錨して灣を出つ、風漸く加はり波漸く高く、終夜船大に揺く、

(七十二) マゼラン海峡行

十九日晴、勁風激浪、風位西方にありて船之に逆行す、寒暖計四十二度
に下る、

狂浪漲、天橋欲摧、風從摩世峽間來、船牀横臥人皆病、海鵝揚然
去復回、

又狂浪の船を打て翻り、水烟を生ずる處に、夕陽映射して虹霓を現はす
を見て一吟す、

勁風吹海面、夕照射波頭、噴沫散爲霧、虹霓隨處浮、

二十日晴、逆風未だ歇まざるも、激浪少しく收まる、午後二時より峽間
に入り、右方にバタゴニア州の平原の横はるを望み、左岸にテラデルヒ
エーゴ州の小丘陵の起伏するを見る、

船入峽間風未收、怒濤聲裏夕陽收、沙原一帶平如布、知是波多

伍若州、

午後二時貨物船に遭遇す、夜十一時峽間の中點たるバンタアレナス港
に入りて碇泊す、其地形港灣の形を有せざるも、西方に一帶の山脉あり
て西風を鎖し、港内は平穩なり、舟中吟一首あり、

凝眸日々倚船櫓、愛見米山氣象雄、春白安天峯頂雪、曉青摩世

峽間風、探奇拾勝吟囊滿、酌月傾雲酒債窮、不羨故園觴詠客、

東都西洛競觀楓、

二十一日晴、風寒きも日暖かなり、市街はスタンレーよりは廣く、人家
亦多く、智利國極南の一小都會たり、我船より移民約百名此に上陸す、同
市人口壹萬と稱し、山麓の平陵に連なりて市街をなす、家屋は木造平家
多く、屋根は鐵板又はトタン葺なり、物産は羊毛羊肉を主とす、野外に青

草を見るも、山上は雪を留めて猶ほ白く、殘冬の風致を存す、

入灣波漸穩、春草滿林巒、峰頂猶留雪、風寒摩世瀾、

モンテピテオを去りて以來、陸上には沙原草邱のみを見しが、此に至りて林野峯巒に接せり、而して其風光は我樺太の如く荒涼寂漠として、何んとなく太古の風致を存す、

南米盡頭船入津、草邱伏處屋成隣、行過街路望林巒、滿目荒涼

太古春、

背後の連山は最高千尺以下にして、眼界に高峰を見ず、此港にては關稅を課せざれば、物價は比較的安し、抑もマゼラン海峽の舟路は今より約四百年前(一千五百二十年)葡人マゼラン氏によりて發見せられ、其當時之を一過するに二十八日間を要せしとのことなるが、今は四十八時間にして航了し得るに至る、南端の外洋は風浪餘り激しく、航路至難なれば、萬船皆此峽間を通過すといふ、而してバンタアレナスは實に其避難港たり、余は此に來り、マゼラン氏を追懷して一首を賦す、

極南風浪高難渡、萬船卜晴峽間駐、想見往年摩氏心、一帆賭死

開航路、

此バンタアレナス市は世界中最南の市街なりといふ、余は先きに北極海觀光の時に世界中最北の市街ハンマーフェストに寄航せしが、今又此最北の市街に上陸するを得たり、當市は南緯五十三度の地點にありて、フォルクランド島より西方百五十哩の距離にあり、最南の市街に上陸するを得たり、當夜十一時拔錨し、海峽狹處に向て西進す、

(七十三) 智利南部の航路

十月二十二日(日)曜、雨、兩岸の山光雲烟を破りて曉窓に入る、千灣萬曲

の岸頭に、脈々の岩山雪を戴きて走るを見る處、毫も那威西岸と異なることなく、其風光の美は二者伯仲の間に居る、只遺憾なるは雨の爲に遮ぎられて、全景に接するを得ざるにあり、

峽間一路截風行、怒浪打舟窓有聲、殘雪白邊春自滿、岩陰已見綠苔生、

午後に至り狭處を出て、廣峽に入りたるに、兩岸全く雲烟の中に鎖され、一物の目に觸るゝなく、逆風激浪にゆられつゝ航走す、夜に入りて舟の動搖殊に甚し、

四方の海いと廣けれど、たぐひなき荒波たつはマゼランの瀬戸

二十三日曇、風漸く鎮まり、雨又收まるも、殘雲猶ほ眼界を鎖し、天氣自ら濛々たり、只太平洋の浩波の凸形を畫きて押し寄せ來る爲に、船は依然として動搖を繼續す、午後に至りて暫時晴空を見たるも、晩に及んで山

又雨となる、

歸舟已入太平洋、仰望天涯只渺茫、峽雨嶺雲何處去、萬波一碧

染吟腸

船は海岸を距る數十哩の波上にあれば、終日智利の陸もアンデスの嶺も眼中に入らず、稍無聊を覺ゆ、

二十四日曇、終日風力よりも浪高く、船の傾動甚し、時々少雨あり、マゼラン峽の風、此沿岸の雨は南米の名物なりといふ、恰も臺灣にて新竹の風、宜蘭の雨といふが如し、

二十五日曇、午後に至り對岸の連山を望む、三時後は濃霧に入り、汽笛を鳴らして進航す、夜九時智利國コネル港内に入りて停船す、

二十六日晴、溫計六十度、林野草色青く、港上の春色曉窓に映す、

古籠岬畔曉烟收、繫纜鵬程萬里舟、汽笛一聲山水綠、智南春色

滿津頭

夕陽將に落ちんとする時、一鉤の新月西天に懸る、其光を月球の左邊に見る、此港は石炭輸出港にして、汽船皆載炭の爲に此に入る、市街は矮屋小店のみなるも、汽車の來往頻繁なるは、石炭輸送の爲なり、午後五時拔錨して、夜九時タルカノ一港に入る、是れ智利國第三に位する都會たるコンセプション市の要港にして、又本州の軍港たり、

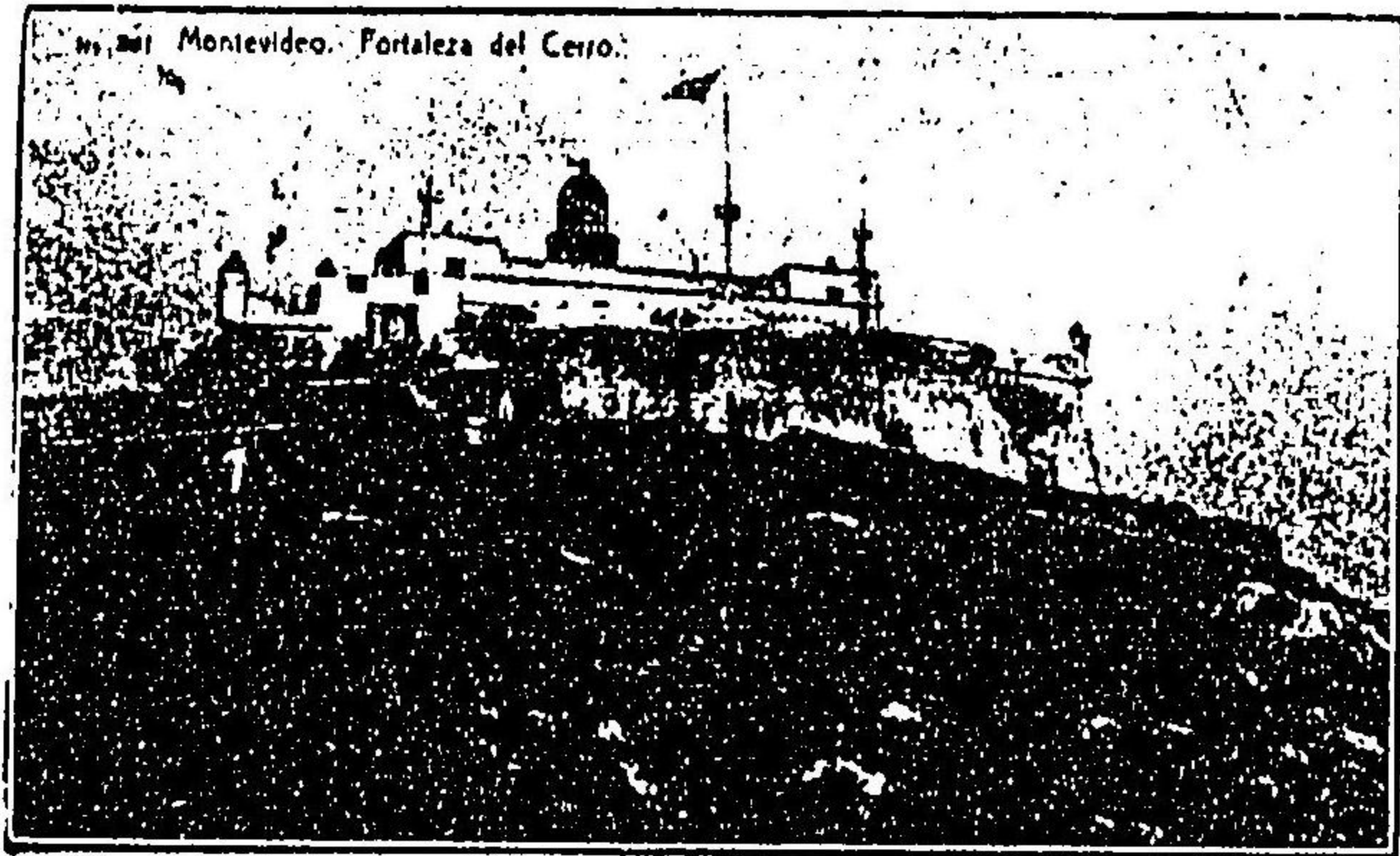
二十七日晴、港内に一隻の軍艦碇泊せるを見る、

一帯臥丘傍、海長、高低瓦屋映、波光、阜頭戰艦吹煙坐、南米猶知講國防、

午後出港、風和し波平かにして、夕日紅を流し、半月空に印す、

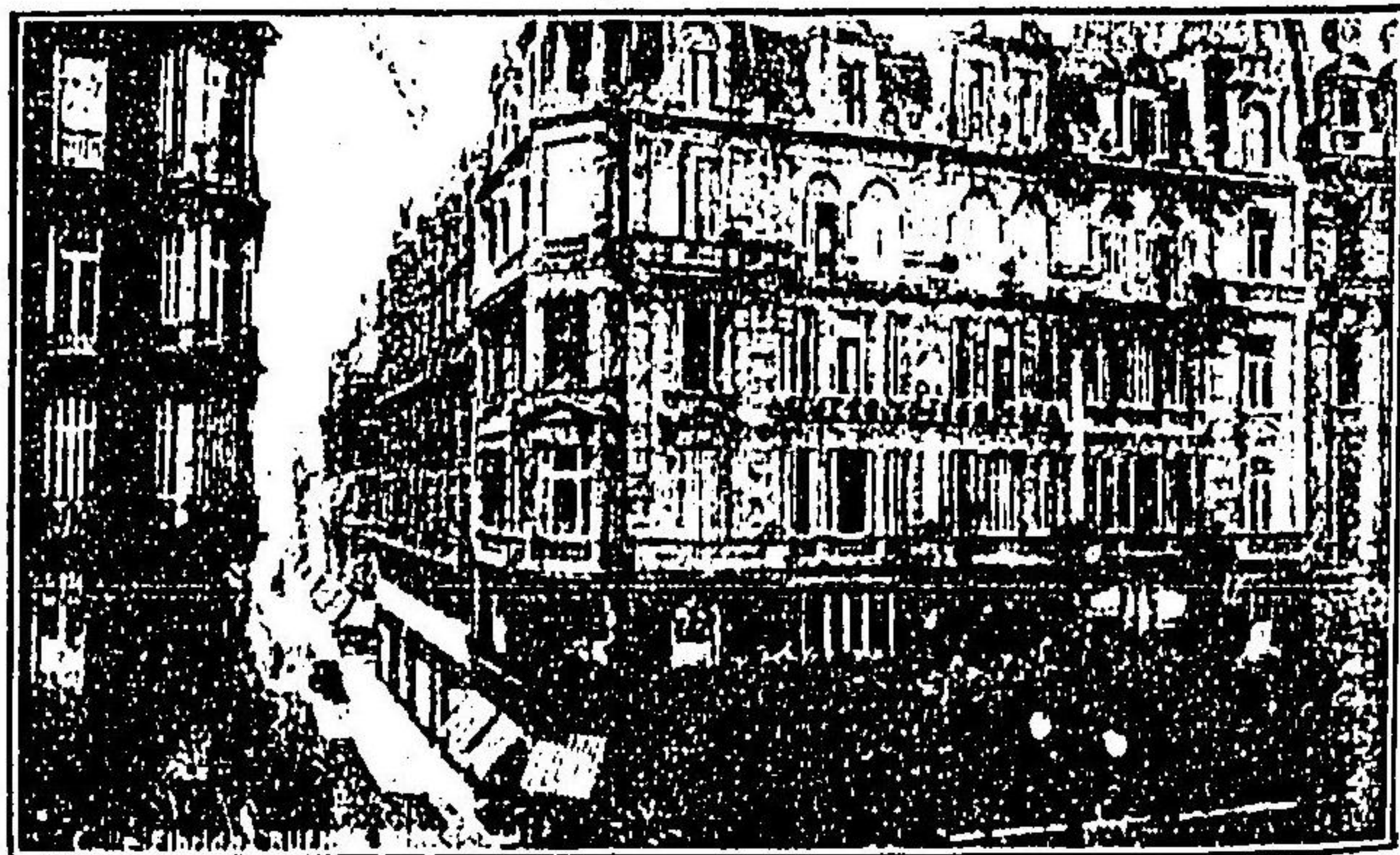
二十八日晴、朝七時バルパライソ港内に入る、以下南米西部紀行に譲る、

(五十三)



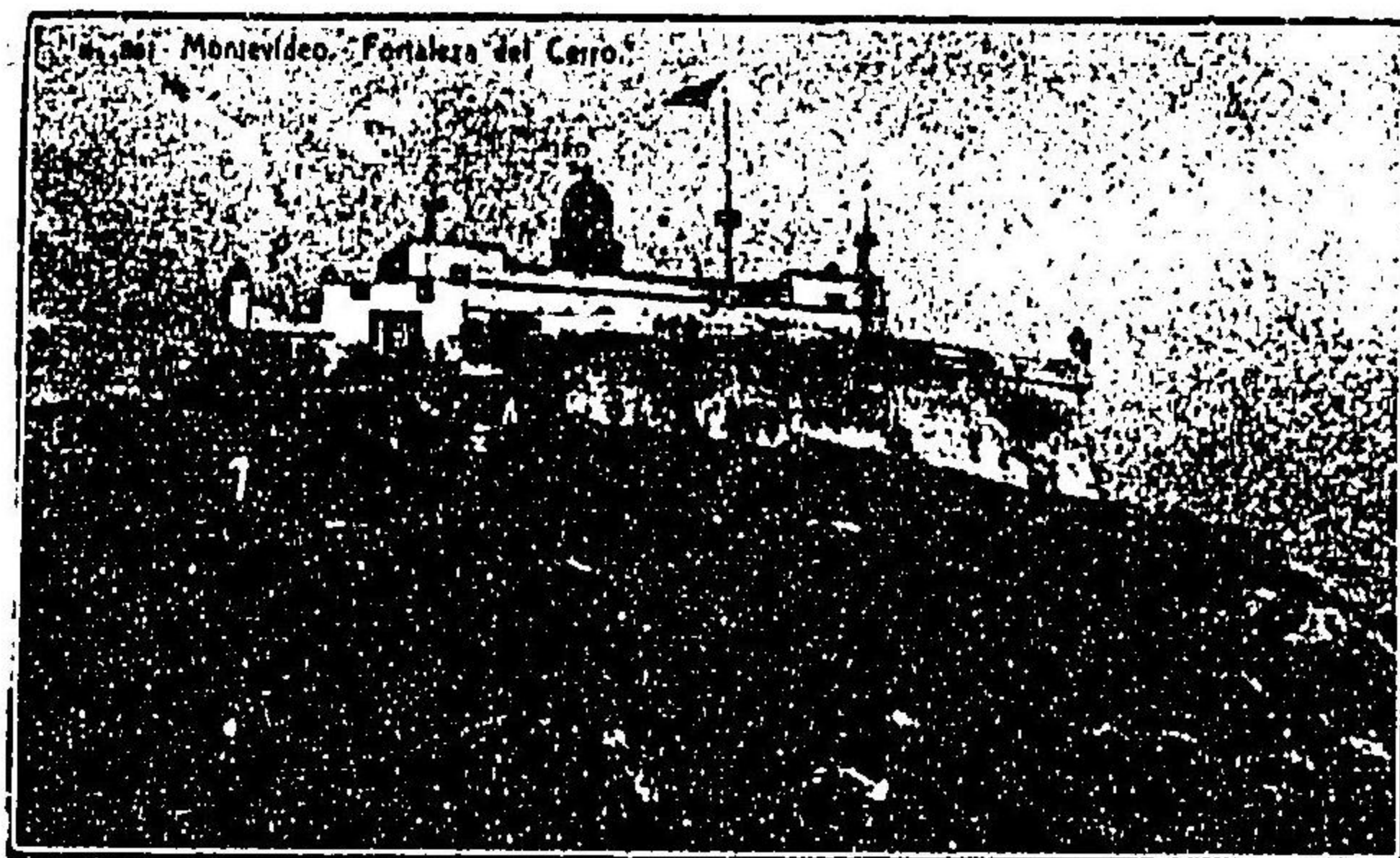
頭港オデビテンモ國イアグルウ

(六十三)



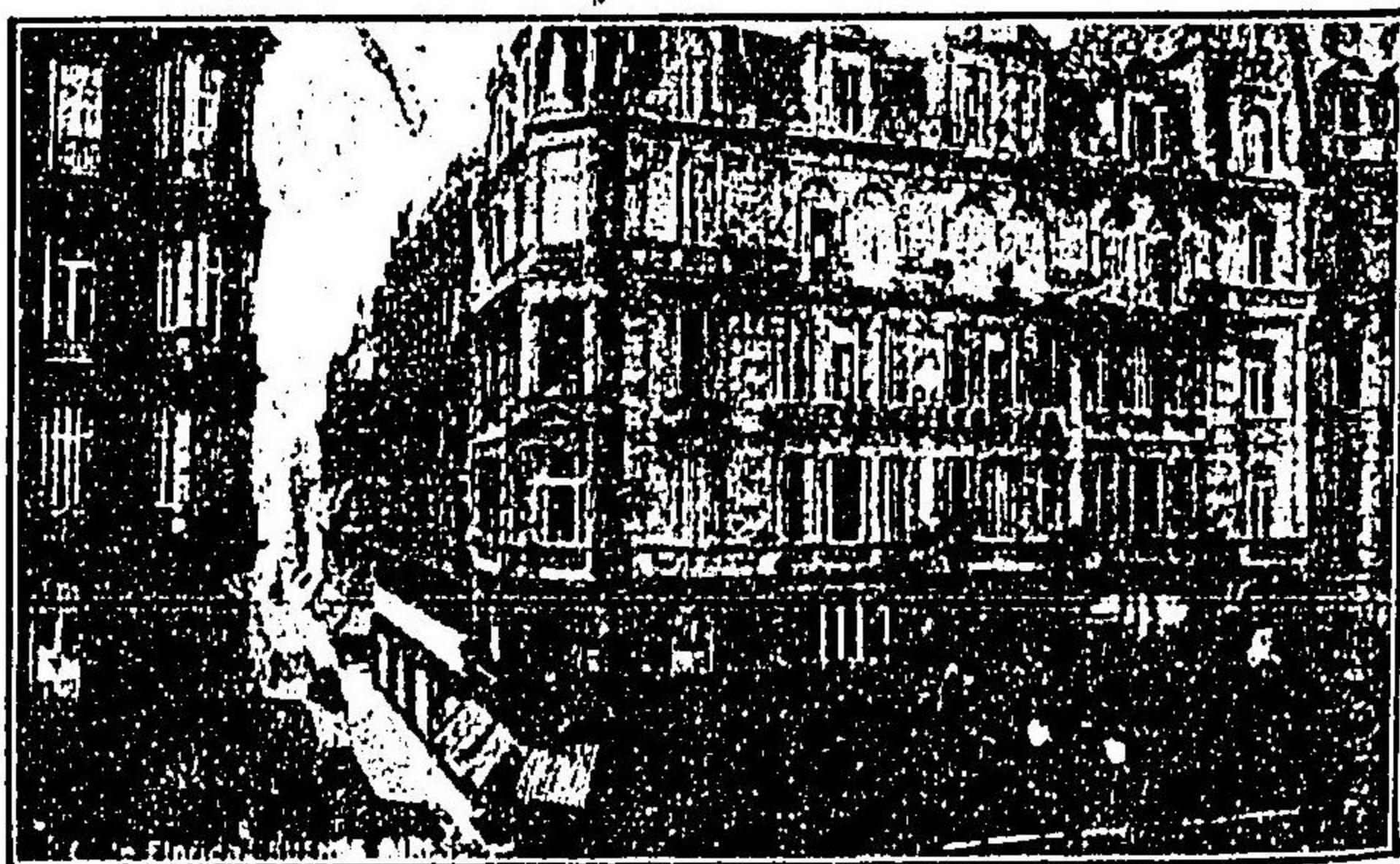
スレイアスノエブ府首國ンチンゼルア

(五十三)



頭港オデビタンモ國イアグルウ

(六十三)



スレイアスノエプ府首國ンチンゼルア

南津頭

南津頭

夕陽將に落ちんとする時、一鉤の新月西天に懸る、其光を月球の左邊に見る、此港は石炭輸出港にして、汽船皆載炭の爲に此に入る、市街は矮屋小店のみなるも、汽車の來往頻繁なるは、石炭輸送の爲なり、午後五時抜錨して、夜九時タルカノ一港に入る、是れ智利國第三に位する都會たる、コンセプション市の要港にして、又本州の軍港なり。

二十七日晴港内に一隻の軍艦碇泊せるを見る、

一帯臥丘傍海長、高低瓦屋映波光、阜頭戰艦吹煙坐、南米猶知

講國防

午後出港、風和し波平かにして、夕日紅を流し、半月空に印す、

二十八日晴朝七時バルパライソ港内に入る、以下南米西部紀行に譲る、

第九、南米西部及墨士古紀行

(七十四) 智利首府サンチャゴの實況

明治四十四年十月二十八日朝、智利國バルパライオ港に入津するや、千田平助氏特に船中に来りて余を迎へらる。共に上陸して氏の宅に一休みし、九時の急行にて首府サンチャゴ市に至る。鐵車は溪谷の間を縫て漸く登り、登り極りて、又た下る。山に樹木なく、溪に流水なく、殺風景なるも、當面にアンデス連峰の雪を戴きて起伏するを望むは、聊か客懷を慰むるに足る。午後一時着市す。其里程百二十五哩あり、公使館在勤藤井實氏、甘利造次氏、三隅棄藏氏、停車場内にありて歓迎せらる。目下日置公使歸朝の途に就かれ、藤井氏其代理をなす。共に馬車に同乗して公使館に至り、藤井氏の好意にて館内に停留するの便を與へらる。三時後同氏と

共に馬車に駕して、コウシノ公園、キンタノルマール公園、サントラルシヤ山を歴観す、コウシノ公園の如きは、木石の配置大に趣を成すと雖も、園池に水なきを缺點とす、獨りサントラルシヤ山の鬱然として、市街の間に時立するは一大奇觀たり、其山もとより一小邱に過ぎずと雖も、全部岩石より成り、石間小徑岐をなし、人をして深山幽谷に入るの思をなさしむ、石徑を攀ぢて山頂に達すれば、此に望臺あり、全市を一瞰し、アソデス連山を對望する所、自然の鑿畫館たり、又其前後綠樹紅花、石頭に懸り、宛然日本庭園の趣を有するは亦妙なり、登臺の一吟左の如し、

阿拉米多街盡邊、蔚然三達舍臺圓、登臨全市如幕布、安嶽爲屏鎖半天、

歸路中央街たるアラメダ街を一過するに、其路三十五間乃至四十間の廣を有し、塼樹陰を成し、樹下來往織るか如し、此街と彼山とは當市の二

大勝なり、夜に入りて正金銀行員諸橋宏氏來訪あり、

十月二十九日(日)曜晴、藤井氏と同乗して、午後寺院、競馬及び消防演習を一覽す、當地は舊教を以て國教とすることアルゼンチンに均しきも、其勢力は同日の比にあらず、獨り日曜のみならず、平日も午前は皆寺院に參集す、婦人は帽を用ひず、全身黒衣を被り、一見黒達磨の如き裝をなして寺院に到る、

怪見街頭黒達磨、五三爲列寺前過、身纏緇服包頭髮、不問令孃與老婆、

競馬は當國人の最も嗜む所にして、毎日曜之を興行すといふ、闘牛及び富囀は政府之を禁ず、故に野外の娛樂は只競馬あるのみ、消防組は紳士の子弟志願によりて編成せられ、自ら進みて資を投じ、以て之に加はるを名譽とすといふも、他國に聞かざる所なり、一年一回大演習をなす、本

日は即ち其日に當れり、

三十日晴朝三隅氏と共に銀行に至り、市場を通観す、午後獨行して市外に聳立せるサンクリストバル山に登る、山上にマリヤの像及び天文臺あり、遠近の眺望絶佳なり、而してアンデス連山の雪を望む所殊に壯快を覺ゆ、毎年一定の日に多數の信者此に登山參拜すといふ、時にアンデス山の雪を望みてよみたる一首あり、

常葉木の色もうつろふ世の中にアンデス山の雪はかはらず、

三十一日晴、博物館を訪ひ、又動物園に入る、此二者はアルゼンチンに及ばず、

(七十五) 墓地寺院及び奉迎天長節

十一月一日晴、甘利氏と同乗して墓地に至る、當日は年中一回の墓參

日にして、場内群集、墓前献花地に敷く、恰も我益十三日の如し、墓地の美大なることアルゼンチンに及ばざるも、猶ほ外客の目を驚かすものあり、墳墓設置の費用最小なるものにて、五百圓を要し、最大のものにては五六萬圓を投すといふ、

二日晴、毎日の寒暖は六十六度より七十度の間を昇降す、午前大寺院二ヶ處を入覽するに、第一の寺院は幅二十五間、長八十間にして、參詣者五百五十人の列席を見る、其内男子僅に二十人にして、他は皆女子なるは異様の感を起さしむ、第二の寺院は參衆七百人の内、男子は五人に過ぎず、更に舊教徒の資産家のみを埋葬せる墓地に至るに、數十間に亘る長屋數棟連立し、其棟下に墳墓を設くるは亦奇觀なり、恰も兵營若くは學校の寄宿舎を見るが如し、而して屋外は百卉千花を栽培し、宛然小植物園たり、午時電車にてサンベルナド町に至る、其地静閑にして、別荘

的邸宅多きも、風景に乏し、午後五時歸館す、此日行程數十哩に及ぶ、

三日晴、天長節、午前三時、諸橋兩氏と共に電車に駕して市外ギンドー村に至り、ホテルローマにて午餐を喫す、庭園に花樹多く、又菜畦連なり、日本の田園に遊ぶの思あり、料理は全く智利式なり、歸路鈴木某氏の農圃を一覽す、此日往復二十三哩なり、午後五時後、公使館内にて聖壽萬歳の賀筵を開かる、賀客百三四十人、皆内外の官吏紳士なり、數十名の樂隊入り來り、奏樂の間に舞蹈あり立食あり、シャンペンを傾けて祝すること幾回なるを知らず、藤井氏主人となりて接待の勞を取らる、時に舊曆九月十三夕に當り、一輪の明月清輝を送り、恰も其歡を助くるものゝ如し、余は其盛況を寫さんと欲して二首を得たり、

在此西球盡處鄉、微臣堪喜祝天長、
滿場奏樂春如湧、舞蹈聲中拜聖皇、

欲迎聖壽客來頻、公使館前揚馬塵、
奏樂已終歡未盡、十三夜月

照佳辰、

當日の食品中日本の煉羊羹及びヒキ茶のアイスクリーム、尤も來客の稱讚を得たり、散會の後日本人のみ更に相會し、藤井氏の發聲にて君ヶ代を奏し、聖壽萬歳を唱へて深更に至る、

四日晴、午後美術館に入覽す、外觀頗る美大なるも、内容は之に伴はず、繪畫の數少なく、且つ衆目を引くほどの秀逸なるものを認めず、

十一月五日(日曜)晴、電車にて市外ラバルマに至り、更に徒歩して數哩の外に出て、田舎生活の實況を視察す、當地は市中と雖も家屋の多數は煉瓦にあらずして、泥土を煉瓦の形に作り、之を日光に乾かしたるものを以て築き、其外面を塗りて石造の如く粧ふを常とす、市外に至りては外面を塗らざるもの多く、恰も臺灣村落の農家の如し、甚しきに至りて

は茅を纏ひて壁に代用せるあり、我アイヌの家屋に似たり、屋根は草葺多く、中にトタン板を用ふるもあり、四壁に窓なく、只入口と裏口とに板戸あるのみ、而して室内は土間なり、サンチャゴ市中にても貧民の住所は皆此種の家と同じ、其不潔なる有様はアイヌ住家又は朝鮮人の家屋よりも甚し、アメリカ、インデヤンの住家なるかを怪ましむる程なり、次に道路の如きは塵埃深くして靴を没す、又往々汚水の毒色を帯びて滯溜するあり、之に住する人民は目に一丁字を解せず、身に破褌を着け、垢臭人を襲はんとするも、跣足のもの少なく、裸躰せるものに至つては全くなし、只彼等は飲酒を以て最上の娯樂とするか如く、酒店は貧民の巢窟に殊に多し、要するに智利は上下の懸隔甚しく、殆んど異人種なるが如き觀あり、

侵塵一路出城門、泥壁茅軒智利村、南米人文何處遍、田家猶未

教兒孫、

此日行程約二十哩に及ぶ、當夕歸館すれば、明月露氣を帯びて、滿庭爲に白し、

帶露江山夜氣凄、南球春興北秋齊、坐來雲斷天如拭、明月高懸安嶽低、

故里の近くし、あらは我友を招きて見せん、アンデスの月、

六日晴、當日は市内を散歩し、歸りて日本へ向け年賀狀を認めて投函す、夜に入り一天雲なく、明月玻窓に入ること前夕の如し、

(七十六) 市内外の所見及び學校の狀態

七日晴、南部地方を一覽せんと欲し、午前九時半發にてタルカ町に向け出遊す、時間の都合にてペレケン驛に降車し、村落一巡の後更に乗車

して歸行す、其行程往復百五十一哩、途上牧田多く、田中に灌漑をなす、連日雨なきが爲なり、又葡田あり、麥田あり、皆灌漑を要す、郊行二首を得たり、

步入孤村草色新、牧田繞屋綠無塵、連山皆戴千秋雪、一白漲天南米春、

村落の家は概して陋矮不潔なり、中間の驛名に前驛をペーロン(苦痛)といひ、後驛をホスピタル(病院)といふものあるは豈奇ならずや、

八日晴、午後甘利氏と共に官省に至り、文部次官に面會し、其紹介を得て文科大學を參觀す、其名義は大學なるも、實際は中學教員養成所たり、教師は半數智利人にして、半數は獨逸人なり、之に附屬して中學校及び心理實驗部あり、此大學在學生總數約二百人、其中三分二は女子なりといふ、當國は未だ義務教育を實施せず、小學校三年、中學六年、大學四年又

は五年なりと聞けり、

九日晴、早朝出發、アンデス山行を企て、ロスアンデス驛に至りて降車す、是より狹軌鐵道に駕し、雪嶺を登るべきも、時日を要するを以て果たさず、其光景を詩中に寫す、

路掛斷崖急似蘿、鐵車攀盡幾嵯峨、連山脉々峰頭雪、恰是海風揚白波、

晩に歸館す、其行程往復百八十八哩なり、途中禿頭山多し、或はシャポテンのみの茂生せる山を見る、アンデス横斷鐵道は昨夏より全通し、ブエノスアイレス午前八時二十分發、バルパライソへ其翌日午後十時四十分着、即ち三十八時間餘を要す、其距離一千四百三十一キロメートルにして、日本里程の三百六十里あり、汽車賃は寢臺を含みアルゼンチン貨幣百四十六ペソにして、我百三十圓に當る、食費は其外なり、毎週夏期三

回其他は二回汽車の往復あり、

十日晴午前藤井氏と共に中學校を參觀す、文部次官特に案内せらる、次に應急施療院及び慈惠病院を參觀す、其病院には六百人の患者を容るべしといふ、當サンチャゴ市にて毎年慈善事業に費す金額は二百萬ペソ(我八十萬圓)にして、貧民の救助を受くるもの六千人ありといふ、若し之をサンチャゴ人口四十萬に配當するときは、一人に付五ペソ(我二圓)つゝの割合となり、人口十人に付一人半は救助を受くる割合となるべし、斯く慈善事業の發達せる餘弊として、貧民は皆其日暮しにて、毫も貯蓄せんと欲するものなしといふ、午後文部屬官の案内にて、醫科大學及び實科師範校を參觀す、實科中に木工科、體操科、制烹科等あり、

十一日晴午後三隅氏と同行して、中學校及び陸軍學校を、一覽す、當夕は藤井氏の案内にてモルラ夫人を訪問し、其所藏の日本古畫古器物を

一覽す、總計數千點あるべく、いづれも頗る珍奇なり、

十二日晴午後六時公使館を辭し、バルバライソに向け發車するに際し、公使館諸氏及び諸橋氏の送行を得たり、サンチャゴ滞在中は公使館内に寄寓するを許されしのみならず、連日多大の厚意を荷ひ、分外の歡待を辱うせしは、藤井氏及び甘利、三隅兩氏に對し、深く感謝する所なり、寄寓中所咏五絶二首あり、

驛路春晴續、塵深欲沒靴、智原青鬱々、安嶽白峨々、

歩花三舍巷、浴月跋波磯、吟客留旬日、滿蹕拾句歸、

當夕十時半バルバライソに着す、千田平助氏、河田國雄氏、杉山村上等の諸氏と共に千田氏の宅に至り、會談深更に及ぶ、

十三日晴午前千田氏と共に市内を一巡し、午後市外公園及び海濱に散策を試みて歸る、當日藤井實氏サンチャゴより來港せらる、

(七十七) 智利國の觀察及び批評

十四日晴、正午十二時東洋汽船會社紀洋丸(九千二百八十七噸)入港の報を聞き、即時に小舟に駕して之に移り、歸航の途に上る、船長は東郷正作氏なり、船中まで諸氏の送行あり、此にバルパライソ滞在中、千田氏が止宿を引受け、且つ諸事を斡旋せられたる勞を謝す、午後五時拔錨してイキケに向ふ、同港は山を襟にし海を帯にし、地形稍香港に似たり、人口十九萬ありて當國第二の都會とす、但し海灣外に開き激浪襲來の虞あれば良港とは言ひ難し、日本人の智利國內に住するもの總計百人未滿にして、サンチャゴ市に二十餘人、其中飴屋を業とするもの最も多しといふ、バルパライソ市には七八人に過ぎず、支那人の數は是より多きも、ブラジル國、アルゼンチン國及び智利國にては、支那人自ら日本人と偽

稱し居るもの多き由、是れ日露戰役後日本の國名が南米の天地を風靡せる結果なり、

智利風俗の外人の眼に映する特色を擧ぐれば、第一は毎朝婦人は頭部より全身に黒衣を被りて、寺院に往復する一事なり、此風は西班牙の古俗を傳へ、其始は儉約の主旨より起れりといふ、第二は電車の車掌の多數は女子なること、是れ先年秘露と交戦せし時、男子はすべて出征したりしに起因すといふ、又停車場にて食品を賣るもの女子なり、市街及び公園に共同便所を置かざること、停車場内に時間表も汽車賃表も時計も置かざること、寺院の多きこと、サンチャゴ市の地圖中に表示せるものだけにても七十四ヶ寺あり、街上の敷石に小なる丸石を用ふること、家屋の壁身は大抵乾泥なること、巡查が木棒を携ふること、其他競馬に熱注すること、消防組の勢力あること、民家の不潔なること等は前に

已に述べたる所なり、其外智利の特色とすべきは、市外の農民はケットの中央に長一尺位の口を開き、此處に頭を入れて、肩を掩ひ、雨又は塵を防ぐの具となす、其名をボンチャウといふ、又乗馬のアブミの頗る大なること、毎日午時二時間は晝食休みと稱して、すべて閉店すること、外國へ發送する葉書の郵税最も低きこと等なり、葉書の郵税は智利の六錢にして、我二錢五厘に相當す、尙ほ一ツ智利の特色として忘るべからざる一事は、紙幣の垢に染みて黒色を帯び、其紙面には幾千萬の微菌を有するものあり、一たび之を手にすれば、消毒を要するとの評なり、次に智利と日本とを較して其異同を擧ぐれば、其國域の細長くして南北に連亘せる點は日本に似たり、而して日本よりも長く、南緯十七度より五十六度に至る、即ち三十九度、此里程二千八百二十哩あり、是れ世界中に於て南北に延長せる最長國たり、山岳の多くして平地に乏しきこと、極

(七十三)



人ンヤデンイ、カリメア

(八十三)



谷田ンチンピルア

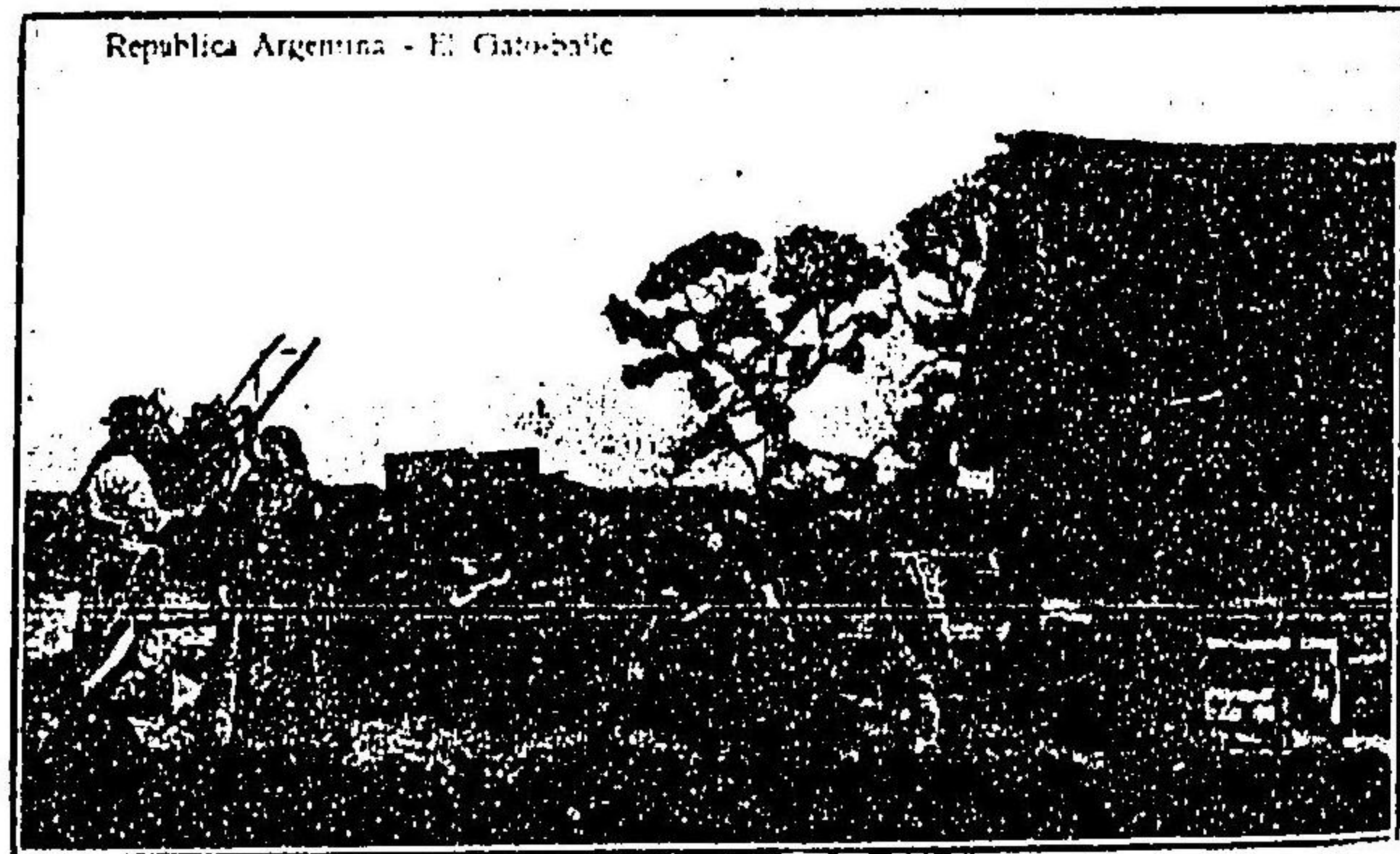
已に述べたる所なり其外智利の特色とすべきは市外の農民はケットの中央に長一尺位の口を開き、此處に頭を入れて、肩を掩ひ、雨又は塵を防ぐの具となす、其名をポンチャウといふ、又乗馬のアブミの頗る大なること、毎日午時二時間は晝食休みと稱して、すべて閉店すること、外國へ發送する葉書の郵税最も低きこと等なり、葉書の郵税は智利の六錢にして、我二錢五厘に相當す、尙ほ一ツ智利の特色として忘るべからざる一事は、紙幣の垢に染みて黒色を帯び、其紙面には幾千萬の微菌を有するものあり、一たび之を手に入れば、消毒を要するとの評なり、次に智利と日本とを較して其異同を擧ぐれば、其國域の細長くして南北に連亘せる點は日本に似たり、而して日本よりも長く、南緯十七度より五十六度に至る、即ち三十九度、此里程二千八百二十哩あり、是れ世界中に於て南北に延長せる最長國たり、山岳の多くして平地に乏しきこと、極

(七十三)



人ンヤデンイ、カリメア

(八十三)



舎田ンチンセルア

熱と極寒の兩端を有する等は日本に同じ、而して南部は一年間に十三
月降雨すと呼はるゝ程に雨多く、北部は年中全く雨なく、従て草木絶無
只硝石を産出せるのみ、中部は冬期三ヶ月間に雨あり、此間に三十六日
降雨すといふ、春夏秋九ヶ月間は降雨なきは日本と大に異なる所なり、
中部の寒暖、就中バルパライソの如きは、冬時五十度以下に降らず、夏時
八十度を限りとすといふ、夏時の日光は日本より強く感ずるも、風至て
冷かにして、樹陰に入れば大に清涼を覺ゆ、當國は三十年前ポリビヤ、秘
露兩國と交戦して勝利を得たる歴史を有し、智利人は南米中最も武勇
の氣象に富むと稱せらるゝ點は、稍、日本に似たる所あるも、教育の普及
を缺き、大學の程度低く、共和國たるにも拘らず、上下の懸隔甚しく、無智
文盲の愚民多く、上下を通して理想の趣味を解せず、自然の風景を樂し
み、物外の天真を味ふとを知らず、只目前の名利を喜び、一時の俗潮に隨

ひ、今日主義の樂天觀をなす風あるは、我日本と大に異なるを覺ゆ、又地震の多き點は日本に同じ、余がサンチャゴ市に滞在せし間に、二回の微震を感せり、毎食米と豆とを用ふるも、日本に異ならず、南米一般に豆米を食する風あり、其他時間の精確ならざる、商品に掛價あるが如き、人に酒食を強ゆるが如き、婦人の前に勝手に喫煙するが如き、僕婢を呼ぶに手を拍つか如き等は稍、日本に近し、我邦にて紺屋の明後日と唱へ來るが如く、智利のマニアナ(明日)主義といひて、すべて明日々と延期する風あり、而して文明の程度はアルゼンチンよりも十年間後れ居るといふ、又郵便物の延着又は紛失すること多きは我邦と同じからず、要するに世界文明の中心を歐洲とするときは、其中心より最も隔たりたる地は智利國なり、斯る國が縱令多少の缺點は免かれ難きも、今日世界の文明國と相伍するを得るに至れるは、驚くべき一事なり、又其國民を觀る

に壯快樂天の風あるは大に好し、余がアルゼンチンにありて聞く所によるに、南米を東亞に比すれば、ブラジルは支那の如く、アルゼンチンは日本の如く、智利は朝鮮若くは暹羅の如しといひたるは一理なきにあらず、又智利人は自尊排他の風ありといふ、是れ蓋し從來其位置アンデス山陰の僻陬にありて、他と交通を缺けるに由るならん、バルパライソを去るに際し一詩を浮ぶ、

帶水襟山對夕暉、萬千氣象跋波磯、市人不解風流趣、漫入酒家
沾醉歸、

其外智利にてはマテと名ぐる木葉を熱湯に入れ、茶の代りに飲用す、是れ獨り智利のみならず、南米一般に行はるゝ異風なり、

(七十八) 秘露行及北智利の實況

十五日晴、終日右岸の連山を望みて北走す、寒暖七十度なり、紀洋丸は甲板上に輕便鐵路を敷き、船内運搬の用に備ふるは面白し、

十六日晴、午前中にタルタル港に入る、硝石運載の爲なり、地上に一株の木なく、一根の草なく、一線の泉なく、滿山焦土の如し、アラビヤ亞丁港に似たり、一望殺風景を極む、港頭に市街あるも矮屋のみ、

十七日晴、終日同港滞在、夜に入りて出航す、

十八日晴、午前カリタクロン港に入り、硝石の爲に停船す、海岸には市街なく、只工場と倉庫あるのみ、此近傍アントファガスタ港よりポリビヤ國に通ずる鐵路あり、此港元とポリビヤの所有なりしが、數十年前の戰爭後智利の版圖に入れり、

十一月十九日(日曜)晴、終日碇泊、此海岸一帶年中一滴の雨なく、眼に入る邱山は皆禿頭なり、我船中にては毎週木曜と日曜の晩食に日本料理を設けらる、

二十日晴、午後、出港、此日已に熱帯に入るも、東南の風冷氣を送り來り、船室清涼、寒暖計華氏七十度以下なり、

二十一日晴、午後五時イキケ港に入船す、バルパライソ港より此に至るの里程八百〇五哩あり、當地は智利南部の大都會と稱するも、市中の家屋は二階建の木造のみ、道路は敷石をなさず、馬鐵ありて電鐵なし、人口は三萬三千人あり、日本人の此に住するもの數十名ありといふ、

二十二日晴、午前乘客西氏と共に市街を一覽するに、全く田舎の小都會に入るの觀あり、灣内には海豹の群をなして浮游するを見る、

二十三日晴、二千の兵隊軍艦にて入港す、市内にては秘露人排斥運動熾にして、放逐を強制するに至る、此日甘利氏の紹介を以て硝石鑛を一見せんと欲せしも、同行するものなく、又汽車時間を失へるを以て見合

せたり、只終日船中にありて硝石運載を見る、

更無一草觸吟眸、智北連山悉禿頭、滿地富源只硝石、年々輸出幾千舟、

是れ此地の實況にして、硝石の外に一物の産出するなく、衣食住日用品悉く他地方より供給を仰ぐ、

二十四日晴、終日船中にありて沙漠に似たる山を望み、其中腹に汽車の時々昇降去來するを見るのみ、此地目下熱帶圏内の夏季なるにも拘らず、碇泊中船室内の溫度晝夜の別なく、七十四五度なり、

二十五日晴、午後四時出港、海風涼を送り、更に炎暑を覺えず、

十一月二十六日(日)曜晴、終日太平洋上にありて、渺茫たる蒼波に對す、智利の連山望中に入らず、晚天新月西天に懸る、其光は月球の下縁にあり、

望斷家郷路渺漫、太平洋上晚凭欄、日沈智利山難認、新月一鉤思萬端、

(七十九) 秘露首府里馬及び日本移民の實況

二十七日晴、早曉より秘露の連山望中に入る、皆草木なき裸躰山なり、此日午時太陽正しく天頂にあり、然れども風清く水冷かにして、氷を呼び扇を用ふるものなし、

二十八日晴、午前十時我船秘露港カイマオに入津す、イキケより此に至る海路六百五十四哩あり、檢疫に時を移し、午後四時飯田勘之助氏に導かれて上陸、更に電車にて八哩を走り、里馬市に入り、ホテル、マウレトに入宿す、

二十九日晴、當日市内の大寺院、博物館、墓所等を一覽す、此寺院は南米

第一の古刹と稱し、一千五百三十六年里馬の開祖たるピサロー、始めて其礎を起し、九十年を経て竣功せりといふ、堂内に同氏の枯骸ミイラあれば一見すべし、本堂の長七十間、幅二十三間あり、博物館内には西班牙尼占領以前に於けるインカ王國當時の遺物を陳列す、入覽頗る興味あり、墓所はすべて合葬庫式にして、其庫幾列あるを知らず、

三十日曇後晴、領事館芝崎氏と共に汽車にてクララ耕地を一巡し、製糖場を通覽し、日本移民を訪問して歸る、年中降雨なき地なれば、毎日蔗田へ灌溉をなす、山には一根の草木なく、路には灰の如き塵土深くして靴を没するに至る、製糖場事務所に於て代理人テナウド氏の好意にて午餐を喫す、時に秘露名物のビスコ酒及びバルタ果を供せらる、ビスコ酒は砂糖にて製したる焼酎なり、午後五時歸市、領事館に一休の後、博物館の隣地なるホテルマウレ支店に至り、芝崎、齋藤、金澤、飯田、森本等の

諸氏と會食し、更に領事館官宅に至り、一席の雑話をなす、會する者約三十人、領事代理田中敬一氏は山地視察の途に上られ不在なり、里馬は秘露國の首府にして、人口十三萬ありと稱す、依て市街の大はサンチャゴ市の三分一に當ると同時に、家作道路すべての設備が其割合に應じて、同市より劣る、只里馬の特色としては年中雨なく、春夏秋の三期は晴天、冬期は曇天にして、時々降霧あるのみ、因て家屋に屋根なく、其多くは屋上に泥土を塗りて、日光を防ぐに備ふ、故に若し一日大雨あらば里馬全市立ろに陥落すべしとの評あり、其建築は平家又は二階付の低屋にして、すべて土壁より成る、街路及び公園に便所なきはサンチャゴに同じ、故に夜中は男女共に路傍に立小便をなす爲に、往々臭氣の甚だしきを感ず、毎日電車を用ひて大仕掛の水マキをなす、是れ他に未だ見ざる所なり、里馬及び其附近の者は生涯全く雨と雷と雪とを知らず、故に冬時

の霧を見て雨なりと稱する由なるは亦奇ならずや、秘露客中作詩歌あり、

裸體峰巒繞碧灣、
港頭沙路有誰攀、
秘南何處藏風景、
不見破笑微笑山、

里馬城頭望漠然、
黃塵路與禿山連、
終年無雨霑林壑、
貯水農夫灌蔗田、

秘露天無雨、
里麻街有塵、
電車日兼夜、
撒水去來頻、
雨露の恵みかゝらぬしには、草木もはえて見る色どなき、

(八十) 秘露の風俗

當地にて最も盛んに行はるゝものは闘牛と富闘にして、毎週一回之を行ふ、又闘鶏も行はる、マニラの闘鶏と同じく、足に刃物をつけて、斃る

ゝまで闘はしむるなり、日本人の秘露にあるもの約六千人、其中千人は里馬市に住す、其内斬髮業をなすもの五十軒餘ありといふ、市外の民家の不潔なることは智利に同じ、又土人が頭上にて物を運ぶが如きはブラジルに均し、山上に十字架を建て、毎年一定の期日に老弱男女登山參拜するが如き、婦女子が毎日黒衣を被りて寺院に參詣するが如き、天然痘の今尚ほ流行して痘痕を有する人の多きが如き、義務教育を實施せず、慈善事業の發展せるが如きは、秘露と智利と同一なる點なり、寺院の數は里馬市内に五十ヶ寺之に住する僧侶二千人ありといふ、學校は下等貧民の小學は三年、中等以上の子弟の小學は四年、中學は四年、大學は四年五年、若くは七年なりといふ、毎年慈善事業に用ふる金額は里馬一州にて百二十五萬ソル(我五十萬圓)を費やし、六個の慈善病院と三個の孤兒院を維持すといふ、此財源の主なるものは富闘の收入なりとす、

此慈善事業の盛んなる餘弊として、貧民が一日働きて得たる金は皆之を酒色に投し、貯蓄の念を起さざらしむといふ、其他一般に時間を確守せざること、何事も明日に延ばす風あること、郵便物の間違多きこと、應接辭禮に巧みにして意と口と一致せざること、貴賤上下の懸隔の甚しきこと、理想の低きこと趣味に乏しきこと等は獨り秘露人の特性なるにあらず、南米一般の常習といふべし、之を要するに文明の程度は秘露は智利に數等を譲るといふは公評なり、料理に至りては南米一般に鹽辛く、田舎料理たるを免れず、但し米と豆とを多く用ふるを以て我日本人の口に適する所あり、

(八十一) 南米總觀

南米各國の貨幣の余が旅行當時に於ける相場を左に示すべし、

ブラジル國一ミル	我六十錢
アルゼンチン國一ペソ	我八十七錢
ウルグアイ國一弗	我約二圓
智利國一ペソ	我四十錢
秘露國一ソル	我約壹圓

當時英貨一磅は凡そ我九圓八十錢にして、壹志は凡そ四十九錢なり、又南米物産及び輸出の概況を示さば左の如し、

ブラジル國の主要なる物産は、珈琲、ゴム、砂糖、綿、煙草等にして、一年の輸出額我七億五千五百萬圓に相當す、其内三億三千五百萬圓は珈琲の收入なり、アルゼンチン國の物産は牛馬肉類羊毛麥粉等にして、其一ヶ年の輸出額七億圓餘なり、

智利の物産は硝石銅葡萄酒麥羊毛等にして、其輸出額二億圓餘なり、秘露の物産は銅砂糖米獸皮綿珈琲等にして、其輸出額六千萬圓なり、南米が近年俄かに發展するに至りしは、歐米各國が資本を投して天賦の富源を開鑿せるに由る、而して商業の全權は獨逸人に占有せられんとする勢なるも、婦人の衣服や萬般の裝飾品は佛蘭西に仰ぐ、概して南米は佛蘭西を崇拜する風あり、之に反して鐵道や工業は英國及び北米の經營に出づるもの多し、又移民としては伊太利人の右に出づるものなし、其數百萬を以て算ふる程なり、之に次くものを西葡兩國とす、但し行商は殆ど土耳其人の占有に歸し、ブラジル一國だけに百萬人の土耳其人住すといふ、南米人は自ら進て殖産興業に當るもの少なきも、其所有せる土地や家屋の借料が工業の隆盛に伴て騰貴せる爲に坐ながら自然に財産の増殖を見るに至る、其結果奢侈に流れ贅澤に走る傾向

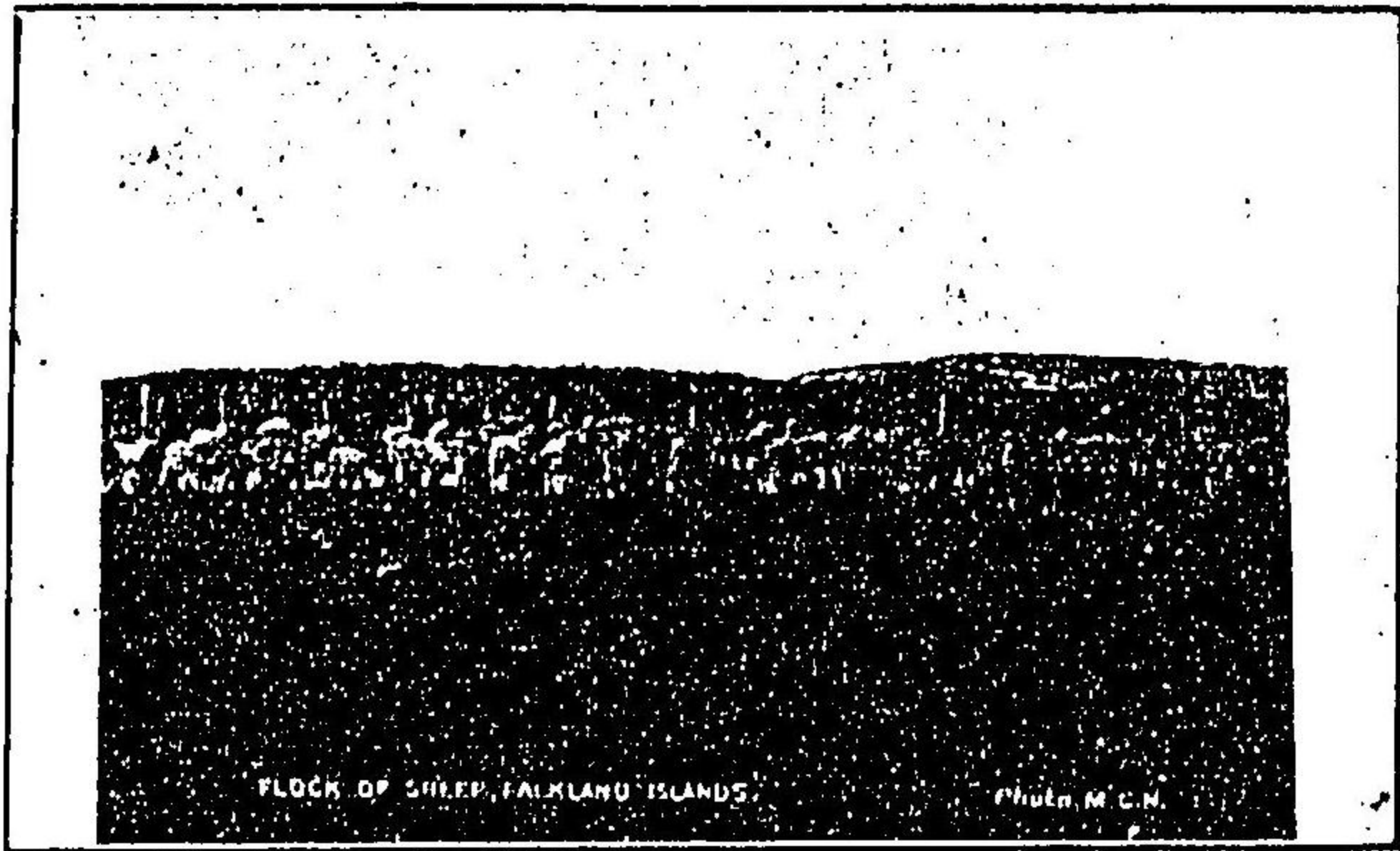
ありて、佛國にて製作する裝飾品美術品の最高價の者の販路は南米に限るとの評なり、又南米人の毎年佛國巴里に遊ぶもの頗る多く、巴里を知らざれば交際が出来ぬと云はるゝ程なり、アルゼンチン一國丈にて年々巴里に遊びて費す金額が三千萬圓の多きに上るといふ、蓋し南米將來の發展は驚くべきものならん、就中アルゼンチンは南米第一の地位を占むるを以て、其隆運は他州を壓倒するに至らんとは、衆目の視る所なり、

(八十二) 移民の心得

南米各國中日本移民を兎に角今日尙ほ歓迎する處はブラジル國と秘露國なり、其他の國々は東洋人の移殖を歡ばざる風あり、然しアルゼンチンや智利の如きは敢て排斥するにあらず、多少の教育ありて此に

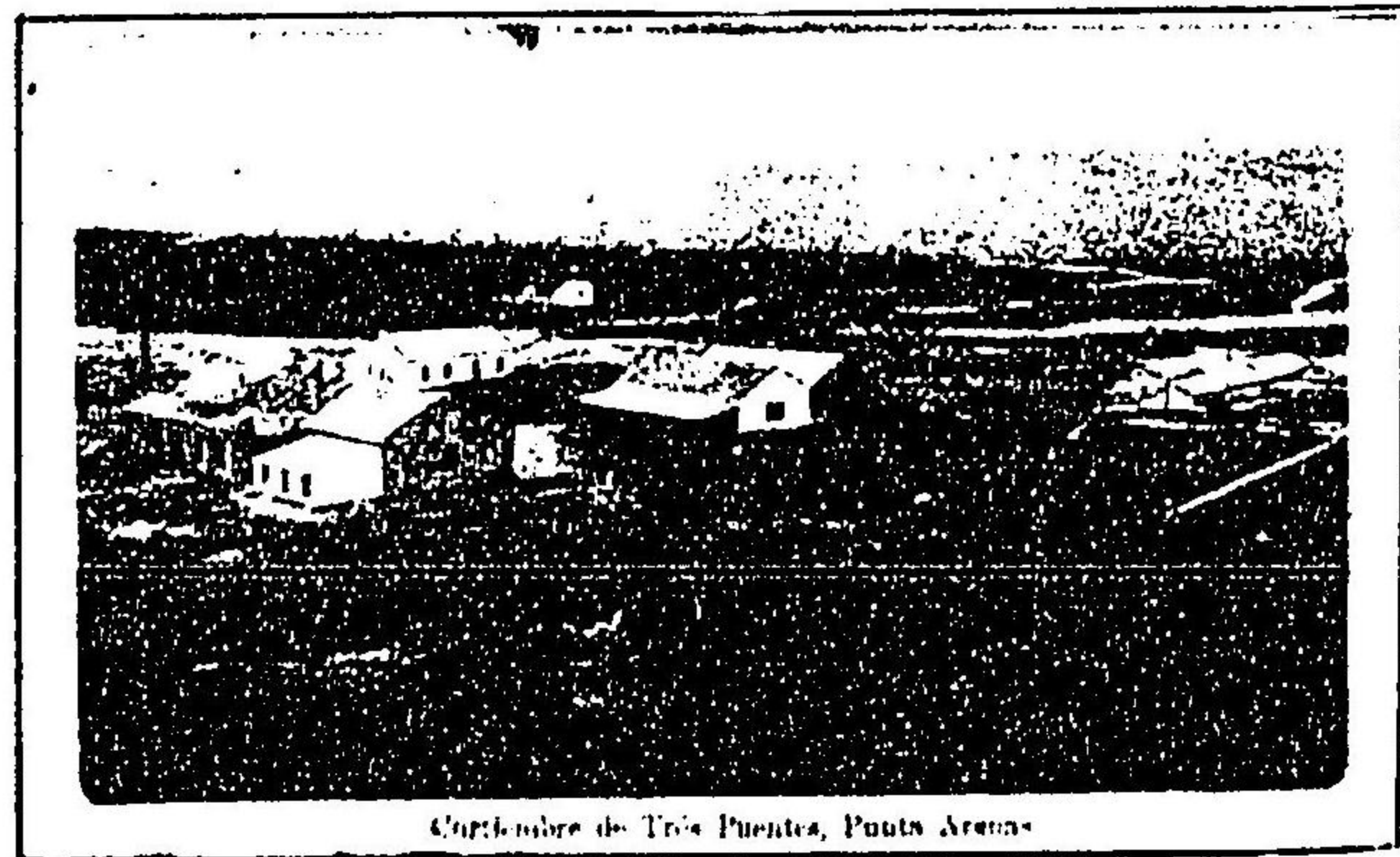
入るものは相當の職に就くことを得るなり、若し我國民にして彼地に
 入らんとするものあらば、第一に身軀の健康、第二に言語の熟達、第三に
 意志の鞏固の三要件を備ふる必要あり、南米の國語はブラジル國は葡
 萄牙語、其他は皆西班牙語なり、英語は彼の國々には通せず、只上等社會
 は佛蘭西語を解し得るを以て、語學としては西語葡語を知らざるもの
 は、佛語を修習して彼地に渡るをよしとす、縦ひ南米は富源地に滿つと
 いふも、手を懐にして金儲の出来る筈なく、多少の艱難辛苦を忍ぶの覺
 悟あるを要す、而して其覺悟を斷行するには必ず鞏固なる意志を有せ
 ざるべからず、從來彼地に渡りて幾分の成功を見たるものは、皆意志の
 鞏固なりし人なり、故に余は健康、言語、意志を以て南米行の三大要件と
 なす、

(九十三)



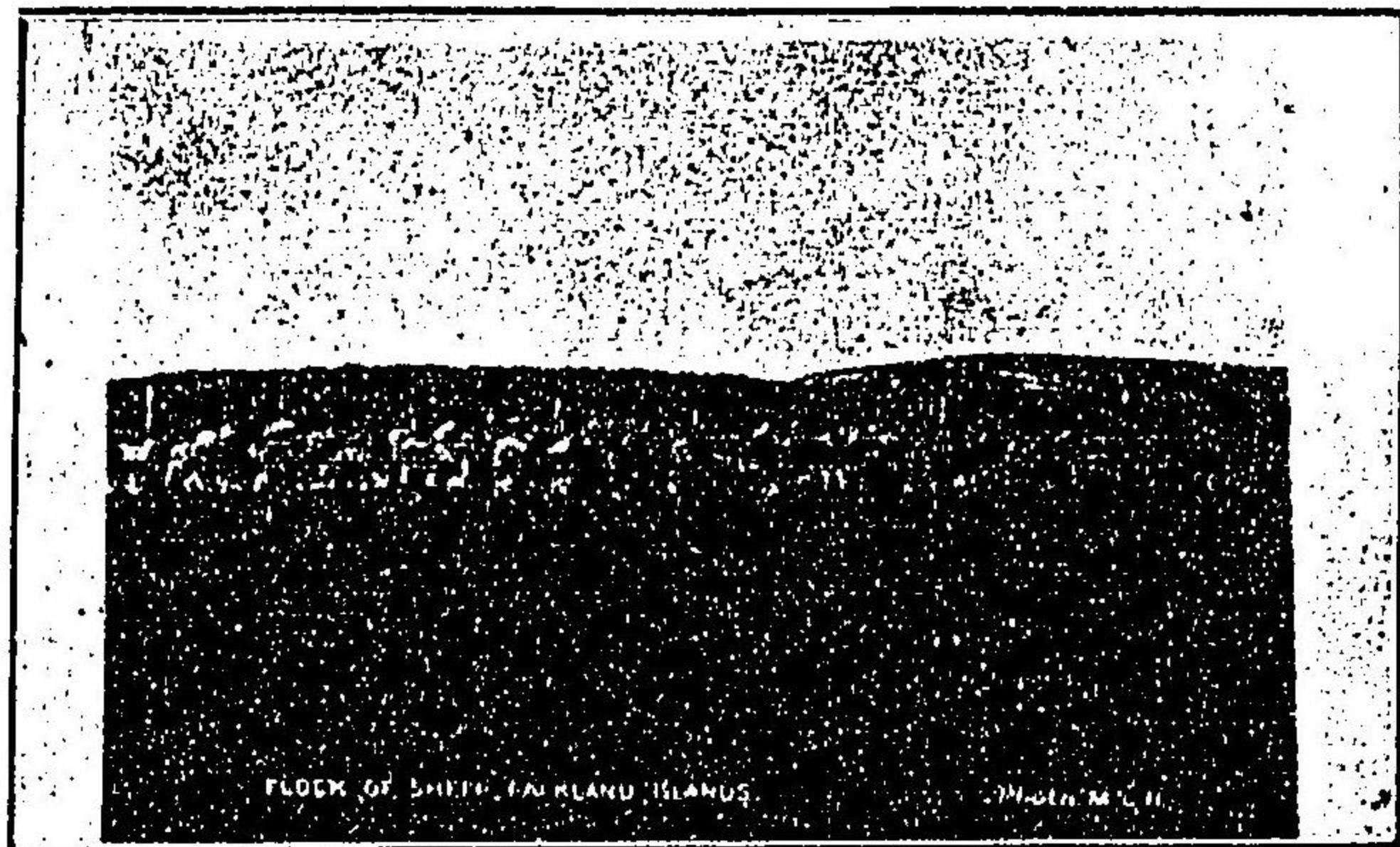
島ドンラク-オフ領英米南

(十四)



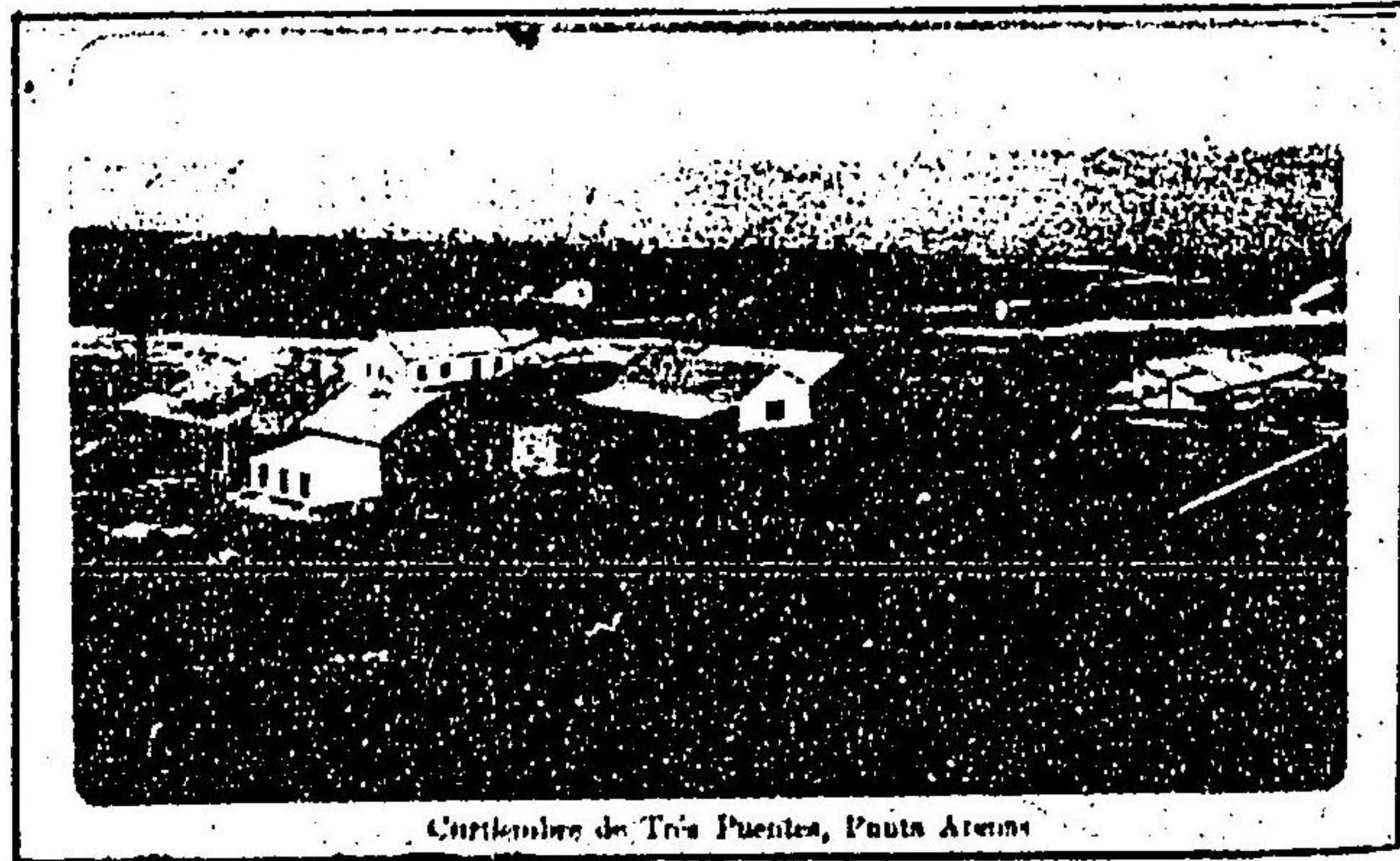
外市ナレアトンボ峽海セラゼマ

(九十三)



島ドンラク-ーフ領英米南

(十四)



外市ナレアトンプ映海ンラゼマ

南半球五萬哩

二四〇

入るものは相當の職に就くことを得るなり、若し我國民にして彼地に
 入らんとするものあらば第一に身躰の健康、第二に言語の熟達、第三に
 意志の鞏固の三要件を備ふる必要あり、南米の國語はブラジル國は葡
 萄牙語、其他は皆西班牙語なり、英語は彼の國々には通せず、只上等社會
 は佛蘭西語を解し得るを以て、語學としては西語葡語を知らざるもの
 は、佛語を修習して彼地に渡るをよしとす、縱ひ南米は富源地に滿つと
 いふも手を懐にして金儲の出来る筈なく、多少の艱難辛苦を忍ぶの覺
 悟あるを要す、而して其覺悟を斷行するには必ず鞏固なる意志を有せ
 ざるべからず、從來彼地に渡りて幾分の成功を見たるものは、皆意志の
 鞏固なりし人なり、故に余は健康言語意志を以て南米行の三大要件と
 なす。

(八十三) 墨士古航路所見

十一月一日晴午前八時半領事館芝崎菅原兩氏と共に電車に駕してカイヤオ港に至る、人口三萬五千人ありて、秘露第一の要港なるも、バルライソより降ること數等、一の見るべきものなし、直ちに輕艇に移りて本船に歸る、日本人支那人百餘人の入船者あり、支那人中には本國の革命軍の應接且つ慰問の爲に歸航するもの七名あり、梁振華氏其長たり、當日午後六時出港月明かに風清くして熱帯にあるを覺えず、未だ赤道を踰えざるも日は既に南天に入る、而して月尙ほ北天にあり、

二日晴、日中稍炎暑を感ずるも、食時尙ほ發汗するに至らず、終日山影を認めず、晚に至り細雨霧の如きを見る、十月二十四日以來始めて雨に遇ふ、

十二月三日(日曜)晴午前船中消火の演習あり、風軽く波穏かに、夜に入りて一輪の明月を頭上に戴く、一望頗る壯快なり。

一葉舟浮赤道邊、太平洋上水雲連、回頭判得家鄉遠、日在南天、月北天、

四日晴朝來殆んど無風、暑氣俄に昇りて七十九度に達す、食堂にては食時に器械扇を運用す、海上飛魚多し、是れ赤道の近きたる印なりとす、

五日朝雨、後晴午前九時四十四分赤道を横断す、余の今回の旅行に於て、赤道横断は正しく第四回目なり、此日海水温度を検するに八十度、室内空氣の寒暖も同じく八十度を算す、乗客始めて炎暑を訴ふるの聲あり、午後六時十分に太陽は地平線下に入りて其形を失ふ、時に明月更に東空に懸る、當夜は満月なり、六時三十分全く殘光を失ふ、赤道直下なるによる、八時後雲盡く消して、只一輪の明月を仰くのみ、船客中獨逸人ウ

ルリヒ氏と共に船橋上に踞し、觀月の宴をなして深更に及ぶ、清風徐ろに來りて、爽快極りなし、

日落橋頭夜色新、波間一道海如銀、仰望東天々懸鏡、照見遠遊

孤客身、

六日炎晴、穩波輕風、午後四時本船の姉妹船たる武陽丸に相會し、互に汽笛を吹きて過く、此日暑氣強く、八十四度に昇る、夜に入りて海水滑かなること油の如く、明月雲間より照し來る、

夜をかさね雲の斷間に出る月は、長き船路の友にぞありける、

七日晴、終日涼風、船熱を洗ひ去り、時々大魚の波間に躍るを見る、當夕パナマ地峽の運河と同一の地點に來る、其工事の壯大無比なるを聞き、拔山倒海とは此事ならんと思ひ、詩歌各一首を賦して所感を述ぶ、

米北米南一峽連、毀山穿石欲通船、人文進步真堪畏、智壓鬼神

工勝天、

諸人の力に天も畏るらん、パナマの山を海となしける、深夜天頂を仰くに月正しく頭上に懸るを見る、是より後は月も亦南天に入るべし、

八日快晴、暑強きも風ありて凌き易し、

四過赤道漸歸東、霜月遠洋三伏風、食後納涼雲自散、家山猶在碧空中、

九日晴、是まで汽船速力一時間十哩以下の割合なりしが、今日は十一哩餘を走れり、潮流に順逆あるによる、夜に入れば一天雲なく、波風清涼たり、

(八十四) 墨士古の實況及び風俗

十二月十日(日曜)晴、早朝六時墨士古國サリナクルスに着岸すカイヤオより此に至る二千七哩あり、當港は巨船自在に防波堤内に入りて、岸頭に繋留するを得、物貨は汽船より直に汽車に移積するを得、此の如き設置は南米に於てブイノスアイレスを除く外には未だ見ざる所なり、東郷船長及び東洋汽船會社出張員小林氏と共に上陸、小林氏の案内にて市場を一覽す、近在の土人此に來りて衣食日用品を調達する所にし、我日本に於ける田舎の祭日の露店を見るか如し、男子は廣帽を被り、赤裳を着け、頗る異装を爲す、且つ此邊の土人は婦人よく勞働すといふ、其不潔の度は南米に異ならず、市街及び家屋は粗にして且つ低し、左右に山を繞らすも、皆高からず、山上には灌木あるのみ、年中風強く雨乏しきが故なり、此地北緯十七度、暑氣八十三度に當る、是より首府メキシコ市まで三十六時間を要す、時間なきを以て上府せず、又是よりメキシコ

灣に通ずる鐵道ありて、コアサコルコス港まで横斷里程約三百哩あり、當地所見各一首を得たり。

殘月光中船入津、墨南冬曉暖於春、岸頭成列紅裳步、不是歐人、
悉土人、

メキシコは冬の旅路も暑ければ、芭蕉の蔭に人はすゞめり、
又海門に砲臺あるを望みて一吟す、

墨南灣一曲、街路繞山根、邊塞成兵備、砲臺挾海門、
午後六時出航す、

十一日晴、終日墨士古連山を望て北走す、日將に入らんとする時、殘光
天を染めて、夕景尤も佳なり、

十二日晴、船中の客は九分通り支那人、彼等は終日賭博をなす、

萬里長途倦怠生、欲眠食後酒三傾、風輕浪靜船窓寂、只聽清人

賭博聲

支那人の幼兒年齢五六歳なるもの、一手六指、兩手十二指あるを見る、船
中の一奇觀たり、

十三日晴、午前十時入港、其地名はマンサニオなり、サリナクルスより
六百哩を隔つ、峰巒草木茂生し、濱頭亦深林鬱立す、久く禿山のみを見て
此翠影に接するは、大に目を娛ましむるに足る、

林丘抱海小灣圓、翠影參差映碧澗、霜雪不侵墨南地、水明山紫
是終年、

十四日晴、船を進めて棧橋に纜を繫く、岸頭の家屋、小邸の上下に點在
し、木造トタン葺又は板葺にして、皆矮屋のみ、我北海道北見沿岸の小港
に似て、實に寒村の觀あり、只鐵路の是よりメキシコ市に通ずるあれば、
物産の出入港なり、檢疫殿なるが爲に乗客の上陸を禁ぜられ、岸頭にあ

りながら市街に歩を散するを得ず、停船中禁足を命ぜられしは、此地を初回とす、當夕降雨あり、墨士古はすべて南米式なり、教育未だ普及せず、文字を解せざる愚民多く、時間の精確を守らざる等全く相同じ、舊教の勢力あるも同一なり、某市街にて人口十萬に對し、寺院七十ヶ寺を有する一例を見て推知するに足る、全國の人口一千三百六十萬人の内百分十九は白人種百分四十三は混血人種、即ち西班牙人とインデヤン人の混血なり、之を通常土人と稱す、百分三十八はインデヤン人種なり、其所謂混血種は血色稍日本人に似たるあり、

十五日曇、終日停船、風なくして暑氣蒸すが如し、夜に入りて殊に甚しく、室内八十五度に昇る、

十九日晴、午前七時より硫黄を燒きて室内を薰せしむ、其臭鼻を衝て人を窒息せしめんとす、是れ米國政府より命じて、船内に病者の有無に

拘らず、消毒法を厲行せしむるなりといふ、余は生來始めて斯る狐附虐待同様の場合を経験せり、午後二時出航、海上の清風は墨士古滞船中の積累を一掃し去りて、氣色蘇するが如し、以下太平洋歸航日記に入る、

第十、太平洋歸航日記附世界周遊再見

(八十五) 布哇航路所見

明治四十四年十二月十六日墨士古マンサニオ港を出航し、六千哩以上の太平洋を横断して、歸行の途に就く、

十二月十七日、日曜晴、曉來陸影全く眼中に入らず、茫々たる太平洋上直に布哇を指して進行す、

十八日晴、太平洋の所見を賦す、

詩囊酒瓮客中攜、探句櫓頭醉欲題、米北米南雲斷續、道黃道赤

暑高低、波爲堆處鯨能躍、船不到邊禽自栖、茫渺太平洋上路、

家鄉遠在夕陽西、

十九日曇、北風冷を送り來り、朝氣颯々として俄に秋に入るの感あり、

今朝驗温するに室内七十三度、海水七十四度なり、夜來波漸く高く、船少しく搖動す、

二十日曇、北風波を起し、波頭白を冠す、雲烟四涯を鎖して、一望濛々たり、

二十一日曇、二個の海鵝の風濤を涉り、船を逐て飛翔するの外、終日眼に觸るゝものなし、船中徒然の餘り、支那革命の一絶を賦して、同乘梁振華氏に贈る、

霹靂夜來天地轟、黃龍失墜滿廷驚、曉窓傾耳聞人語、四百餘州

革命聲、

二十二日曇、夜來波更に高く、甲板上に打上ること數回、船亦橫動し、船病者を生ず、曉天雨を帶び、時々細雨來る、

二十三日晴雨不定、忽ち日光を漏らすかと思へば忽ち凄雨蕭々とし

て至るあり、今朝船正しく墨州と布哇との中點にあり。

十二月二十四日(日曜)晴、但し二三回の少雨あり、午前船中にて消火の演習を行ふ、風位東方に變し、船を進むるに好し、溫度昇りて七十六七度に達す、波あれども高からず、只太平洋の中心たるを以て、其幅頗る大なり、暮天新月を望む、涼亦船に滿つ、

夕照入、波々亦紅、望中得句、嘯長風、南溟今夜涼如水、萬里檣頭月一弓、

二十五日晴、當日はクリスマスなりとて、食堂に裝飾を施す、午後汽船に逢ふ、米國商船なり、晩食にはクリスマス、デンナーあり、食後涼を納る、熱帶風無熱、太平洋不平、滿船載涼去、蹴浪向檀洲、布哇ホノル、港を支那語にて檀香山といふ、因て詩中に檀洲の語を用ふ、

二十六日朝雨後晴、夜に入りて一天雲なく、只一鉤の涼月を望むのみ、二十七日晴、暑氣俄かに加はり、盛夏の如し、東風船を送ること連日に同じ、

日夜船窓望布哇、水天連處浪無涯、家書未到年將暮、好託東風傳客懷、

二十八日晴、午後驟雨あり、晩に雷鳴を聞く、終日船中餅擗をなす、元日の近けるに由る、當夜布哇島の燈臺を望む、

(八十六) 布哇の實況

二十九日晴、早曉より布哇の山を前後に見、十時半ホノル、港に入る、檢疫頗る嚴にして、六時間各室を封鎖して、硫黄を焼く、墨士古港に於けるよりも甚しく、其煙は眼を衝き咽を刺す、俗に目も口もあけられぬと

は此事ならん、此日支那革命軍が共和政を執行し、孫逸仙大統領に推選せられたりとの電報に接し、當港支那街にては、各戸新國旗を掲げて祝意を表す、船中より布哇島を望むに、嚴冬の氣節に近きも、山色蒼々として夏山に似たり、全島峯巒より成り、往々赤土を露出し、蔗田蕉園の多きは、我小笠原島に同じ、

洋心一碧夾孤山、船入蔗田青處灣、冬日暖於春日暖、不寒不熱是仙關、

當夕七時船を棧橋に繋ぐ、時に明月清風窓に入り來る、

布海波頭月、連檣影動搖、夜深人漸定、港上起涼颺、

墨國マンサニオ港より、此に到る海程三千〇十五哩あり、

三十日晴、午前金曜會幹事石田銚吉氏船中へ來訪あり、氏と共に上陸領事館及び領事官舎に至り、總領事上野專一氏に面會す、同氏の好意に

て、當夕官舎に於て晚餐を設けらる、正金銀行支店長赤井氏にも面會す、食後領事館樓上にて南半球周遊の報告演説をなす、聽衆百五十名、水曜會の主催にかゝる、

十二月三十一日、日曜朝、驟雨あり後晴る、上野總領事と共に自働車に同乗してワイバフ耕地に至り、日本移民の實況を視察す、各戸餅を擣き松を飾り、元日の準備に汲々たり、全く日本内地の村落に入るが如し、家屋は木造にして床高く、室内清潔、衛生に注意せる點は南米移民の住宅の比にあらず、家族はウスベリを敷きて、日本服を着し、其上に團座す、歸路某富豪の控邸に入り、純然たる日本建築を見る、數萬圓を費せりといふ、午後赤井氏の宅を訪問す、此日往復三十四哩に及ぶ、船中にて除夕を送るは今回を始めとす、

(八十七) 南洋の迎年

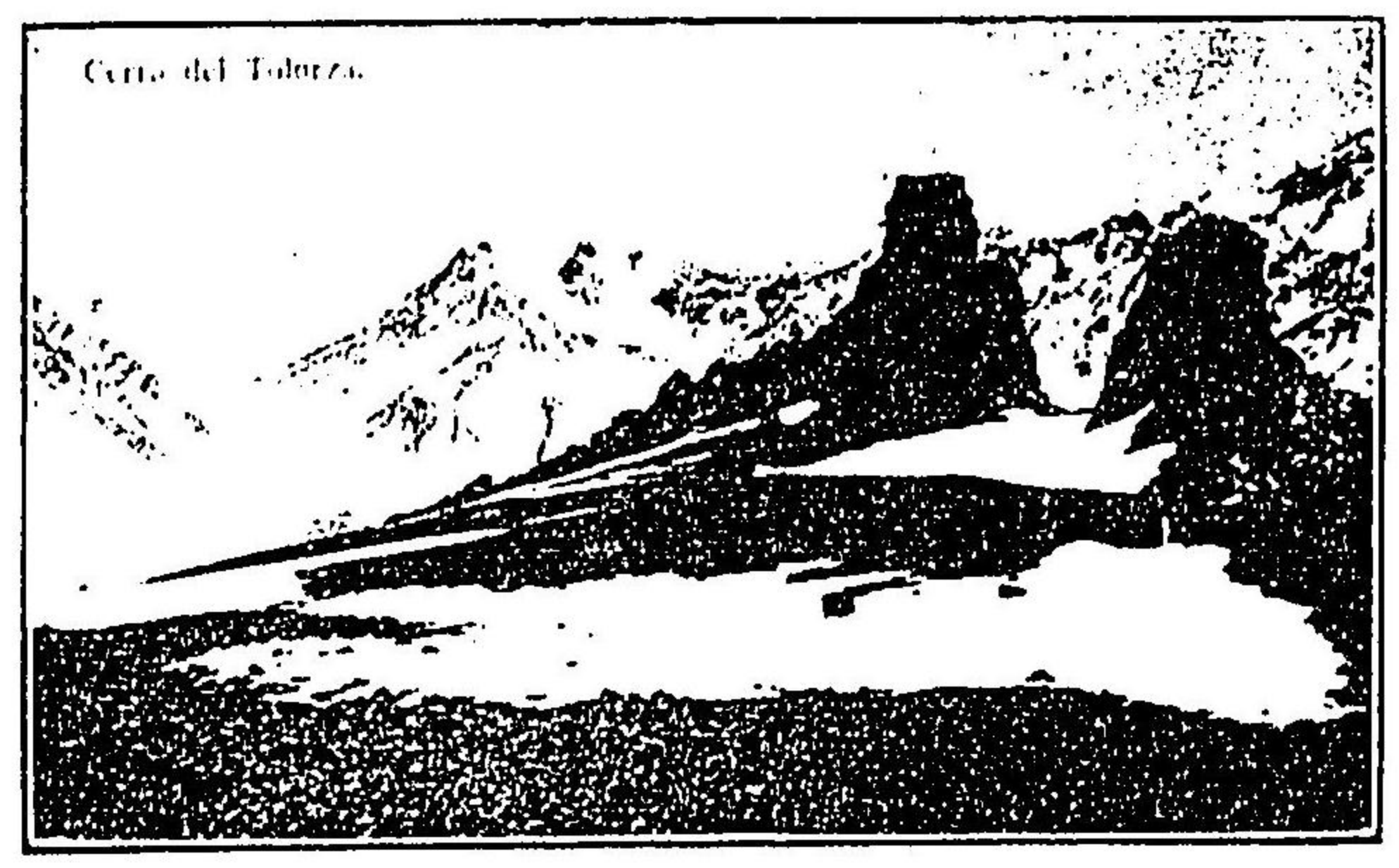
明治四十五年一月一日(元旦)晴朝船中に新年拜賀式あり、船長の發聲にて兩陛下の萬歳を三唱し了り、雜煮を味ひ屠蘇を傾け、更に領事館に至りて新年の遙拜をなし、午後市外の散策を試み、水族館に入る、異様の魚類多し、又他方面へも電車にて遊覽す、此日の行程亦數十哩に達す、當夕歸船して所感を賦す、

熱海波頭寄客身、學禪未達歲將新、望中雲綻漏涼月、認得破顏微笑春、

天地作家波作筵、太平洋上遇新年、我元生死海頭客、不怪佳辰身在船、

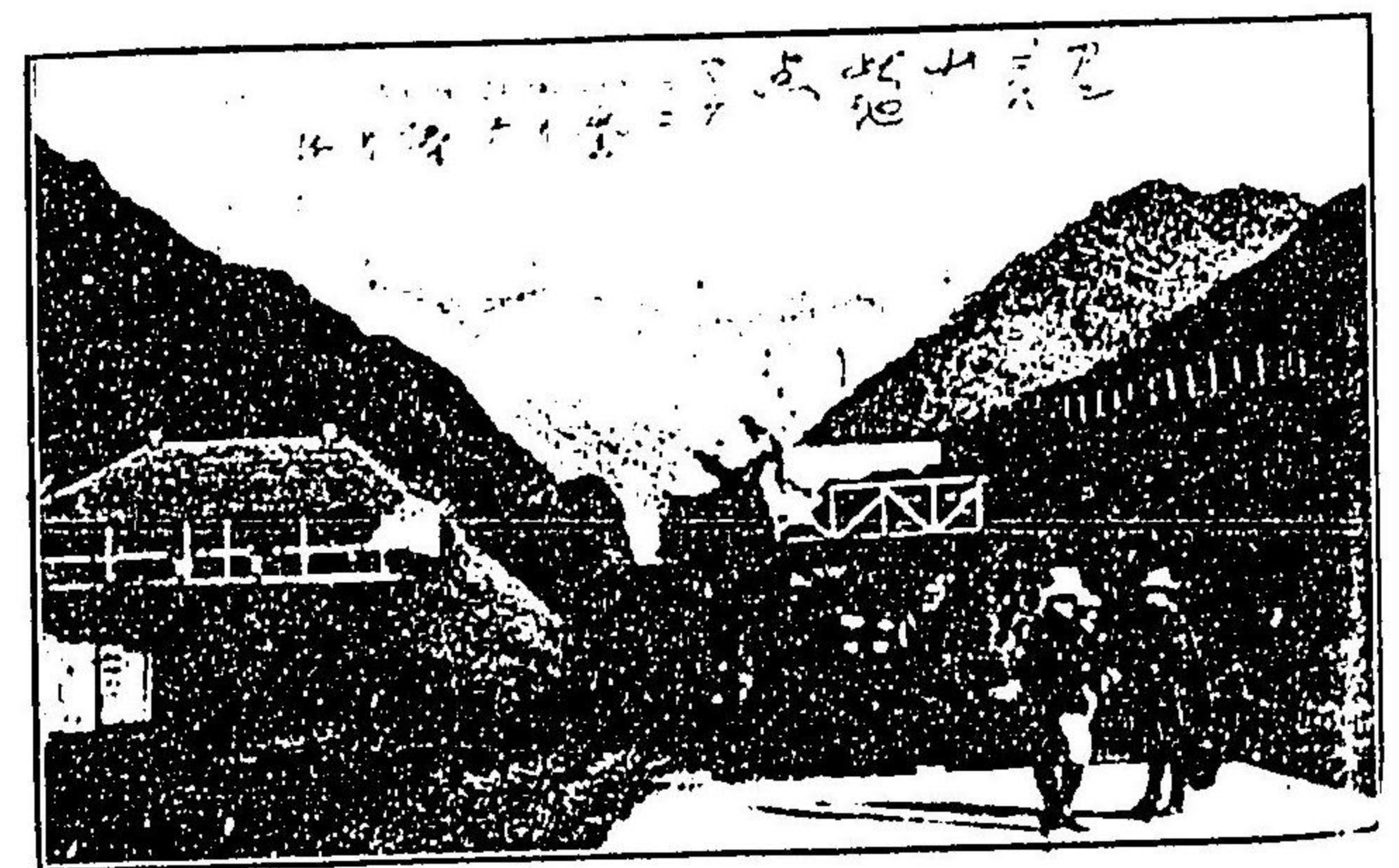
平洋の島にやどりて春見れば、草花さきて青葉しげれり、

(一十四)



景雪上山スデシア

(二十四)



道鐵スデシア

(八十七) 南洋の迎年

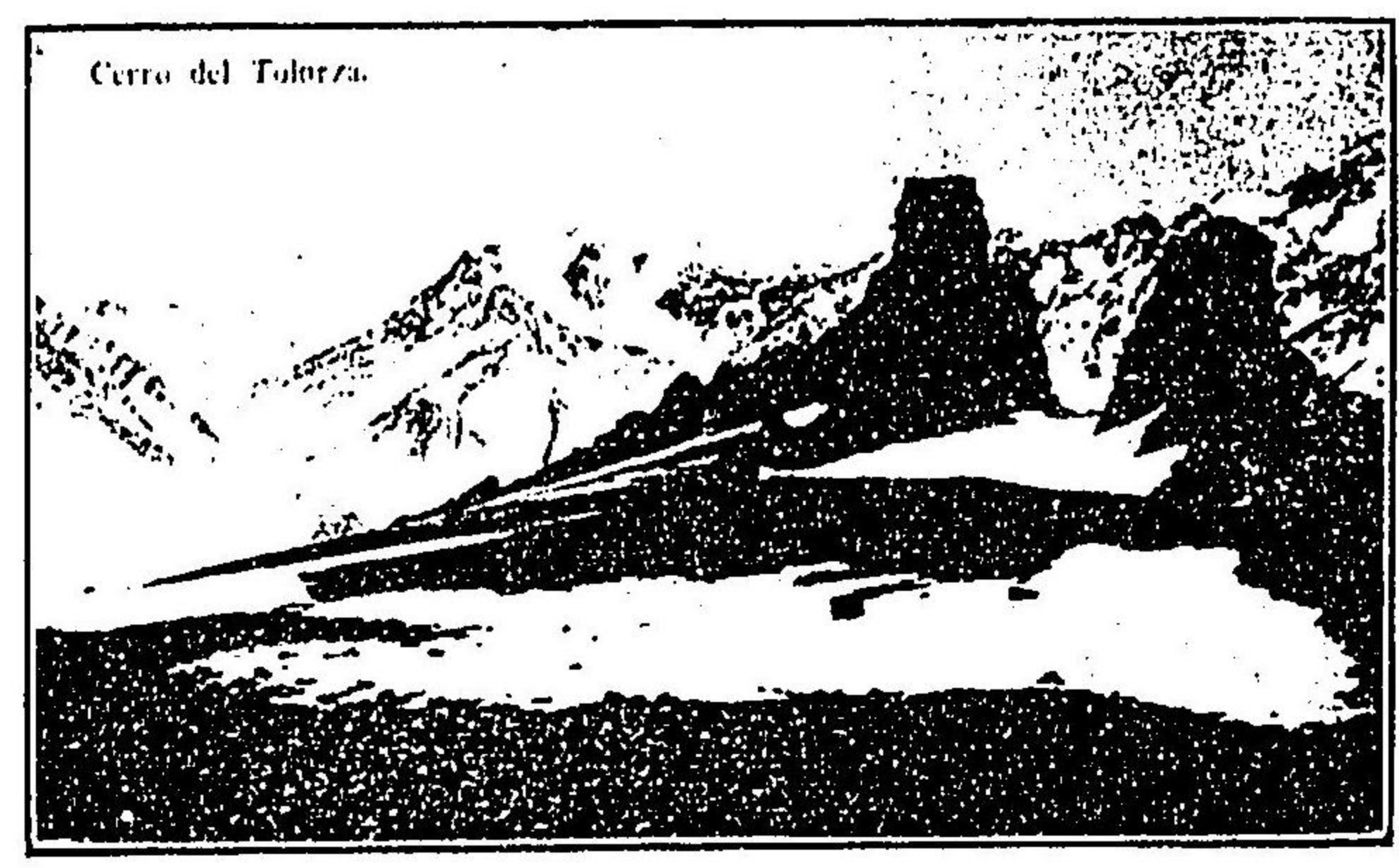
明治四十五年一月一日元旦晴朝船中に新年拜賀式あり船長の發聲にて兩陛下の萬歳を三唱し了る、雜煮を味ひ屠蘇を頼む更に領事館に至りて新年の道拜をなし午後市外の散策を試み水族館に入る異様の魚類多し又他方面へも電車にて遊覽す此日の行程亦數十哩に達す當夕歸船して所感を賦す

熱海波頭寄客身、學業未達歳將新、望中雲鏡漏涼月、認得破顏微笑春、

天地作家波作鑑、太平洋上遇新年、我元生死海頭客、不怪佳辰身在船、

平洋の島にやどりて春見れば草花さきて青葉しげれり、

(一十四)



景雪上山スデニア

(二十四)



道鐵スデニア

鶯も鳴かずそあるらん島里は春とはいへど梅もなければ、

異域の孤島にありて連軒旭旗の風に翻へるを見るは、快も亦甚し、

一月二日晴、朝石田氏と正金銀行支店に至り、各室を一覽す、銀行の新築としては最新式なりといふ、更に赤井氏と同乗して、行くと七哩、名所且つ古戰場たるバリ海峡に遊ぶ、背面の海濱及び草野を一瞰し、風光明媚、眺望絶佳なり、只峽間を通過する風力強く、帽を飛ばすの恐あり、一帯の山勢は屹然として屏風の如し、巖頭に古戰場の由來を刻せるを見る、歸路迂回して博物館に至り、館内を一覽す、本島及び南洋諸島の土人の衣食住及び風俗に關する遺物を陳列せるあり、午時領事館舎にて金曜會員と共に撮影し、且つ總領事と共に午餐を喫し、布哇中學校に移りて講話をなす、聴衆百餘名、本願寺出張所長今村惠猛氏の主催なり、當夕は赤井氏宅にて晚餐を饗せらる、食後更に中央學院に至りて妖怪研究の

結果を演述す、聴衆滿堂約三百名に及ぶ、勝又英次郎氏其校長たり、

(八十八) 布哇見物及び日本移民の近況

三日晴、石田氏と共に監獄を一覽す、獄内廣からず、設備可ならざるも囚徒を遇すること頗る寛なりといふ、日本人にて入獄せるもの六十餘人あり、次に當地の中學校を參觀す、校長スコット氏は今より三十年前大學豫備門の教師にして、余も二年間其教授を受けたることあり、午後今村氏の案内にて、望月料理店に至り、日本式の温浴をなし、且づ日本式の晚餐を喫す、すべての設備は東京の料理店と毫も異なることなし、庭前には海水の岸頭を洗ふありて、風光亦佳なり、今夕満月なるも、淡雲ありて清朗ならず、

四日晴、午時總領事の好意により、送別の午餐を授けらる、午後五時出

航す、上野、赤井、今村、石田、勝又等の諸氏十餘名の送行を辱うす、夜に入りて一天片雲なく、明月獨り皓々たり、

檀山去入有無中、船走斜陽影外風、萬頃波頭雲不礙、一輪明月照荒洪

布哇は眞に絶海の孤島にして、總面積六千四百五十四方哩あり、之を我臺灣に比するに約二分一に當る、人口十六萬人の内、種々の人種別あれども、日本人多數を占め、大約七萬の日本人ありといふ、ホノル、港の如きは四萬の人口中、半數は日本人なり、故に街上を見るに日本服を著たる婦人列をなして來往す、時正に新年にして、軒前旭旗と松竹を飾る家、到る處に櫛比し、又海岸には漁船の旭旗を掛くるもの多く、一見日本の孤島に來るの思をなす、日本新聞も布哇新報、布哇日々新聞、日本時事の三種あり、又當地勞働者の毎年日本に送金する金額大約一千萬圓と稱

す、隨て日本人の勢力の如何を知るべし、實に布哇は日本移民の一大成功場たり、氣候は春夏秋冬の別なく、寒暖は平均を保ち、七十度より八十度の間を出てず、晝と夜との間も二三度の相異あるのみ、余の滞在中は日中七十七八度、夜間七十四五度なりしが年中同様の氣候なりといふ、是れ四時の中夏のみありて春秋冬なしといふべし、

五日晴、南風暑を送り來り、寒暖計八十度に昇らんとす、夜に入り雲月朦々たり、

(八十九) 布哇出航以後の所見

六日晴、南風の爲に暑氣稍強し、船は西南隅を指して西進す、潮流を利用する爲なり、夜に入りて月亦好し、

七日(日曜)曇、風位東に變して船を送り來る、正午の暑氣八十度に達す、

午後四時頃より天候俄に變し、烈風急雨、天地爲に暗し、此風浪の中に海鵝の獨り飛揚せるあり、夜に入りて風收まり、雨も亦歇む、

檀香山外海、雲散水天青、皇國何邊在、西涯只見星、

八日快晴、前夕の風雨天地を洗ひ去りて廓然たり、而して目に觸るゝものは蒼波のみ、此日二十四時間に二百六十六哩を航過せるは、智利出航以來の最長里程なり、

九日晴、南風強きも波高からず、午後三時半西經を出て、東經に入る、是より再び東半球の人となる、

冬暖太平洋上風、納涼薄暮倚船櫓、何人不喜家鄉近、身出西球已入東、

十日、西經より東經に移りたる爲に、九日より直ちに十一日に飛び越し、十日は零日となる、米國に往航するときには一日の餘日を生じ、日本

へ歸航するときは一日の空日を生ずるなり、

十一日晴、但し驟雨あり、西北風勁く、船の進行を妨ぐ、今日より熱帶圈を出て、暖帶に入る、

十二日晴雨不定、朝時虹霓を見る、又一鳥の何れより來りしか、雲天に高飛するあり、此日船正しく布哇と横濱との中央點に達す、冷氣俄かに加はり、夏より秋に入るの心地をなす、寒暖七十二度なり、

十三日晴、逆風の爲に船の進行遅々たり、當夕四百哩を離れて、天洋丸より無線電信の通信あり、

連日空濛望不開、逆風捲海浪花堆、船長有報人欬耳、無線電傳音信來、

(九十) 太平洋の風波及び横濱安着

十四日(日)曜晴、勁風前日に異ならずして、高浪一層甚しく、船縦動を繼續す、但し幸に天遠く晴れ度り、茫茫無一物の南溟に、波頭白を飄かへすを見るも亦壯觀なり、乗客皆指を屈して終船の日の到るを待つ、此夕一千五百哩を隔て、落石局と無線電信を交換す、

十五日晴、逆風激浪未だ收らず、船は北緯二十八度に傍て西進す、涼味秋の如し、今夕更に銚子局と無線電信の往復あり、

十六日晴雨不定、逆風の爲に船の速力鈍し、

十七日曇、時々驟雨來る、風波の爲に一晝夜僅に百四十六哩を航進す、船長の語る所を聞くに、山下機關長行術不明、海中に投身せし形跡あり、之に加ふるに風波の爲に船行遅々たれば、石炭缺乏の虞あり、因て無線電信にて救助船を派遣することを本社へ請求したりし由、之を聽きて乗客皆不安の色なり、

十八日晴、但し二三回の驟雨あり、風波少しく減ず、此正午横濱を距る六百九十一哩の地點にあり、寒暖は六十五度に下る、

昨日は春、今日は夏かと思ふ間には、や我國の冬は來にけり、當夕無線電信にて東京なる自宅へ向け、延着を報知す、

十九日晴後曇、午後より暴風雨となり、電光を見る、終夕眠る能はず、

二十日晴、午前中暴風未だ歇まず、午後に至り漸く收まりしも、波猶ほ高く、船の搖動甚し、但し船長の報告により低氣壓已に去り石炭も不足せざる見込立ちたれば、救助船を謝絶せりといふを聞き、皆愁眉を開く、

一月廿一日(日)曜晴、午前より黒潮にかゝるも、風靜かに波亦穩かなり、午後細雨來る、夕六時房州長島の燈臺望中に入る、乗客喜色顔に溢る、夜十一時相州觀音崎下に停船す、

廿二日晴、八時横濱に入る、長途五萬〇〇七十五哩を恙なく過了るを得たり、時に檢疫あり、九時家族及び安藤弘、鼎義、曉兩氏本船に來りて迎へらる、十時上陸、十一時新橋着、四五十名の諸氏、余の安着を迎へて停車場内にあり、深く其友情の厚さを謝す、歸着の所感一首あり、

背花四月上、長途、看盡濠阿歐米都、歸到家山冬未遍、只驚霜雪

滿吾鬚

(九十一) 南半球十二勝

以上既に五萬哩餘の紀行を記述し了り、更に餘談として、前記に漏れたる韻文を掲ぐ、先づ今回世界周遊の目的は南半球の視察にあれば、其途上余が耳目に觸れたる名勝を集めて十二題を撰定し、其風光を吟咏す、是れ余が所謂南半球十二勝なり、即ち左の如し、

一、木曜島曉嵐(濠洲)

船踰赤道向濠南，熱帶風蒸暑不堪，驟雨夜來過木島，曉天涼氣釀晴嵐。

二、珊瑚洲秋濤(濠洲)

萬里壯遊途未中，珊瑚洲外夕陽風，衣寒自覺家鄉遠，濠海秋濤連極空。

三、志度尼汽笛(濠洲)

地挾曲灣街路斜，濠東第一占繁華，千舟來去忙於織，汽笛聲埋十萬家。

四、米留盆落葉(濠洲)

耶水源頭牧野平，車窓五月聽秋聲，無人落葉林間路，只見牛羊任意行。

五、奈達灣冬月(南阿)

竺海風波晚漸收，繫船一夜泊津頭，月光帶露山河白，冬滿南阿十二州。

六、喜望峯暮烟(南阿)

喜望一過波漸圓，太西洋上海如鏡，夕陽影裏山何去，只留殖民州外烟。

七、伯刺爾珈園(南米)

伯南九月試行吟，驛路春風暑已侵，一望鹿原濶如海，綠波萬頃是珈林。

八、亞然丁牧田(南米)

晴風好日亞然丁，春滿牧田天地青，行盡舞埃城外路，牛羊醉草睡烟汀。

九、羅浪江春帆(南米)

羅浮江上暮春天、習々輕風拂曉烟、黃浪渺漫看不盡、白帆如鳥自翩々、

十、安天山夏雪(南米)

林溪深處踞清陰、夏白安天一帶岑、對此千秋不磨雪、何人不起自疆心、

十一、摩世闌夜雨(南米)

千灣萬曲繞群峰、夢裏不知狂浪衝、峽路終宵風雨暗、船窓全被冷烟封、

十二、三舍巷午雲(南米)

城外牧田春草抽、如碁點々是羊牛、摩天連嶽明還滅、午下無風雲自流、

(九十二) 南球周遊行路吟

又今回の世界周遊の順路に従ひ、春時横濱を出航して、冬時横濱に歸航するまで經過せる途上吟十二首あれば、左に併録す、

五言律十二首

一、香港行

背花春四月、孤客向西航、福建山明滅、臺灣海短長、珠江舟似葉、香港峽如甕、何物能消暑、開樽酌晚涼、

二、呂宋行

夜來雷雨過、卜晴出峽間、日沈支那海、船泊呂宋灣、對月思佳句、隔雲望故山、群巒時隱見、知是悉南蠻、

三、濠洲行

客中春變夏，侵暑向濠東，孤島黃梅雨，遠洋赤道風，暮潮來漲碧，斜照散流紅，舟過珊瑚海，南山氣象雄。

四、濠洲客中

濠洲山海濶，六域自相分，一島千灣雨，五州萬壑雲，天寒人跡少，風戰葉聲聞，客裏秋將晚，荒庭菊獨芬。

五、南阿行

去濠向何處，前路白雲封，竺海四時夏，阿山六月冬，狂風吹不歇，激浪怒相衝，認港舟將入，依然喜望峰。

六、英國行

南阿舟解纜，望裏夕陽催，卓子峰將沒，太西洋漸開，波山魚跋涉，風路鳥徘徊，北進三旬後，英巒入眼來。

七、歐洲客中

依舊歐天地，光風霽月饒，詩琴酒攜帶，英獨佛逍遙，瑞嶺夏留雪，極洋日照宵，欲探南米勝，再駕太西湖。

八、南米行

客舟辭里港，風雨夏將深，佛海涼初湧，葡都暑尚侵，樓燈懸岬角，仙嶼臥洋心，一髮浮波際，伯東港上岑。

九、南米東部客中

堪驚南米地，隨處富源肥，伯野珈林鎖，舞城牧草圍，羅江灣是口，安嶽雪爲衣，天產藏無盡，奈何人住稀。

十、南米西部客中

南米盡頭海，浪高舟路迷，法洲風颯々，麻峽雨凄々，三舍巷雲宿，跋波磯月栖，家山千萬里，遠在太平西。

十一、本邦歸航

太平洋上路、萬里就歸舟、看過巴南峽、行吟墨士州、米山雲裏
隱、布島浪間浮、舉首家鄉近、燈臺先入眸、

十二歸家偶成

春朝曾去國、冬晚此歸鄉、赤道四回過、冰洋一度航、寄身幾天
地、爲客半星霜、欲祝吾無恙、團樂舉壽觴、

(九十三) 南半球及歐洲周遊總里程表

海陸總里程五萬〇〇七十五哩

其內譯

海路總計

四萬四千百五十六哩

陸路總計

五千九百十九哩

是れ明治四十四年四月一日橫濱を出航してより四十五年一月二十一

(三十四)



智利國婦人

(四十四)



秘露土人

南半球五萬哩

二七二

太平洋上路、萬里就歸舟、看過巴南峽、行吟墨士州、米山雲裏、隱、布島浪間浮、舉首家鄉近、燈臺先入眸、

十二歸家偶成

春朝曾去國、冬晚此歸鄉、赤道四回過、冰洋一度航、寄身幾天、地、為客半星霜、欲祝吾無恙、團樂舉壽觴、

(九十三) 南半球及歐洲周遊總里程表

海陸總里程五萬〇〇七十五哩

其內譯

海路總計 四萬四千百五十六哩

陸路總計 五千九百十九哩

是れ明治四十四年四月一日橫濱を出航してより四十五年一月二十一

(三十四)



智利國婦人

(四十四)



秘露土人

日横濱に歸航するまで、約十ヶ月間に跋渉せし海陸總里程なり、其細目左の如し、

海路四萬四千百五十六哩の内譯

- 一、横濱より香港マニラ經由、濠洲メルボルンまで 七千〇四十一哩
- 一、香港より廣東まで往復 百九十哩
- 一、メルボルンより諸港經由喜望峰まで 七千二百六十二哩
- 一、喜望峰より龍動まで 六千八百八十一哩
- 一、北極海往復 二千七百七十六哩
- 一、英國リバプールより諸港經由リオジャネロまで 五千六百八十四哩
- 一、リオジャネロより諸港經由ブエノスアイレスまで 一千二百四十二哩

- 一、ブエノスアイレスよりフォルクラント島、マゼラン海峡及び諸港を
経てバルパライソまで 三千二百〇九哩
- 一、バルパライソより諸港經由カイヤオまで 一千四百五十九哩
- 一、カイヤオよりサリナクルスを経てマンサニオまで 二千六百〇七哩
- 一、マンサニオよりホノル、を経て横濱まで 六千五百〇五哩
- 陸路五千九百十九哩の内譯
- 一、濠洲内地汽車行 百四十五哩
- 一、歐洲大陸汽車行(海峡渡船を含む) 二千八百五十八哩
- 一、英國內地汽車行 九百三十哩
- 一、ブラジル國內地旅行 一千〇十哩
- 一、アルゼンチン國內地旅行 百八十九哩

一、智利秘露及布哇内地旅行

七百八十七哩

(十哩以内の短距離往復は此中に算入せず)

(九十四) 前後三回の足跡

余の世界周遊は前後三回にして、

第一回は明治二十一年五月より二十二年七月まで、

第二回は明治三十五年十一月より三十六年八月まで、

第三回は明治四十四年四月より四十五年一月はて、

第一回到に歴遊せし國名、停留せし地名を左に掲ぐ、

米國及加奈陀(桑港、ソルトレイキ市、デンバー町、オマハ町市、俄古市、
新約克市、ナイヤガラ)

英國(龍動市、リパブール市、マンチエスタ市、オクスフォールド町、ケンブ

リッジ町、ボンマウス町、サリスパリ町、ヨーク町、ニューカッスル町、
(其他略之)

蘇國(エジンバルフ市、グラスゴ市)

佛國(巴里市、ベルサエ町、マルセール市)

獨國(伯林市、ドレスデン市、ポーツダム町、コローン町)

澳國(維納市)

伊國(羅馬市、チエーリン市、ゼノア市、フロレンス市、ボローナ町、ベニス
市)

埃及國(アレキサンドリヤ、スエズ)

亞拉比亞國(アデン港)

印度方面(セロン島、新嘉坡港)

安南(サイゴン市)

支那(香港、上海)

第二回の國名及び地名

支那(上海、香港)

マレー半島(新嘉坡、彼南)

印度(カルカッタ、ダジョーリン、バンキブル、ガヤ、ブタガヤ、ベナレス、アラ

ハバッド、ボンペー)

亞拉比亞(アデン)

埃及(スエズ)

西班牙(ジブラルタル)

英國(龍動、ブライトン、ヘスチングス、カンタバリ、プリストル、バス、ボ

ルミンハム、チエスタ、リーズ、ブラッドフォールド、ベルレー、イルク

リー、リボン)

威士(バンゴ、カールナール、スノードン)
 蘇國(エジンバルフ、アバデーン、インバチス、ストラスペツフェル)
 愛國(ダブリン、ベルファスト、ロンドンデリー、ポルトラツシユ、ジャイ
 アントコリスウエー、ポルタダウン)
 佛國(巴里、マルセール)
 白耳義(ブラツセル、アントウオルブ、オステンド)
 和蘭(海牙、アムステルダム、ロッテルダム)
 獨國(伯林、ライプツヒ、コイニヒスベルヒ、ウイテンベルヒ、フランクフ
 オルト)
 瑞西(バーゼル、ツィリヒ、ルセルン)
 米國及加奈陀(新約克、ボストン、ケンブリツジ、バツファロー、市俄古、セ
 ントポール、シャートル、バンクスター)

第三回の國名地名は今回の紀行中にあれども、一覽の便を計りて左に
 表示す、

支那(香港、廣東)

南洋(マニラ)

濠洲(シドニー、メルボルン、木曜島、タウンズビル、ブリスベーン、クロイ
 ドン、パラマタ、ブライトン、ビーチ、サンドリンカム、セールスビル、ウ
 イリヤムスタウン、ホバート、アルバニー)
 南阿(ダルバン、ケイプタウン)
 阿非利加離島(ラバルマ、セントビンセン)
 英國(龍動、リバプール、ストラトフォールド、グランサム、ウールズソルブ、
 グリムスビー、セントジャイル)
 那威(クリスチヤニア、トロンジーム、トロカーデン、トロンソイ、リンデ

ン、ハンマトフェスト、ノルドカッブ、ボスコツブ、ジゲルミユールン、
アンタルスナース、モルド、ベルゲン)

瑞典(ストツクホルム、マルモ)

暹國(コツベンハグシ)

獨國(伯林、ライプツヒ、ミュンヘン)

瑞西(ツォリヒ、ベルン、ローサン、ゼネブ)

佛國(巴里、リオン、ロシエール)

西班牙(コルナ、ビゴ)

葡萄牙(リスボン、レキツス)

伯刺西爾國(リオジャチロ、ベトロボリス、サンパウロ、ガダバラ、サント
ス)

亞爾然丁國(ブイノスアイレス、チグレ、ラブラタ、リオサンチヤゴ)

ウルグアイ國(モレテビデオ)

フオ克蘭ド島(スタンレ)

智利國(サンチヤゴ、バルバライソ、バンタアレナス、コロチル、タルカノ

、サンベルナド、ペレケン、ロスアンデス、イキケ)

秘露國(里馬、カイヤオ、クララ)

墨士古國(サリナクルス、マンサニオ)

布哇島(ホノル、バリ、ワイバフ)

(九十五) 第二回世界周遊吟

第一回は余の未だ詩を能くせざりし時なれば、一回も試吟せしこと
なかりき、第二回には船中徒然を慰めんと欲して、豫め初學用の詩本を
携へ、初めて詩作を試み、數十首を得たれども、當時至て未熟にして、詩句

をなさるもの多かりしが、今多少の増訂を施して、此に附記すること
しなす、先づ五言絶句を掲げて、次に七言に及ぶべし、其次第は旅行の順
路による。

船過臺灣海峽

支那海南路、猶看皇國山、暮天雲宿處、一抹是臺灣、

安南海上吟

船窓日將午、風死暑如炊、食後呼冰菓、家山飛雪時、

新嘉坡舟中作

船走南溟上、晚來暑未收、雷聲時送雨、涼月掛檣頭、

船入彼南港

西航已二旬、冬日暖於春、船入彼南港、滿山綠葉新、

望喜麻拉亞山

竺北摩天雪、千秋照八紘、幾多雄嶽裏、獨占最高名、

印度車行

沃野無邊際、通宵駕鐵車、長風三百里、載夢到伽耶、

佛陀伽耶懷古

遠來成道地、俯仰感何窮、正覺山前月、尼連河上風、

印度洋中作

連日船搖動、波高貿易風、檣頭無觸目、渺々水連空、

船泊亞丁港

船泊亞丁港、望迷紅海雲、熱風吹不歇、終日醉炎氛、

蘇士晚望

沙原連兩岸、送暑去來風、蘇士船將泊、關山夕照紅、

船入運河

舟行遲似步，海峽狹如川，埃及山何處，平沙望漠然，地中海上吟

日沈地中海，風定水如油，月下認山影，不知何處洲

船入伊太利海峽

截波入伊峽，船靜好凭欄，雲幃晚來霽，滿天雪色寒

船中望伊山

風急舟行疾，伊山望裏遷，岸頭連麥隴，看訝鋪青氈

馬耳塞港夜景

電燈光底影，馬塞埠頭船，終夜忙來去，汽聲破客眠

日拉達海門所見

地中海門狹，石壁岸頭欹，峰頂砲臺在，舞風英國旗

西班牙海望月

高浪蹴船去，勁風捲雪來，夜深雲漸散，檣頭月徘徊

海上望英國

陸近潮流急，疾風送客舟，波間煙一帶，知是大英州

龍動客中作

廷無河畔路，晝日暗風光，車馬忙於織，行人走欲狂

英國郊行

車行龍動外，山遠望無邊，草色春如染，青々總牧田

英國東岸望佛海

館對佛南海，望中夕照收，星光波際見，點々去來舟

發英蘭到愛蘭舟中作

浦風晚來靜，雲斷月如環，船去汽烟起，忽埋英北山

愛蘭客樓望蘇山

街路繞灣曲，波光入客樓，海天望窮處，一髮是蘇州，
巴里偶成二首

孤客春風夕，來投巴里城，併看花與月，想起故園情，
巴里三春日，滿城來往譁，珈琲店頭客，深夜未歸家，
白耳義車行

麥隴連蘭野，無涯白義州，車窓春雨暖，風過綠將流，
和蘭野望

車入和蘭路，海牙城外煙，夜來霖雨歇，春水漲低田，
訪拿翁古戰場

鐵車破綠烟，麥色滿春田，古戰場何在，岡頭獅子眠，
伯林即事

伯林初夏月，桃李競春榮，薄暮公園路，人傾麥酒行

露國郊行

麥田歐北野，木壁露人家，五月春猶淺，寒林未着花，
車入露都

曠原濶於海，千里鐵車孤，一路天將暮，截風入露都，
瑞西初夏

驛路春風過，瑞山雪漸消，客樓人未滿，湖畔夏窸々，
米國新約克即事

港上萬船留，岸頭屋作邱，入街堪仰望，三十二層樓，
北米車行三首

米野連千里，百花已盡時，車窓何所見，麥色綠無涯，
米北湖頭路，鐵車日夜趨，茫茫望無際，何處是俄都，
洛山三伏日，峯々殘雪堆，隔溪汽烟起，忽見鐵車來，

七言絶句は五言と意趣を同うするもの多く、重複の氣味あるも、左に其全部を掲ぐ、

火輪日夜走波間、千里猶看皇國山、支那海南望將斷、白雲宿處是臺灣、

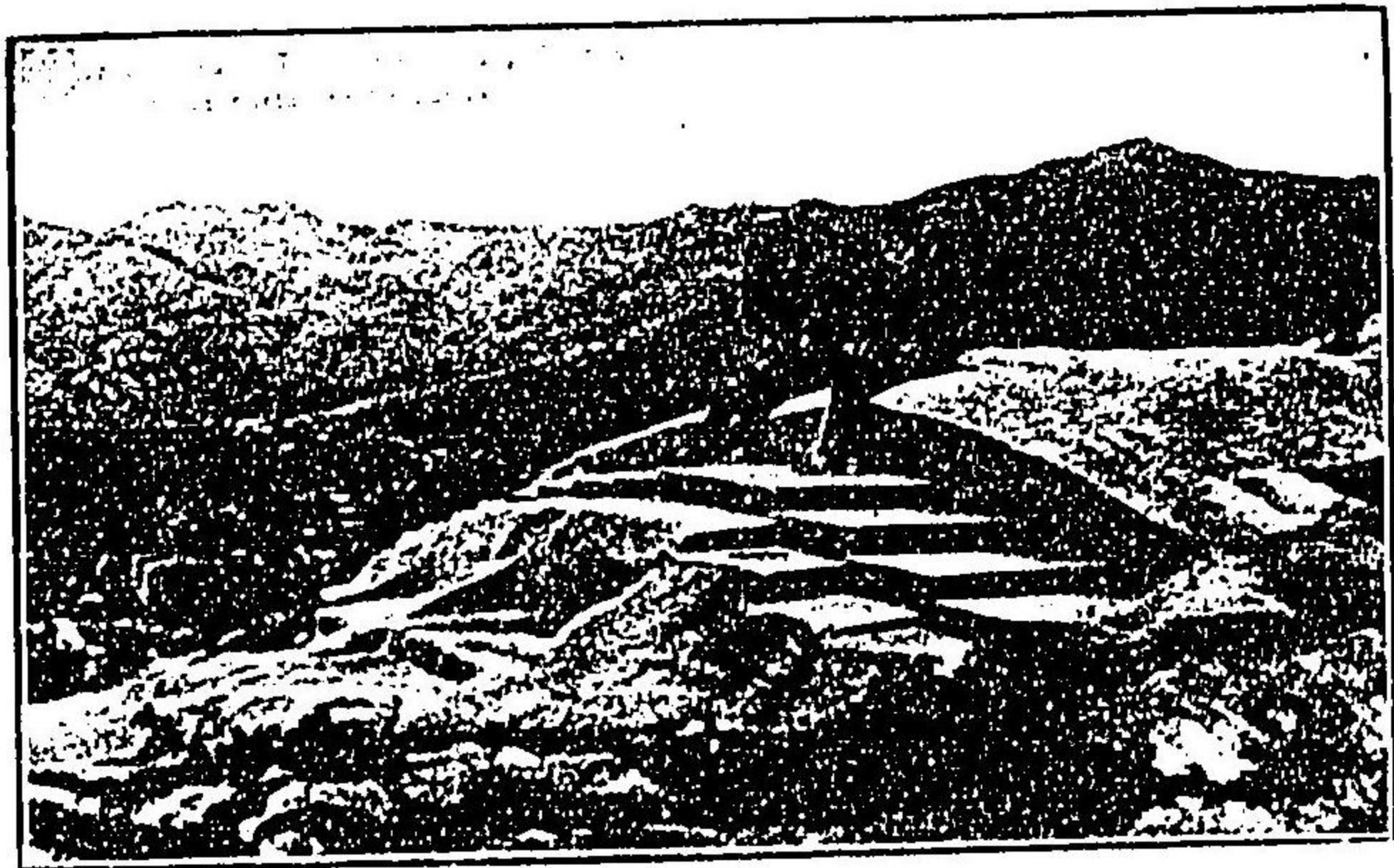
舟向太陽直下馳、安南海上暑如炊、欲涼食後呼冰菓、正是故山飛雪時、

船泊竺洋東北關、連檣林立幾灣々、晚雷送雨天如洗、涼月高懸赤道山、

雪峰巍立碧雲間、鎮壓閣浮幾萬關、鶴林一夜煙散後、空留唯我獨尊山、

嶽勢巍々壓四陲、摩天積雪幾千秋、人間一接斯光景、豪氣將吞五大洲、

(五十四)



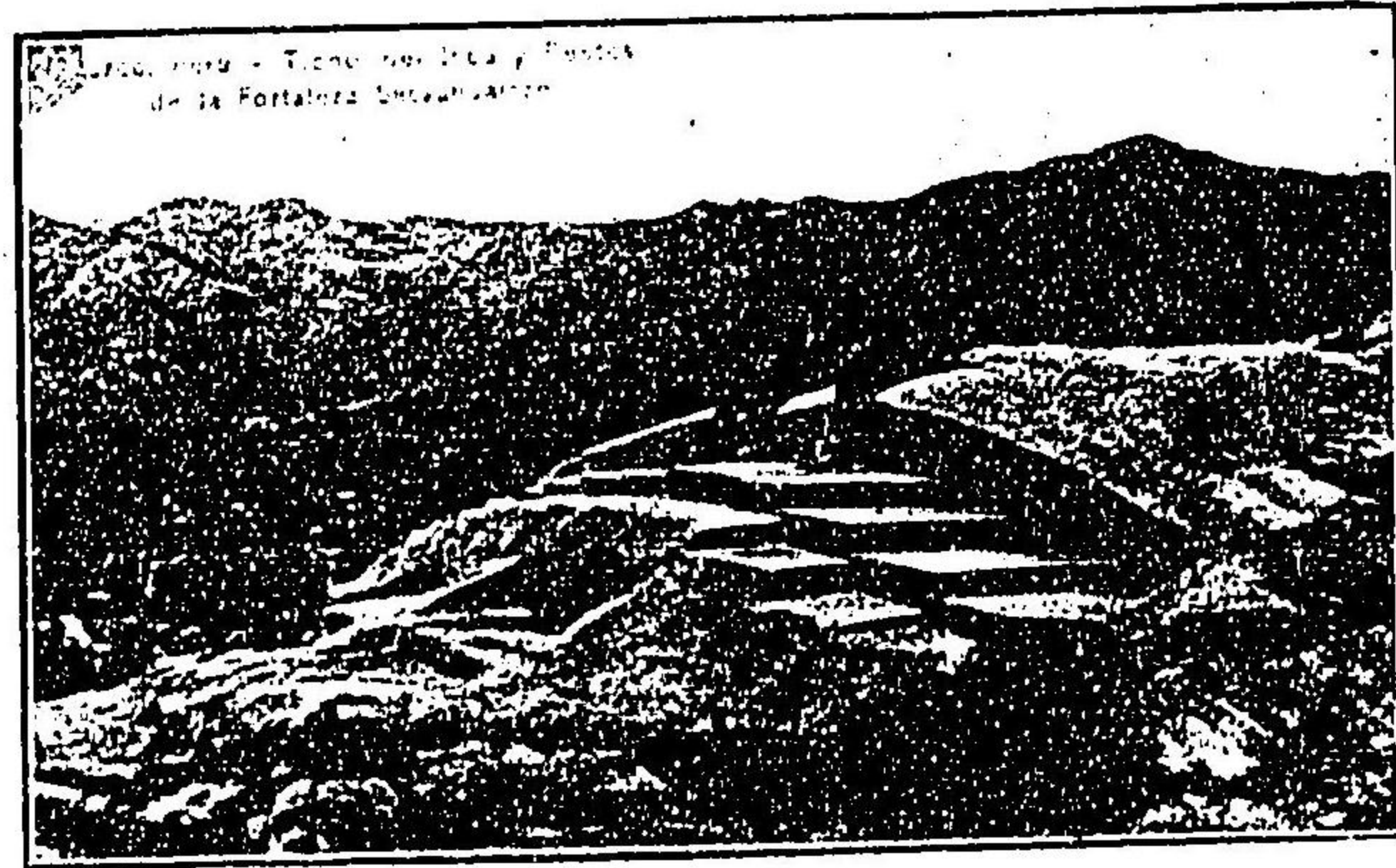
秘嶽イカン古跡

(六十四)



景士古風俗

(五十四)



秘跡イカン古跡

(六十四)



盛士古風俗

南半球五萬哩

二八八

七言絶句は五言と意趣を同うするもの多く重複の氣味あるも左に其全部を掲ぐ

火輪日夜走波間、千里猶看皇國山、支那海南望將斷、白雲宿處是臺灣

舟向太陽直下馳、安南海上暑如炊、欲涼食後呼冰菓、正是故山飛雪時

船泊竺洋東北關、連橋林立幾灣々、晚雷送雨天如洗、涼月高懸赤道山

雪峰巍立碧雲間、鎮壓閭浮幾萬關、鶴林一夜煙散後、空留唯我獨尊山

嶽勢巍々壓四陲、摩天積雪幾千秋、人間一接斯光景、豪氣將吞五大洲

迦耶懷古欲眠難，早起回頭獨倚欄，正覺山前殘月淡，尼連河上

曉風寒

卓然高塔拔林壘，堪喜世尊跡不虛，想起三千年古曉，明星光底

認真如

古城依舊恒河邊，聞說如來轉法輪，遺跡荒涼何足怪，魔風毒霧

幾千年

檣頭回望氣何雄，竺海波高貿易風，夕日沈時雲漸散，一痕月印

碧空中

高浪漲天船欲沈，長風捲雪晝陰陰，大人皆病兒童健，始識無心

勝有心

海風吹斷月如環，望裏送迎英北山，汽笛一聲驚客夢，輪船已在

愛蘭灣